

目次

第1部 総論

研究の概要		5
全体総括 ー集住の理念構築に向けてー	田口 洋美	13

第2部 先史～古代の人々の集住に関する地域密着型研究

研究の概要と総括	長井 謙治	21
遺跡データベースから見た八戸の集落変遷一万年 ー新井田川流域における集落の成立と解体ー	長井謙治・近藤康久	27
八戸市域の縄紋時代早・前・中期の集落 風張から是川へ	安斎 正人	45
ー新井田川下流域における縄文時代後・晩期の遺跡動態ー	小林 圭一	53
列島の中の八戸 ー先史時代、なぜムラができ消えたか？ー	佐藤 宏之	93

第3部 地域比較研究（東北中世～現代）

研究の概要と総括	蛭原一平・竹原万雄・中村只吾	101
骨寺村・本寺地区における中心の変遷について（再論）	入間田宣夫	107
「春木」伐り出しと川流し ー八戸藩島守村を事例にー	菊池 勇夫	127
八戸藩の狼荒と対処 ー八戸藩庁日記からー	村上 一馬	139
中山間地集落の人口・景観・生業の変遷 ー岩手県一関市巖美町本寺地区を事例としてー	竹原 万雄	161
鯉釣り溜め漁導入前後の唐桑村の状況	中村 只吾	177
三陸沿岸地域の御林と村の生存戦略 ー仙台藩牡鹿郡女川組を事例としてー	高橋 美貴	193
船の移動と港の盛衰	川島 秀一	207
史料紹介 鈴木富貴子『古館家年中行事』（翻刻）	佐藤 未希	221

第4部 地域比較研究（地域横断型研究）

「空から見た東北」という試み	蛭原一平・田口洋美	249
東北の民家	鈴木 清	261

第5部 地域比較研究（海外研究）

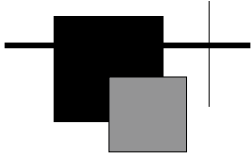
海外研究の総括	田口 洋美	297
ロシア極東地域の先住民族の土地利用の変遷 —ソ連時代の衛星写真の分析を元にした簡潔な報告—	佐々木史郎	301
赫哲族、鄂温克族、鄂伦春族に関する現地調査報告	思沁夫・侯儒	311
定住化にみる苦聰人の社会的・文化的変遷 —中国雲南省紅河州金平県聯防村を事例として—	謝 黎	331
中国雲南省におけるハニ族の「村落＝プカ」	阿部 朋恒	349

第6部 研究会・シンポジウム講演録

民俗・人類班／歴史班合同応用研究研究会		363
パネルディスカッション「これからの『集住のかたち』」		405

附編 本事業の概要一覧

フィールド調査・出張一覧		423
シンポジウム・研究会一覧		439
本事業による刊行物一覧		446



第 1 部

總論

研究の概要

1 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本研究の目的は、考古学、歴史学、民俗・人類学と法学あるいは工学系環境デザインといった学問分野の協働研究体制のもと「1万年という長期的タイムスパン、その歴史社会的コンテキストの上に21世紀型集住の再生、創出理念の構築を図る」ことにあった。本研究センターは、過去2期10年間にわたり、オープン・リサーチ・センター整備事業「東アジアのなかの日本文化に関する総合的な研究」と「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的综合研究」を実施してきた。これらのプロジェクトでは日本文化の東アジア地域における地位を追究し、後者では、考古学、歴史学、民俗・人類学という三学協働体制のもと、環境・生業・技術といった具体に着目し、東北地方を中心に人々の環境への社会文化的適応プロセスの把握に努めた。今回のプロジェクトはこれらの成果を踏まえ、「集落」として人が集い暮らすことの意味と機能をより鮮明に捉え、過疎・高齢化および居住の流動化社会における共同体創出のための新たな理念構築を目指した。ここでいう理念とは、人々が合意可能で、了解できる集住、集落形成の意味付けに他ならない。「伝統的」農山漁村において基盤生業であった農林水産業やこれに立脚した家制度（家の相続形態）、集落自治の変容、あるいは地方寺社の統合など、従来の集落やより広域的な地域社会で人々の結束を支えてきた生活要素に大きな変化が生じているなかで、その作業は喫緊である。

研究においては各学問分野で互いに共通理解可能な資料の提示と相互連関が求められた。そのキーは〈集住、居住、集落〉場所性であった。当然、そこには生き方（生業のあり方）との関係が現れるわけであり、社会構造や生業技術構成も関

わることになる。つまり極めて複雑な関係の総体としての集住、居住、集落ということになる。また、このような複雑な総体をいかに具体的な資料化へと導くかという問題も生じてくる。これについては、本学が芸術系大学であるという特色を活かし、視覚的に把握可能なより開かれた資料作りを心掛けた。

本プロジェクトでは、これらの理念の提示と同時に、地域再生の担い手（地域の相続者）を育成するという実践的課題にも挑戦した。すなわち、PDやRA、その他学生たちの研究調査活動への積極的参画を促し、東北文化研究の発展に不可欠となる若手研究者の育成を同時に行うことでポスト過疎時代の「若者たちの東北」の実現を目指した。

5年間のプロジェクト期間のうち、1年目から3年目までを基礎研究期間、4・5年目を応用研究期間とし調査研究活動を推進した。基礎研究期間には、考古、歴史、民俗・人類の3班に分かれ、国内外の集落を対象に歴史社会研究に取り組んだ。また同時に、地域再生の担い手育成や、地域づくりへの学術成果の活用方法を探る実践的研究に着手し、プロジェクト期間全体で軌道に乗せた。後期の応用研究期間には基礎研究を補足的に継続しつつ、各班の研究成果の統合へと軸足を移した。その際、法学あるいは工学系環境デザインの専門家とのコラボレーションも図り、歴史社会研究の成果を現代社会で了解可能な理念構築へとつなげた。

基礎研究期間には、3つの学問分野ごとの班を活動の基本単位とし、適宜、班を横断した共同研究も実施した。さらに、先史時代を主対象とし自然環境を軸に人類史規模での集住のあり方を考究する「環境史研究」（本報告書では「先史～古代の人々の集住に関する地域密着型研究」と、中世以降現代までを主対象に、自然のほか政治・経

済的環境をも重視して集住の動態を追究する「地域比較研究」という二つの研究テーマを設定した。前者には考古班、後者には歴史班、民俗・人類班が主に従事した。

一方、地域再生の担い手育成などを図る実践的研究を「地域資源活用研究」とし、記憶や古写真、戦前絵はがきなどを地域資源と位置づけ地域づくりへの活用方法を探った。その活動は環境史研究や地域比較研究とも連動しており、PD・RAや大学院生・学生にも積極的参画を促し、地域の諸課題解決に向け主体的に取り組み、地域再生の牽引者となってゆく若い人材の育成を図った。

なお、当初は地域比較研究、環境史研究、地域資源活用研究を、上述した三班の連携的な活動単位（ユニット）として設定していたが、実際の活動面で煩雑さが生じたため、3年目から活動単位は班のみとし、上記の3区分はそれぞれ研究テーマの区分に置換した。

2 研究組織

本プロジェクトは田口洋美を代表・総括とし、学内外の研究者計24名からなった。基本的には学問分野ごとの3班に分かれ調査研究を推進したが、テーマや対象地域により班を横断した共同研究を実施した。各班の研究内容は、月に数回の学内会議や年に1、2回の全体研究会などで情報共有と研究計画の調整を図った。2年目はRAで、3年目よりPDとして参画した佐藤未希は洋画領域を専門とし、視覚的資料制作その他の研究活動に従事した。同じく洋画領域を専門とする大学院生若干名からも適宜、調査への参加や視覚的資料制作などの協力を得た。社会人大学院生である守谷英一には研究協力者として調査その他での協力を得た。本学大学院出身の井筒桃子が絵はがき・古写真アーカイブス関連作業の中心的な担い手となった。その他にも学内外の複数名の研究協力者、大学院生から本研究での諸活動に際して協力を得た。さらに、考古班による環境史研究では、八戸市域を対象とした調査・研究を、現地の是川縄文館との密接な連携のもと進めたことが、組織運営上の特筆事項といえる。

3 研究成果の概要

1. 環境史研究および地域比較研究

(1) 環境史研究

環境史研究として考古班では、八戸市一帯を対象とし過去一万年間にわたる人々の集住（集落）に関する歴史動態研究、ならびに河川流域を単位とした遺跡群の比較研究を推進した。調査上の都合により縄文社会研究と古代社会研究とに区分したが、両者は連携的な関係にある。

1年目の縄文社会研究では、「集落の歴史動態研究」として、八戸市において2年目以降、本格的な調査を行う準備のための班員検討会を開き、フィールド調査の企画、関係諸機関との調整、情報収集を行った。具体的には、GISを活用した八戸市域の縄文集落遺跡データベース作成に向けた準備を開始した。その他に環境史・集落遺跡の実地調査を計3回行った。古代社会研究でも検討会を開き、古代竪穴建物を中心とした遺跡情報、地形的・環境的情報の集成に着手した。

2年目は長井が加わり研究レベルが向上した。縄文社会研究では遺跡データベース作成に向けた研究会の開催や遺跡集成に向けた4度の検討会を行った。そして①参加メンバーが相互利用可能な「研究データベース」、②八戸市の遺跡発掘最新情報を網羅的に捉えるための「管理データベース」の作成に着手して、関連データベースモデルを構築した。その中間的成果を八戸市民に公表するため、公開講座を開催した。一方、古代社会研究ではデータベースの構築により5世紀後半から11世紀までに5度の集落動態の画期を明らかにした。立地に関しても7世紀と9世紀後葉に変化が見られることを明らかにしている。また今年度からは、山形県高畠町日向洞窟遺跡群の考古学的調査（発掘）も実施し、縄文草創期における人々の集住形態と環境との関係に関する研究にも着手した。この調査には学内外の多数の学部生・院生や本学卒業生が参加した。

3年目は、前年度からの基礎研究を継続させると同時に、応用研究を見据え、新たに流域比較研究を立ち上げた。具体的には三面川流域、津軽ダム、小又川流域、最上川流域の広域比較を目的と

しており、今年度は研究集会を開催した。一方、八戸市における集落の歴史動態研究では、前年度の続きとして研究データベースの質的向上を目指した。とりわけ遺跡データベース作成に向けた研究会を開催し、遺跡集成研究の実現に向けた4度の検討会を行った。また、古代班でも八戸市域における遺跡データベースの構築が進んだ。これにより、5世紀後半から11世紀までに5度の集落動態の画期が存在したことが明らかになった。立地に関しても7世紀と9世紀後葉に変化が見られることを明らかにしている。今年度は他に2回の研究会を実施し、理論面の強化も図った。一つが、縄文時代の集落構造を理解するうえで重要な鍵となる土坑の認定に関するものであり、もう一つが東北縄文社会において大型集落が盛衰した背景を民俗考古学的見地から議論したものである。また、考古班研究全体の中間的報告を兼ね本年度も公開講座を八戸市で実施した。

4年目は、基礎研究を継続させるのと同時に、流域比較研究の具体的な研究を開始した。また、八戸市域における集落の歴史動態研究においては、前年度の続きとして研究データベースの質的向上を目指した。さらに考古班の研究成果のまとめに向け、研究会と公開講座を八戸市で行った。「古代班」でも、継続してきた①八戸市周辺の遺跡のデータベースに基づく基盤研究、②東北古代集落変遷に関わる考古学的・環境史的研究の二つについて、それぞれ具体的な調査と研究の進展がみられた。

5年目は研究の総括を行った。とくに研究対象フィールドを「八戸」に限定し、過去4年間に蓄積した遺跡データの総合的な分析を進めた。

以上のように、考古班では、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館が作成した遺跡台帳をベースとして、青森県教育委員会による遺跡情報、その他この数年で新たに調査された遺跡項目を加えた最新の遺跡データベース（遺跡DB）を作成することができた。さらに、その分析を通し八戸市域を対象とし、グローバルな気候変動に対応する縄文時代以降の集落変遷の画期と立地変遷を明らかにすることができた。すなわち、縄文時代早期中葉における遺跡数の急増と低地利用、前期（海進

後）における古八戸湾沿岸部への遺跡立地と拠点形成、中期における内陸部への遺跡進出と中期末葉から後期前葉における遺跡数の倍増、後・晩期における拠点形成と遺跡数の縮小、古代におけるドラスティックな集落変遷の過程を捕捉することができた。

(2) 地域比較研究

歴史班と民俗・人類班が取り組んできた地域比較研究は、日本東北地方を中心とした国内事例を対象とするものと、中国（中華人民共和国）雲南省や内蒙古自治区・黒竜江省の少数民族社会を対象とする海外研究に大きく分けられる。後者の海外研究は民俗・人類班が主導してきた。また、前者の国内研究では、特定の集落や地域を対象とした個別事例研究だけでなく、東北地方全体を対象として集落景観や民家などに着目し集落の拓かれ方や生業の変容パターンを考察する、「空から見た東北」（田口提唱）や「海から見た東北」（川島・森本提唱）や「民家から見た東北」（鈴木・田口提唱）といった地域横断型の比較研究も行ってきた。これら地域横断型の比較研究も民俗・人類班が主に担ってきた。

東北地方を対象とした個別事例研究では基礎研究期間での資料収集や事例分析（研究会等での議論）に関しては歴史班と民俗・人類班とで分かれて進めてきた。歴史班では、主に中世から近・現代までの時間幅での、東北地方を主とした「集住の関係史」を解明することを共通のテーマとした。すなわち、集落の形成・維持の前提となる、土地や水面といった空間の所有・活用状況、信仰・宗教や地域リーダーといった集落の紐帯となる要素など、広く物質から精神までを手がかりに、時代や地域ごとの集落結節の様態を捉え、それらがその時期その場所で成立していた背景を明らかにすることを目指した。民俗・人類班も同じく、集落紐帯の要素（あるいは集落維持の「仕組み」）に注目し、近現代以降に発生した自然災害や政治経済的な環境の変化に対しそれら様々な慣習・権利関係をいかにつくり替え集落・文化を継承させてきたかについて明らかにすることを目指した。また、現代社会において、このような「伝統的」文

化の継承が困難になっている（文化継承リスク（田口提唱）が高まっている）背景についても焦点を当て、海外研究との比較・統合を図っている。

歴史班の主な調査研究フィールドは、青森県八戸市南郷区島守地区、岩手県一関市巖美町本寺地区、山形県山形市南原町旧前田村地区、山形県山形市蔵王上野地区、宮城県気仙沼市唐桑町鮎立地区である。一方、民俗・人類班では国内の事例研究に関しては、後述する「地域資源活用研究」でのブックレット作成のための資料収集（①、②）を兼ねた調査研究を行った。なお、歴史班でも本寺地区や鮎立地区を対象に「東北一万年のフィールドワーク」シリーズのブックレットの作成・刊行を行ったが、とくに鮎立地区に関しては、民俗・人類班の川島と鈴木が現地調査の学生指導に協力するなど、両班の協働が見られた。

これらブックレット刊行以外に、とくに歴史班では個別事例研究の成果として、村上が中心になり調査・編集をおこなった『八戸藩庁日記狩猟関係史料集』や、竹原による『前田村文書目録』、竹原・中村による『山形市蔵王上野文書目録』といった史料集、文書目録の刊行がなされた。とりわけ『八戸藩庁日記狩猟関係史料集』の編集は、本寺地区など水田利用に基づく集落の変遷を軸に据えた他の歴史班の研究を相対化させるためおこなわれたものであるが、先に刊行した「東北諸藩におけるマタギを中心とした狩猟関係文書の研究」（田口・村上提唱）による『弘前藩庁御国日記』狩猟関係史料集』（全三巻、いずれも村上・竹原・中村編）とあわせ藩政期の北東北諸藩での野生動物被害の実態とその対策、あるいは集落防衛のあり方の解明に寄与する大きな成果である。野生動物と人間との軋轢（いわゆる獣害問題）が深刻化している現代社会においてもその学術的意義は大きい。

既述したように、歴史班と民俗・人類班は、鮎立地区でのブックレット作成調査以外では協働した調査活動はおこなってこなかった。しかし、プロジェクト3年目後半に着手した応用研究として、合同の研究会を行ってきた。その一つが入会を含めた土地所有に関わる法制度の研究会（2015年1月開催）である。また、翌2016年10月には東京農工大にて、漁業権に関する研究会を合同で

実施した。これらの研究会では、様々な自然資源の利用と所有に関する権利の集まり、総体として「集落」を捉え、それらがとくに近現代以降いかに成立してきたのかを通史的に俯瞰するとともに、生業構造の変動に伴う農林漁業の衰退や、過疎高齢化など現代の東北社会を取り巻く社会的インパクトによっていかに変質しているのか、あるいはいかに継承しているのかを議論し、情報の共有を図った。

次に、民俗・人類班が中心となり実施してきた地域横断型の比較研究と海外研究についても触れたい。

地域横断型の比較研究の中でもとくに大きな成果を得たのが、「空から見た東北」である。これは空から集落景観を俯瞰することで、集落の拓かれ方や生業・自然利用の現況と変化パターンについて広域的な共通性と地域個性を明らかにし、その背景を考察するものである。分析資料には国土地理院や林野庁が発行している空中写真の他、研究員が小型飛行機に搭乗し、集落後背地全体を撮影した写真を用いる。本プロジェクト全体で5回の撮影調査を実施し、茨城県北茨城市から青森県三沢市までの太平洋沿岸部を含む、東北6県と広範な範囲を対象に集落の記録を行った。撮影した写真の一部は、HPで一般公開し、市民に広く活用を呼びかけている。また、初年度に本資料を用いた公開講座も開催した。同様に海からの視点に基づき集落変遷を考える「海から見た東北」に関しても、初年度に公開シンポジウムを実施し、プロジェクトの初期段階からそれらの研究視座の提起を行った。

海外研究に関しては、中国東北部（内蒙古自治区、黒竜江省）と雲南省の少数民族集落を調査対象地とし、初年度に実施した予備調査に続き、前者は3回の、後者は5回の本調査を行った。これらの調査対象地は、定住化政策等により大きな生業・社会変容を経験した社会であり、「伝統的」文化の継承のあり方が注目される。2年目（2014年2月）に、国内外の研究協力者を招き、日本と中国で起きている「文化継承リスク」に関する国際シンポジウムを開催することで、国内の事例研究を比較相対化していく研究視点を明確化させ、

広く社会に提起することができた。

以上のように地域比較研究での成果は関連する論文や、シンポジウム・研究会、HP等を通じて積極的に公開を行ってきたが、加えて本研究センターで編集発行している雑誌『東北学』でも関連する特集テーマを組んで情報発信に努めてきた。すなわち「災害の民俗知」(3号)、「棚田のアジア」(4号)「復興の海」(7号)、「東北、明日の大地」(8号)である。

以上の環境史研究および地域比較研究の研究成果の総括として、最終年度の10月に東北歴史博物館にてクロージング・シンポジウム「東北の集住を考えるーポスト過疎化時代を生きるー」を開催した。さらに、それらの議論を受け、かつ応用研究として実施してきた法制度研究会の成果を踏まえ平成29(2017)年3月に工学系の環境デザイン、都市計画分野との研究会を開催した。本研究プロジェクトでは、集住(人が集い暮らすこと)や集落の意味と機能(集住・居住・集落)といった「場所性」を歴史文化研究のなかから抽出することにより、歴史社会的コンテクストに沿った共同体、コミュニティ創出の理念構築を最終的に目指してきた。また、「家」制度や土地所有制度、あるいは漁業権をはじめ山野河海にかかる所有権・占有権・利用権などの権利関係とその相続制度はそうした「場所性」を構成する重要な社会的要素であり、本研究プロジェクト応用研究における主要な分析視点となっている。そこで、各班が取り組んできた事例研究の統合の方向性を視野に入れながら論点の整理とテーマ設定を行い、これら「場所性」に関する共同研究会を随時開催してきた経緯がある。本研究会では、農村計画や都市計画など工学系環境デザイン分野の研究者たちと都市論、集落論、農村論に関する議論を深めることができた。そして、問題意識・背景の共有や研究課題のすり合わせを図り、集落再生や地域再編に係る制度設計、政策立案においても了解可能な集落創出理念の構築、提示へと本研究プロジェクトの最終的成果を導き出すことにした。

2. 地域資源活用研究

本プロジェクトでは、記憶や古写真や戦前絵はがきなどの記録資料を地域資源として位置づけ収集を図るとともに、今後の集落再生をめぐる議論に役立つ活用のあり方を提示することを目的とする。加えて、学生やPD、RA等の積極的参加を求め、地域再生の牽引者となってゆく若い人材の育成を図る。先の環境史研究や地域比較研究とも連動し両研究やその成果を具体的地域実践に結びつける役割も持つ。本研究での活動内容は5つに大別される。①ブックレット「〈東北一万年のフィールドワーク〉」シリーズの作成・刊行、②ブックレット「〈むらの記憶〉」シリーズの作成・刊行、③集落の景観および分布に関する空中写真の収集・撮影、④地域資源のデジタルアーカイブ化と活用、⑤その他の若手活用、である。

①は、学生主体の調査の成果をブックレット〈東北一万年のフィールドワーク〉シリーズにまとめてゆくものである。本プロジェクトでは北秋田市阿仁根子地区、山形市滝山地区、一関市巖美町本寺地区、気仙沼市唐桑町鮪立地区、鶴岡市大鳥地区、西置賜郡白鷹町深山・萩野地区を対象とした計6冊を刊行することができた。

②は、東日本大震災被災地やダム建設による廃村など、災害その他の契機により、大きく姿を変えたり、失われてしまったりした集落を対象とする。調査成果はブックレット〈むらの記憶〉シリーズにまとめてゆく。調査には学生も部分的に参加している。これまでに川島が長年調査・研究を行ってきた宮城県気仙沼市小々汐集落を対象に、被災前の年中行事をまとめたブックレットを刊行した。また、戦後開拓され、1981年にダム建設に伴い集団移転したむつ市川内町(旧川内村)野平を対象に、森本・鈴木・蛭原が中心になり調査を行い、ブックレットにまとめた。これら2冊のブックレットは、刊行後、元住民や関係者からたくさんのお問い合わせを受けたように高い反響を得た。

③は、民俗・人類学による「空から見た東北」「海から見た東北」と連動している。2014年8月には、「空から見た東北」で撮影した写真を一般公開する場としてのWebサイト『空から見た東北』を立ち上げ、広く市民に向けその活用を促してい

る。これは、過去10年間にわたり本研究センターがオープン・リサーチ・センター整備事業を通して構築してきた「東北文化研究センターアーカイブス」の新たな一翼として位置づけられる。

④は、上記アーカイブスの一環であり、戦前絵はがきや古写真の収集と、Webサイト「近現代の絵はがき・写真」での公開を内容とする。プロジェクト2年目に、山形県内の絵はがき収集家より合計約3万点を借用し、そのなかから東北地方や自然災害に関する絵はがきを選び、デジタルデータ化とWeb公開の作業を進めてきた。プロジェクト期間内に約14,215点のWeb公開が完了させることができた。その他、戦前絵はがきを中心に、新たに572点を購入し、デジタルデータ化とWeb公開を完了させた。本データベースは、学外でも広く活用されるものとなっている。

⑤その他、上記①～④に含まれない若手（学生など）活用もまた、本研究の一環である。特筆すべきものに、考古班が山形県高島町で2013年より実施してきた洞窟遺跡群の考古学的調査が挙げられる。この国指定史跡・日向洞窟遺跡周辺部における考古学的調査には、本学学部生・大学院生の他、東北大学や富山大学、早稲田大学、國學院大學、立命館大学、茨城大学の大学院生・学部生など、多数の学生が参加した。研究と教育の連携という点で重要なパイプを構築させることを目的とした本調査には、まさに地域からの熱い支援を得て実現できた。山形県高島町の地域資源を開発し、その研究成果を地域に還元するという実践教育の場として、あるいは若手研究者の育成の場として、山形県高島町における洞窟遺跡群の考古学的調査は、貴重な試みになったといえる。

総じて、上記①～⑤の各種調査や作業には、PD・RAほか、学内外の学部生・院生の積極的・継続的参加を得ており、若い人材育成の取り組みも順調に行うことができた。

<優れた成果があがった点>

本プロジェクトの基礎は集落（集住）に焦点を当てた歴史社会研究であり、その成果をふまえながら地域資源活用研究と総称する一連の研究教育活動を展開し、地域社会を支える担い手育成や集

落変遷に関する記録資料の作成を図る点に特色がある。すなわち、地域再生への実践性および教育資源開発に重きを置いている。具体的成果の一つはブックレット形式の地域誌の作成と地元への還元であり、プロジェクト全体で「東北一万年のフィールドワーク」シリーズで6冊、<むらの記憶>シリーズで2冊を刊行しえた。また、考古班による八戸市域での遺跡データベースの構築および民俗・人類班のWebサイト「空から見た東北」を通じた空中写真の一般公開も研究成果の社会的還元という点で特筆すべきものである。これらの資料は無論、広く研究者コミュニティにも開かれており、東北歴史文化の研究拠点の基盤となり得るものでもある。さらに、具体的な資料収集に基づき現代社会における「文化継承リスク」に関する問題を提起できたことも本プロジェクトでの大きな成果である。従来、文化継承に関しては民俗芸能などに限って議論されることが一般的であり、生業や集団の有する自然の利用・所有権にまで敷衍させ、かつ強い文化断絶を経験したであろう中国少数民族社会との比較を試みた点で学術的インパクトは大きい。その点でも、プロジェクト2年目に「文化継承リスク」をテーマとした国際シンポジウムを開催したことの意義は大きいと言える。

<課題となった点>

環境史研究および地域比較研究においては、東北地方における過去1万年にわたる集落動態の把握という極めて大きなテーマを対象としたため、事例研究が分散しがちで、とりわけ班を越えた議論が深まらなかった点は大きな課題である。また、当初の目論見よりも都市計画や農村計画、ランドスケープデザインなど地域整備と関わる工学系環境デザイン分野での議論を把握するのに時間がかかり、連携研究が進まなかった。その結果、各班の研究は高度化し、かつ資料蓄積も進んだものの、とくに考古学や歴史学による歴史社会研究の成果を新たな集住のための理念構築に十分に取り込むことができなかった。

<自己評価の実施結果と対応状況>

本プロジェクトでは、月に数回の学内会議や年に1、2回開催する全体研究会において研究の進捗状況や研究体制・運営方法について見直す体制をとってきた。また、3年目に行われた中間審査の結果を受けて、4年目の前半期にも全体研究会を開催し、研究計画の再調整を図り、審査結果を研究運営に反映させるよう努めた。

<外部（第三者）評価の実施結果と対応状況>

本プロジェクトでは上記の通り自己評価体制をとってきたが、基礎研究期間においては考古学、歴史学、民俗・人類学という学問分野に分かれ、専門性の高い研究調査活動が展開されたため自己評価だけでは不十分と判断した。そこで、当該学界がその見識の高さを認め、本研究課題を十分に評価しうる関連業績のある学外の評価委員による外部評価委員（各分野一名ずつ）を組織し、これまで開催したシンポジウムや全体研究会での議論と成果刊行物を確認していただいた。また、中間報告においては進捗状況の評価を受けた。

<研究期間終了後の展望>

本研究は集落という「人々が集い住む場」に着目した歴史社会研究であり、従来の景観論など工学系環境デザイン分野を中心に進められてきた集落・コミュニティ研究では等閑視されがちな歴史動態的視点に基づく集落形成論を提示しうるであろう。形而下のみならず形而上的な、理念・哲学的な要素を組み込んだものとしても特色あるものとなろう。本研究はまた、東北地方の集落史を、日本列島にとどまらない「開かれたアジア」という巨視的視点から捉え直し、山民、漁民といった人々のダイナミズムに光を当てる試みでもあり、新たな東北像の構築につながるであろう。加えて、地域社会の担い手育成や地域民俗誌の作成を通して、それら学術的研究成果の社会還元や教育資源化、すなわち地域再生という現代的課題に対する実践的成果を同時にもたらしうるであろう。そしてまた、それらを担う本研究センターが東北地方再生を牽引する研究拠点たる立場を構築しうることもつながると見込まれる。

<研究成果の副次的効果>

地域資源活用研究による成果である北秋田市阿仁地区に関するブックレット作成の過程で収集、作成した記録資料は、「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」や伝統的狩猟技術の記録と保存といった、北秋田市がすすめている文化事業での基礎資料の一部として活用が見込まれている。また、「空から見た東北」で撮影した写真は既述の通り、ホームページにて一般公開を行っている。これらは、地形や植生など集落の周辺環境の把握に適した視覚資料であり、地方自治体での防災計画や、地域整備計画等の立案において効果的な資料となり得る。今後もこの写真を用いた写真資料集の刊行などを通し、積極的利用を促してゆく予定である。なお、本研究センターのもう一つのアーカイブス HP「近現代の絵はがき・写真」は学外でも広く活用されている。

全体総括

—集住の理念構築に向けて—

東北芸術工科大学芸術学部／東北文化研究センター

研究代表

田口 洋美

1 研究プロジェクト全体を俯瞰して

5年前、筆者らは本研究プロジェクト『環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究』の研究テーマの構想に当たって以下のよう

に述べた。
「本研究センターでは平成19年度より文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究』を実施し、考古学、歴史学、民俗・人類学という三学協働体制のもと縄文時代以降の東北地方における人為的生態系史の考究をおこなってきた布石がある。

本研究ではその姿勢を踏襲しつつ、東北地方の海、山、平地のモデル集落を選定した上で過去一万年にわたる集落の生成から解体に至る過程と消長要因を解明することに課題を特化させる。特に土地利用と地域資源の利活用形態、生業技術や民俗知など地域文化の継承、信仰や共同体アイデンティティのあり方という集落存続の三つの側面に注目し集落動態を把握する。加えて山民（出稼ぎ狩猟者の中中部北陸地方への猟場の開拓と定着）と漁民（紀州漁民の東北進出と漁場開拓と定着）を取り上げ、動態を実証的に捕捉することで『人々の生きようとする意志』を抽出し、東北という地と人々の有する躍動感を評価するパラダイムへと転換を図る。これらの集落動態を比較相対化するため、東アジア一帯を射程とする『開かれた東北』という巨視的視点で地域社会、集落形成のダイナミクスを捉え、最終的には現代のグローバル化社会に対応しうる集落再生のための新価値創出を図り、次世代型地域社会モデルを提示することを目指す。」

これらの課題に応えるため、本研究プロジェクトでは前半の3年間を基礎研究期間、後半の2年間を応用研究期間とし、基礎研究に関しては考古班、歴史班、民俗・人類学班を中心に集落研究を実施し、応用研究では班を主体とした個別の調査、基礎資料収集活動に加え、班を横断した共同研究を実施してきた。さらに、後半の2年間では工学系環境デザインや都市工学分野の都市計画、地域計画、さらに法社会学、制度史分野の専門家との協働も図り、最終的な成果である個別事例研究のモデル化と理念構築に関する議論を深めてきた。

これら過去5年間に渡る研究活動内容は、平成23（2012）年度～平成27（2015）年度まで年度研究成果報告書で報告してきた。あわせて研究成果についても刊行物、HP、シンポジウムや公開講座において逐一公開を行ってきた。例えば、本研究センター発行の『東北学』では4度、本研究プロジェクトに関連した特集を組み（03号「災害の民俗知」、04号「棚田のアジア」、07号「復興の海」、08号「東北、明日の大地」）、一般市民への成果公開に努めた。一方、学術的な成果公開として、考古学分野では日向洞窟遺跡の報告書など2冊、歴史学分野では3冊の史料集、目録集にまとめた。また民俗・人類学分野が主導してきた「空から見た東北」（後述）では、調査によって撮影収集した東北地方の空中写真を自由に閲覧することのできるHP（<http://blog.tuad.ac.jp/airphoto/>）を立ち上げ、成果公開を行ってきた。さらに、地域資源活用研究では、学部、大学院生が主体となり作成したブックレット「東北一万年のフィールドワーク」シリーズで6冊、民俗・人類班が中心となり作成したブックレット「むらの記憶」シリーズで2冊の、計8冊のブックレット（地域民俗誌）

を刊行し得た。

本研究プロジェクトでは、各研究分野あるいは合同、全体としての研究会、公開研究会、公開講座、シンポジウム、ワークショップを重ね、研究者間の議論を深め、かつ市民への開かれた研究を目指し、知見の共有化を推進してきた。そのため学内外の研究者の交流は年を重ねる毎に深化し、濃密なネットワークと情報の共有化を図ることができたと評価している。

また、班毎に進めてきた基礎研究においてもそれぞれ興味深い成果を得ることができた。例を挙げれば、考古班の八戸市周辺の遺跡データベースとGISを活用した研究では、縄文時代早期から後期にかけて、あるいは5世紀後半から11世紀までの古代集落の分布動態、消長過程を明らかにすることができた。これらの分析の深化は、「流域研究比較ユニット」との相互議論を踏まえた上での先史遺跡動態のモデル構築に大きな刺激を与えることになった。特に古代東北（青森県八戸市を中心とした地域）においては政治的不安定期に集落が現れては消えてゆくという現象を具体的に把握することが出来た。

また同じく八戸市に関しては歴史班の村上一馬と筆者を中心に『八戸藩日記 狩猟関係史料集』を平成28（2016）年3月に刊行した。これは、先（平成23年～24年）に刊行された『弘前藩庁御国日記 狩猟関係史料集』（第一巻～第三巻、いずれも村上・竹原・中村 編）と合わせ、藩政期の北奥羽諸藩での野生動物に対する集落防衛システムおよび集落機能の具体像の解明につながりうる成果であり、その学術的インパクトは大きい。歴史班ではこの他、八戸市南郷区島守や一関市巖美町本寺地区、気仙沼市唐桑町鮪立地区、山形市南原町旧前田村地区など数地点での史料調査が同時並行的に進められ、平成28年度にブックレットにまとめ刊行した。これら農山漁村において生業に関わる様々な権利・所有関係が各年代でいかに構築され、維持されてきたのかを統合的に俯瞰する応用研究を進めた。

民俗・人類班では「景観」をキーワードとして「空から見た東北」、「海から見た東北」という地域横断型の研究を推進してきた。前者に関し最終年度

は、福島県会津盆地から奥会津にかけての一带と秋田・岩手県境の奥羽山地を中心とした中山間集落の空中撮影を行った。これによって過去5年間で東日本大震災の被災地である三陸沿岸から仙台湾、福島県浜通り一帯の状況を空から記録できた。また「空から見た東北」では、被災地に偏りがちな映像記録であるが、これを震災体験が共有される東北一円に拡大し、震災があった時代の共時的記録として残すことが出来たことは本プロジェクトの大きな成果といていい。「空から見た東北」で上空から記録した地域は、本研究プロジェクトの分野共通フィールドとして設定した八戸市をはじめ、青森県下北半島、津軽半島、秋田県男鹿半島、秋田山形県境の鳥海山、山形県の飛鳥、出羽三山、山形新潟県境の朝日連峰、福島山形県境の飯豊連峰、福島県会津盆地、奥会津、只見にかけての日本海側の山岳地帯、会津磐梯山、猪苗代湖から奥羽山地、阿武隈高地、磐城平、浜通り、福島宮城県境の亘理から仙台湾に面した仙台市、石巻、女川、気仙沼、岩手県の北上高地、北上盆地、大船渡、釜石、遠野、宮古といった東北地方太平洋沿岸地域の広範囲にわたる。その資料的価値は高く、整理公開作業を迅速に進め、民間及び地方自治体や他の研究教育機関での活用を促して行くことになる。なお、「空から見た東北」については、本報告書とともに東北文化研究センターの友の会向けに写真集『空から見た東北』を刊行する予定である。こうした希少資料の公開によって、写真に撮影された景観、土地利用状況を手がかりとして集落の拓かれ方や生業変容を読み解き、事例研究を補完してゆく作業も本格化され、復興に向けた一つの情報の共有化に寄与するものと考えている。

民俗・人類班では、「空から見た東北」といった国内研究だけでなく、海外事例研究（内モン自治区及び雲南省を中心とする中国少数民族社会の研究）も同時並行的に進めてきた。そのなかで平成26（2014）年2月に本学で開催した国際シンポジウムでは、本海外研究での対象社会における「定住化」プロセスに注目することで、人々が流動化し、かつ私的な諸権利が強化されつつある現代日本社会での災害リスクと向き合う地域共同体のあ

り方や持続可能性のある文化継承のあり方を見出し、いこうとする方向性を示した。これは本事業の根幹をなす理念構築とも関わる課題であり、事例に基づく緻密な論の展開へと昇華する試みであった。

本研究プロジェクト4年度目から本格化させた応用研究に関し、最終年度の平成28(2016)年10月に、クロージング・シンポジウムとして「東北の集住を考えるーポスト過疎化時代を生きるー」を東北歴史博物館にて開催した意義は極めて大きい。このシンポジウムでは、前半に考古学分野の安斎正人が旧石器から縄文期に移行する中での集落遺跡の消長に対する気候変動のインパクトを明らかにし、次いで歴史分野の入間田宣夫が古代中世における農耕定住集落として八戸市島守地区と一関市本寺地区に関する安定定住期の政治的、制度的諸相を述べ、さらに民俗・人類学分野から川島秀一が気仙沼市街地の近世から近代にかけての形成期と隆盛期、衰退期を述べ、東北の1万年におよぶ集住史を俯瞰して見せたことは、本研究プロジェクトの特徴的成果と言える。特に当該地域における安定的定住生活、すなわち持続的集落の存続は、この1000年間に生じているものであり、決して不変の集落は存在していないこと。一見不変的な集落と思えそうな集落であっても、住民が入れ替わったり、集落の場所が時代的に移動したり、また集落が拡大されたり縮小されたりと、安定して今日に至った訳ではないことが明確に語られた。すなわち「集落」が時代環境に左右され、とりわけ政治経済環境といった人為環境に大きな影響を受け、また自然災害によっても影響を受けてきた歴史的経緯が動的に把握されたことは、今後の集落形成を考える上で重要な意味を持つと思われる。

本シンポジウムの議論を踏まえ、さらに理念構築を図るため、平成29(2017)年3月に工学系の環境デザイン、都市計画分野との研究会を開催した。この研究会では、過去に実施してきた法制度研究会の成果である被災地の沿岸漁業権をはじめ、水域に対して集落が有する様々な権利の成立過程を19世紀末の資源保全政策や近代法制度整備と関連づけ確認するとともに、過疎化に伴う文

化継承の現状報告と問題提起を受けたかたちで実施された。本研究プロジェクトでは、集住(人が集い暮らすこと)や集落の意味と機能(集住・居住・集落)といった「場所性」を歴史文化研究のなかから抽出することにより、歴史社会的コンテクストに沿った共同体、コミュニティ創出の理念構築を最終的に目指してきた。また、「家」制度や土地所有制度、あるいは漁業権をはじめ山野河海にかかる所有権・占有権・利用権などの権利関係とその相続制度はそうした「場所性」を構成する重要な社会的要素であり、本研究プロジェクト応用研究における主要な分析視点となっている。そこで、各班が取り組んできた事例研究の統合の方向性を視野に入れながら論点の整理とテーマ設定を行い、これら「場所性」に関する共同研究会を随時開催してきた経緯がある。本研究会では、農村計画や都市計画など工学系環境デザイン分野の研究者たちと都市論、集落論、農村論に関する議論を深めることができた。そして、問題意識・背景の共有や研究課題のすり合わせを図り、集落再生や地域再編に係る制度設計、政策立案においても了解可能な集落創出理念の構築、提示へと本研究プロジェクトの最終的成果を導き出すことにした。

以下では、これらの研究成果と議論を踏まえ、集住のための新たな理念を探っていく道筋について考えたい。

2 空き地・空き屋、地域集落のスポンジ化：議論の集約にあたって

地域集落の問題を追究することは、都市を論じることでもある。現在の日本社会は第一次産業の衰退の中で、地方都市の多くが膨張してきたが、現在はその地方都市も縮退期を迎えている。本研究プロジェクトの応用研究における議論では、都市のスポンジ化が進行する中でパラレルに集落のスポンジ化も進行している点に注目した。スポンジの気泡のように人口密集地の中に空き地空き屋が点在し、周辺の耕地も耕作放棄地と耕作地が混在する風景は、現代では地域に関係なく全国的に類似した現象であり、とりわけ1980年代から90年代にかけてバブル期以降この減少が進行してい

る。本報告書の「海外研究の総括」でも触れているように、このような問題は地域集落、海外の少数民族集落、先住民族集落にも見られる現象である。ただ日本の場合その進行が早い、ということが特徴であろう。

集住スペースの今後を考える上で、大きなヒントを与えてくれる一つは被災地での議論である。宮城県気仙沼市の大沢地区に見られるように、高台移転を受け入れると同時に個々の宅地面積をおよそ100坪で平等に分けることにも同意している(渡部桂の報告)。このような私的所有権(private ownership)の強化が語られる現代においても被災した地域集落共同体の平等性(equality)を重んずる伝統的思考法が併存することは極めて重要であろう。この伝統的思考法も文化の一部であることは当然であるが、集落共同体の平等性と個々の私的意識(private consciousness)の強化という相反する意識が併存する現実、今後の集落のあり方を考える上で重要な鍵となるだろう。

またそこで重要になるのは、集落住民の経験や体験の共有化である。特に震災などの強烈な体験の共有化は、集落住民の精神的結束力を強化し、私的意識を超えた集落人としての自己同一性(identity)をも深化させることになる。災害のような、個人の力では抗いようもない外部的圧力に互いが遭遇することで、精神的な絆が深まることになる。そこでは私的意識と公共的意識が育まれ、集団としての一体感が生まれることにもなる。この体験や経験の共有化は、ふるさとへの帰属意識を深め、公という考え方が優先されることにもなる。かつて、地域集落の住民は生きるという素朴な欲求の中で、互いが同じような生業に身を寄せ、生きて来た。さらに村落共同体は年中行事や幼少期からの記憶の共有もあり、集落のため、集団のためという思考を醸成したであろう。このような公共性(public nature)と呼べるような意識は、今後の集落の形成理念を考える上で極めて重要な骨格となる。

また、千葉県の柏市に見られる「貸し庭制度」のように都市のスポンジ化によって生じた空き地を市民レベルで管理し、一定の地区の人々がこの空き地を公共性ある公園として利用する。その土

地を地権者から地区の人々が借り受けるという形で運用するという制度である。日本においては昭和41年に入会林野近代化法(「入会林野等に係る権利関係の近代化の助長に関する法律」昭和41年7月9日法律第126号)などが施行され、特に地域の中山間地などでは集落が有する共有林野を私有分割させるという動きが生じた。当時の価値観では共有林野は前近代的制度と見られており、共有林野を私的所有に切り替えることが近代化の一步と捉えていた。しかし現代社会にあっては、公有地、私有地の二極に加えて公共性ある土地に関する公共地(共有地とは異なる概念で、英国のナショナルトラストの考え方の集住空間への援用)という概念の導入が求められているように思われる。現在、地方自治体においても土地の私的所有権の強化が、公共性ある土地の運用の阻害要因となっているという問題が深刻化している。つまり第三極の土地のあり方である。つまり公有地と私有地の中間の土地概念として公共地のような土地空間を作り出すことが重要であるように思われる。さらにこの公共地の管理は、地域住民が行っていく非営利集団によるシステム導入が、私的所有権の侵入や拡大を抑止することにもつながるであろう。つまり土地利用の中に地域住民の合意の形が可視化される、という考え方である。

3 撤退のシナリオと再生のシナリオ

かつて筆者は「撤退のシナリオ」と題する幾つかの論考を書いた。その主旨は、過疎化を過ぎ廃村化や集落再編成といったポスト過疎化時代を迎えて、人為的な圧力が山間部から緩やかに撤退してゆく中で、いかに使われなくなった山々や耕地などを自然の側に返却していけば良いのか、その撤退のあり方に関するシナリオを準備する必要があるという提示であった。また撤退のシナリオは、やがて再び自然を使うようになって、人口増加が到来し人々の生活空間が膨張してゆくときの再生のシナリオとともに考えられなければならないことも合わせて提示したものであった(田口2006、2007、2012)。無論それは、野生動物の保護管理と狩猟と言った視点からの提示ではあった

が、本研究プロジェクトを立ち上げるに当たって、集落再生のためのシナリオを用意することへと考え方を拡張した。

筆者が想定していた撤退と再生のシナリオは、自然に土地や空間を返却する際にその土地所有権をその地域に残る人々に移譲するというものであった。

しかし、本研究プロジェクトによってその移譲の中身がどのようにあることがベストなのか、という問いに対して学内外の研究者の意見を集約し、法制度的にそれが可能なのかを突き詰めることができた。それは本報告書の「海外研究の総括」でも述べることになるが、使用されなくなった土地あるいは権利放棄された土地の管理組合のような住民主体の組織が公共の土地としてこの移譲を受け管理していくことが最も理想的であると考えに至った。とくに平成29（2017）年3月に行われた、都市工学分野の研究者との議論の中で事例として挙げられ、先にも記した千葉県柏市の「貸し庭制度」の事例がこれに近いものであった。この事例を提示したのは寺田徹である。「貸し庭制度」の事例はスポンジ化が進行する柏市の市街地の事例であるが極めて示唆的であった。この場合は、あくまでも地権者からの借地という形をとつつ公共性ある公園などに転用していく住民と行政の協働管理による動きである。この借地あるいは土地所有の権利移譲による公共性ある土地の運用をそこに暮らしつづける人々と行政の協働によって維持管理していく考え方は、今後の集落再編や廃村化した集落跡地、耕作放棄された旧耕地を含め、災害防止やインフラ整備など地域住民や自治体はその移譲された土地の利活用を議論し決定していくという点で具体性、実現性がある。つまり土地の所有権と利用権を分離する考え方ということになる。この所有権と利用権の分離という考え方は、従来の農山漁村に存在した伝統的な共有地の考え方を踏襲しており、歴史社会的コンテキストに沿った考え方であるため地域住民の合意形成も容易であるように思われる。権利移譲された場合は、土地所有と利用は分離されず地域住民と行政からなる協議会等の組織で方向性を探るということになる。

ここで大きな意味を担うのは所有をめぐる法制度の整備である。目下、法制度は現実の変化に追いついておらず、法的な措置について議論が急がれることになる。柏市の事例もそこに議論が集約されているという。

4 集住の理念構築

人口減少や縮小社会あるいは都市空間や集落のスポンジ化といった日本社会に見られる縮退期の現象は、やがてはまた逆転する動きに転じるであろう。それが100年後に来るのか、200年300年先に起こるのかは分からないが、およそ1万年に渡る集住の歩みを俯瞰すると、現在の状況が永遠に継続されるとも思われない。地域や場所によっても異なるだろうが縮退と膨張が繰り返され、あるいはまた同時進行しながら、社会全体としてはある一定の人口数に落ち着いて行くのかも知れない。いずれにしても今後数十年は縮退期となるであろう。そのような時代には私的所有権によって地域の土地所有者が不在者地主で占められ、この土地が利用されず死んだ空間として残りつづけたら、地域の人々の安全と安心のための土地利用が滞るのもまた問題であろう。実際のこのような私的所有権の強化と所有者の不在化という問題に悩む行政は多い。このため既述したような公共性ある土地利用が実施できるための法的な整備と集落機能の再組織化が求められるに違いない。

また一方では、地域住民や都市市民が私意識を強化する一方で公共性ある社会的意識も強化されていく動きも見られているわけであり、今後この動向を注視していく必要があるだろう。都市計画分野では饗庭伸の『都市をたたむ』のように都市のスポンジ化の中であって、都市内部に都市的な密度ある集住スペースとおよそ都市には縁遠いものであった都市内での農業（自給的農業や菜園的農業といったコンパクトな農地運営）といった、これまでの都市論の価値観ではなかった方向性が出てくる可能性が高い。

このため地域であろうが都市であろうが公共性ある土地利用システムが模索される必要がある。21世紀型の集住のあり方とは、このような公共性を有した土地所有システムと土地の運用に関

わる自由度を何らかのかたちで担保しつつ議論される必要がある。つまり私的所有権と社会的所有権、あるいは私的利用権と社会的利用権といった土地利用権の二重構造論の議論を起す必要がある。土地、家屋が余る時代はもう目の前に来ており、すでにはじまっている地域や都市も存在する。そのため自由度を持った私的所有権と社会的所有権、あるいは私的利用権と社会的利用権の分離が重要な鍵となる。すなわち公共性ある土地の運用と管理が不可欠となる。

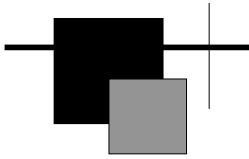
人々の日常の動きが流動化する現代社会にあつては、土地に縛られる農本位的土地所有観から脱して、一時的居住であろうと持続的居住であろうとに関わらず、地域の自治力と土地制度の見直しを進めつつ、住民や市民の参加の下に集住のあり方を議論しなければならないだろう。

付 記

本稿は平成 28 (2016) 年 10 月に本研究のクロージング・シンポジウムとして宮城県多賀城市の東北歴史博物館にて開催した「東北の集住を考えるーポスト過疎化時代を生きるー」でのパネルディスカッションの議論(内山節・鬼頭秀一・田口洋美、本報告書に収載)と、平成 29 (2017) 年 3 月に行われた都市工学分野(都市計画、地域計画)との議論(寺田徹・渡部桂・田口洋美・竹原万雄・蛭原一平・佐藤未希)を参考にまとめた。

参考文献

- 饗庭伸 2015 『都市をたたむー人口減少時代をデザインする都市計画』花伝社。
- 田口洋美 2006 「けもの道入門(57) 撤退のシナリオ」『味の手帖』09月号:86-91。
- 田口洋美 2007 「列島の壊れゆくバランスと撤退のシナリオ」『農林経済』9903:2-6。
- 田口洋美 2012 「撤退する人為と攻めてくる森」『JA農業協同組合 経営実務』10月号:10-21。
- 東北文化研究センター(編) 2016 『東北学 07(特集:復興の海)』東北芸術工科大学東北文化研究センター。



第2部

先史～古代の人々の集住 に関する地域密着型研究

研究の概要と総括

東北芸術工科大学芸術学部／東北文化研究センター

長井 謙治

1 研究目的と概要

東北芸術工科大学東北文化研究センターでは、地域再生の学として「東北学」を提唱し、その実践的研究として平成19年度から2期、10年間にわたり文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター整備事業」を実施した。その流れを汲んで、平成24年度からは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業『環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究』に取り組んでいる。これは生活の場としての「集落」に焦点を当てて、考古学、歴史学、民俗・人類学からなる三学協働体制のもと、縄文時代以降の東北一万年の歴史社会研究を行うものである。

考古班では、複合領域的に復元される日本列島内の「東北」という地域の歴史の一部を明らかにするために、過去一万年間の八戸市域における集落の歴史動態研究、ならびに河川流域を単位とした遺跡群の比較研究（地域密着型研究）を推進した。調査を進めるにあたり、八戸市埋蔵文化財センターは川縄文館には多大なるご協力をいただいた。都合により、縄文社会研究と古代社会研究とに区分したが、両者は連携的な関係にある。

2 研究の経緯

a. 平成24年度

1年目の八戸市域における集落の歴史動態研究では、2年目以降の本格的な調査の準備のための班員検討会を開き、フィールド調査の企画、関係諸機関との調整、情報収集を行った。八戸市域の縄文集落遺跡データベース作成に向けた準備を開

始し、環境史・集落遺跡の現地調査を行った。古代社会研究に関わる検討会を開催し、古代竪穴建物を中心とした遺跡情報、地形的・環境的情報の集成に着手した。

9月に八戸市で共同研究者・協力者との協議を行い、研究内容を「先史班」と「古代・中世班」とに二分した（第1回考古班会議）。さらに、各項目を横断する基盤研究領域として「GIS班」を設けた。「先史班」では、研究項目について①八戸市周辺の遺跡GISに基づく基盤研究、②東北縄文集落変遷に関わる考古学的・環境史的研究の二つにしぼりそれぞれ具体的な調査計画を立てた。①では遺跡立地・古環境との関わりおよびその変遷をテーマとし、八戸市周辺の旧石器・縄文時代遺跡データベースを作成する。遺跡の位置情報（世界測地図系の緯度経度）を調査・獲得、精査し、それを集落変遷や土地利用と関係する古地形図と統合させる。さらに、GIS上でリレーショナルに動かすことができる遺構や位置情報のデジタルデータを作成し、集落と立地の関係性を探る。②では先史集落変遷の動態を広域的に捉える目的で、地理的に特徴のあるいくつかの地域を抽出し、それぞれの東北各地に固有の特色や周辺社会との関係性を探る。遺跡情報基盤データを研究の核とし、特定地域を対象とした考古学的・環境史的研究を実施する。この2本柱の統合を目指した。「古代・中世班」では、研究項目を①八戸市周辺の遺跡のデータベースに基づく基盤研究、②東北古代集落変遷に関わる考古学的・環境史的研究の二つにしぼり、それぞれ具体的な調査と研究を行う。①では古代集落の形成段階に関わる学史的整理を中心とし、集落数の増減、集落の継続性、および集落立地の通史的变化に関わる遺跡情報の整理に

努める。②では当面、①の作業と併行して集落内容、立地・生業環境等を精査することによって、環境史的・考古学的に検討した。

b. 平成 25 年度

2 年目は、初年度に続く研究基盤の構築を目指して、「先史班」と「古代・中世班」とが同時並行で研究を進めた。さらに、各項目を横断する基盤研究領域として「データベース班」を設け、人員拡幅して共同研究者が共有できる基礎データの作成に着手した。辻、近藤は GIS 作成の為に基盤の生態系の資料作成、及びアドバイザーとなった。「先史班」では研究項目を①八戸市周辺の遺跡データベース（以下、遺跡 DB）に基づく共同研究、②東北縄文集落変遷に関わる比較考古学的・環境史研究、の二つにしぼりそれぞれ具体的な調査と研究を行う。①では遺跡立地と集落の変遷をテーマとし、八戸市周辺の旧石器・縄文時代遺跡の集成を行う。具体的には、ア) 共同研究者が利用可能な図データ集の作成、イ) 遺跡データの精度化を行った。ア) に関しては、紙媒体の報告書をデジタルデータに変換（PDF 化）して、共同研究者が共有可能な基礎データの作成を目指した。さらに、「住居跡」、「溝状ピット」に注目して、その属性情報の整理を行った。イ) に関しては八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館が管理する遺跡台帳の更新を行った。例えば、日本測地系及び不統一の基準によって記載されていた位置情報について、個別に遺跡地図と照合させてゆくことにより、世界測地系による緯度経度に変換した。さらに、遺跡の所属時期について、各報告書原点にあたり整理した。以上の作業はこの年度に全て終了させた。②では先史集落変遷の動態を広域的に捉える目的で、地理的に特徴のあるいくつかの地域を抽出し、それぞれの東北各地に固有の特色や周辺社会との関係性を探った。「古代班」においては、研究項目を①八戸市周辺の遺跡のデータベースに基づく基盤研究、②東北古代集落変遷に関わる考古学的・環境史的研究の二つにしぼり、それぞれ具体的な調査と研究を行う。①では集落数の増減、集落の継続性を把握するための時期区分として八戸市域の土器編年を検討した。その結果、5 世紀

後半～11 世紀代を大別 3 期、細別 11 期に区分して集落の消長が検討されると判明した。②では、①の作業と併行して一定数以上の建物跡が検出された集落遺跡をとりあげ、個々に建物跡の時期を検討し、時期別変遷表を作成した。

プロジェクトの始動を八戸市民に広く伝えることを目的として、公開講座「八戸の集落一万年：なぜムラができ、消えたか？ vol.1」を開催した（会場：八戸市総合福祉会館、日時：12 月 14 日）。続く 15 日には、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館会議室を会場とし、第 2 回考古班会議を開催した。八戸の縄文遺跡データ集成状況の進捗報告が長井謙治により行われたほか、共同研究者の個別研究の進捗状況の報告と今後の展開について協議した。

c. 平成 26 年度

3 年目は、前年度からの基礎研究を継続させると同時に、研究を軌道に乗せた。後半期（応用研究）を見据えて、新たに流域比較研究ユニットを設定した。八戸市域における集落の歴史動態研究においては、前年度の続きとして研究データベースの質的向上を目指した。とりわけ作業を進めるうえで浮上した問題点、すなわち遺構認定の諸問題を浮き彫りにした。3 年目においては、遺跡データベース作成に向けた研究会「空間情報技術を活用した集落研究講座」を開催し、遺跡集成研究の実現に向けた 4 度の検討会を行った。

縄文時代の集落構造を理解するうえで土坑の認定は重要な鍵を握っている。そこで、共同研究者間での共通理解を得ることを目的として、6 月 14 日、15 日に八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館を会場として、第 1 回考古班研究集会『集落遺構の認定について：墓・住居・貯蔵穴・陥穴』を開催した。1 日目に村木淳（八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館）より八戸市域の縄文時代遺跡からみた墓、住居、貯蔵穴、陥穴の認定の問題点について、2 日目に横山寛剛（八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館）、佐藤宏之（東京大学）より、八戸市域と多摩 N T の発掘調査事例を交えながら、遺跡発掘現場における陥穴の認定の問題点が指摘された。八戸の集落変遷一万年を理解する

うえで根幹をなすと考えられる墓、住居、貯蔵穴、陥穴の認定に関する諸問題について議論を深めた。

他、理論面の強化を図るため、12月20日に第2回考古班研究集会「集落の継続・断絶を考える」を開催した。根岸洋（国際教養大学地域環境研究センター）は、欧米諸国における民族考古学的文献を渉猟しつつ、東北縄文社会において大型の集落ができて消える理由、その背景について話題提供された。さらにプロジェクトの中間的報告を兼ねた公開研究会『八戸の縄文集落変遷—なぜムラができ、消えたか？ Vol.2—』を開催した（会場：八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館、日時：12月21日）。演者と演題は以下の通り。①小林圭一「八戸の縄文時代後晩期」、②村木淳「八戸地域の縄文後期集落：風張から是川へ」、③市川健夫「八戸地域の縄文晩期集落：是川を中心に」、④杉山陽亮「八戸地域の弥生時代の集落」、⑤長井謙治「遺跡データベースからみた八戸の縄文集落変遷」である。

流域比較研究ユニットにおいては、三面川流域、津軽ダム、小又川流域、最上川流域の広域比較を目的に東北芸術工科大学を会場として第1回目研究集会を開催した（6月21日）。他、古代班では八戸市域における遺跡データベースの構築が進んだ。これにより、5世紀後半から11世紀までに5度の集落動態の画期が存在したことが明らかになった。立地に関しても7世紀と9世紀後葉に変化が見られることを明らかにしている。

d. 平成27年度

4年目は、基礎研究から応用研究への移行として、新たに流域比較研究ユニットを設定した。基礎研究を継続させると同時に、新設した「流域比較研究ユニット：米代川・岩木川・最上川・北上川流域の縄文集落の比較」の具体的な研究を開始した。八戸市域における集落の歴史動態研究においては、前年度の続きとして研究データベースの質的向上を目指した。とりわけ作業を進める上で浮上した問題点を浮き彫りにした。「流域比較研究ユニット」の具体的研究として、小又川上流域における遺跡巡検と遺物見学を目的とした野外調

査を行った。また、流域比較研究ユニットにおいては、北秋田市教育委員会会議室を会場として第2回流域班研究会を開催した（10月4日）。

本プロジェクト考古班における次年度最終報告を見据えた意見交換を図る目的において、12月に第3回考古班研究集会「最終報告書に向けての構想発表」（会場：是川縄文館会議室、12月13日）、第3回公開研究会「八戸の集落1万年：古代地域社会の動態—なぜムラができ、消えたか？ Vol.3—」（会場：八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館、12月13日）を開催した。午前の考古班研究集会においては、最終報告書の執筆を見据えた10～15分程度のハンドアウト資料を使った構想発表が行われた。演者は以下の通り。1. 全体（長井謙治・近藤康久）、2. 縄文時代早期（中村哲也）、3. 縄文時代後・晩期（村木淳・市川健夫）、4. 弥生時代（杉山陽亮）5. 古代（宇部則保・北野博司）。今後の課題として、縄文時代中期の研究を充実させることが決定し、その執筆には横山（八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館）があたることで合意したが、その後の都合により中期は安斎が担当することになった。遺跡DBに基づく共同研究においては、旧石器・縄文時代遺跡DBの活用を図ることが課題となったが、平成26年度までに登録した世界測地系にいくつかの誤入力があることが判明したため、平成27年12月11日までにそれら全てを訂正し、更新した。

「古代班」では、継続してきた①八戸市周辺の遺跡のデータベースに基づく基盤研究、②東北古代集落変遷に関わる考古学的・環境史的研究の二つについて、それぞれ具体的な調査と研究の進展がみられた。①では昨年度までに集積したデータベースの補足（遺跡の追加）と、当該データに基づくGIS分析・密度図等の作成（近藤康久）、データの補正を行った。対象時期を5世紀後半～11世紀代とし、その間を大別5期、細別13期に区分して各時期の竪穴建物数、増減、分布等を検討した。②では、①の作業と併行して、それぞれの画期の解釈について討論した（7月4日）。それとは別に、段丘面区分に基づく遺跡立地の詳細を確認するために八戸市域、おいらせ町内の現地踏査を行った（7月5日）。

e. 平成 28 年度

最終年度にあたる 5 年目は研究の総括をした。東北地方における集落変遷 1 万年をマクロ・ミクロ双方から検討することを念頭とし、精緻な遺跡データの作成を可能とする核フィールドとしての「八戸」と、河川流域単位とした「東北」地域の考古学的動態を縦横に広域比較することを目的とした。研究対象フィールドを「八戸」に限定し、過去 4 年間に蓄積した遺跡データの総合的な理解を行う。

成果報告書に作成にむけた共同研究者との協議を 2 度行う。

3 総括

考古班では、複合領域的に復元される日本列島内の「東北」という地域の歴史の一部を明らかにするために、過去一万年間の八戸市域における集落の歴史動態研究、ならびに河川流域を単位とした遺跡群の比較研究を推進した。

八戸市域における集落の歴史動態的研究を基軸とし、初年度よりフィールド調査の企画、関係諸機関との調整、自然科学一般に関する情報収集など、本格的な調査を実現させるための基盤づくりをおこなった。過去一万年間にわたる膨大な考古学的資料を有する八戸市域を研究対象として、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館による全面的な協力を得て、研究を進めることができた。ここに記して厚く感謝する次第である。

八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館が作成した遺跡台帳をベースとして、青森県教育委員会による遺跡情報、その他この数年で新たに調査された遺跡項目を加えた最新の遺跡データベース（遺跡 DB）を作成して、本プロジェクトの基本情報を作成した。このデータベースの作成には、東北芸術工科大学歴史遺産学科考古学研究室の学生諸君が中心的な役割となり行った。膨大な発掘調査報告書の図版のスキャニングと基本データの入力には、始動してから有に 2 か年を費やした。誤記の訂正、用語と項目の再統一をはかるのにさらに 1 年を費やし、ついに遺跡 DB の完成に漕ぎつけたわけである。本プロジェクトが作成した遺跡

DB は、情報精査をしたものに限定しており、遺跡総数は遺跡 DB 総数と必ずしも対応しない。

先史班による研究成果は、八戸市域における過去一万年の集落変遷と歴史動態の検討として、本報告書に集約させた。次の長井・近藤論文では、遺跡 DB にもとづく地理情報システムを用いた遺跡の密度と立地傾向分析、および新井田川下流域をターゲットとした旧石器時代以降の集落変遷にかかわる考古学的検討を行っている。八戸市域における集落変遷一万年の歴史動態をビジュアルに描くことを目的としており、カーネル密度分析による遺跡の立地の密度の変化を描出した。また、新井田川流域における集落の成立から解体までの構造変動を検討した。結果、グローバルな気候変動に対応する縄文時代以降の集落変遷の画期と立地変遷が明らかになった。例えば、縄文時代早期中葉における遺跡数の急増と低地利用、前期（海進後）における古八戸湾沿岸部への遺跡立地と拠点形成、中期における内陸部への遺跡進出と中期末葉から後期前葉における遺跡数の倍増、後・晩期における拠点形成と遺跡数の縮小、古代におけるドラステックな集落変遷過程を明らかにしている。

この論考で素描した変化の背景について、考古学的事例に基づき詳しく検討したのが以降の論考である。縄文時代前半期（安斎論文）と縄文時代後半期（小林論文）に分けて、八戸市域を取り巻く周辺地域にまで検討の地域を広げて、八戸市域における集落変遷を考察している。安斎論文では、早期の集落が約 8,200 年前に 170 年間続いた地球規模の気候の冷涼化と急激な回復現象（8.2ka イベント）のあおりを受けて集落形成された可能性について言及している。巧く読み取れないとしながらも、温暖期の物見台式期、冷涼期の吹切沢式期、回復期にあたるムシリ I 式期を想定している。縄文海進から地球規模の冷涼化（5.8ka イベント）まで続く前期的な大型集落が成立するが、その集落の解体・再編成、中期的集落の形成について論じられている。

続く小林論文においては、風張（1）遺跡から中居遺跡への集団移住に関する歴史的動態について、細別時期に基づく集落動態が論じられている。

また、県下の縄文時代後半期の遺跡分布の分析を通して、拠点集落とそれを取り巻く小規模な遺跡が、それぞれ社会的機能を分有して並存していたことを指摘している。また本報告書に収録しきれなかったが、北野は、5世紀後半から11世紀までに5度の集落動態の画期が存在したこと、7世紀と9世紀後葉に立地上の変化が見られることなどを明らかにしている。

佐藤論文「列島から見た八戸」では、それまでに検討した八戸市域における過去一万年の集落変遷について、汎列島の視野でいかなる理解を可能とするか、広く列島からみた八戸一万年の集落変遷について、特に弥生時代以前を中心とした全体像の考察が試みられた。

5カ年の研究を経て、ひとり八戸市域にみる遺跡動態は、広く東北地方北部のみならず、グローバルな環境変動や列島全域におけるヒトとモノの移動の中で成立した動きの一部を垣間見ているに過ぎないことを痛感する次第である。

本研究プロジェクトで提示した八戸市域を対象とした集落変遷モデルは、以後、広く列島のなかで比較検討する余地がある。プロジェクトの課題として流域比較研究が残された。この課題に対しては、例えば三面川流域、岩木川流域、小又川流域、最上川流域を対象とした広域比較が今後可能である。

本研究はそうした将来の応用研究に向けた基礎研究として位置付けたい。

以上が、考古班で取り組んできた地域密着型研究の成果であるが、同時並行的に進めてきた地域資源活用研究にも付言しておきたい。

考古班では、地域資源の開発と活用という点において、長井謙治を調査団長とした日向洞窟遺跡発掘調査団を組織して、高島町教育委員会と山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館の協力を得て、山形県高島町の洞窟遺跡群の考古学的調査を実施した。調査は平成25年度より4カ年続けて実施し、これまで縄文時代草創期から中期にかけての集落動態に関わる豊富な遺物と自然科学的データを獲得している。平成28年度には中間的な総括報告を行った。

日向洞窟遺跡の考古学的調査には、東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科の学部生の他、同大学文化財保存修復学科、美術科日本画コースと洋画コースの大学院生・学部生、東北大学、富山大学、早稲田大学、國學院大学、立命館大学、茨城大学、山形大学、東京藝術大学、福岡大学、京都造形芸術大学の大学院生・学部生など、多数の学生が参加した。研究と教育の連携という点で重要なパイプを構築させることを目的としたこの考古学的調査には、まさに地域からの熱い援助を得て実現できた。平成25年度の第1次調査以降、3カ年続けて現地説明会を開催し、のべ100人を超す地域住民の現地への来跡をみた。

報道機関8社を越す新聞社、TV報道局からの広報が積極的に行われたことも特記しておく。山形県高島町の地域資源を開発し、その研究成果を地域に還元するという実践教育の場として、あるいは若手研究者の育成の場として、山形県高島町における洞窟遺跡群の考古学的調査は、貴重な試みとなった。

この学術的成果の一部については、別冊『日向洞窟遺跡の発掘記録：第1次発掘調査報告書』（東北芸術工科大学東北文化研究センター刊行）に掲載した。4年間の発掘調査の概要については、別冊『山形県高島町日向洞窟遺跡の発掘調査概要（2013～2016年度）』（東北芸術工科大学東北文化研究センター刊行）に収録する。

遺跡データベースから見た八戸の集落変遷一万年

—新井田川流域における集落の成立と解体—

東北芸術工科大学芸術学部／東北文化研究センター

長井 謙治

総合地球環境学研究所

近藤 康久

1 はじめに

我が国では、1950年代に始まる高度経済成長期以降の埋蔵文化財行政による組織的・重点的な調査によって、甚大な数の遺跡が発掘されており、そこから得られた考古学的情報はもはや個人研究者の頭脳では把握しきれない数量に達している。縄文時代に人口密集域であった東北日本も例外ではなく、例えば青森県域においては、既知の遺跡約4,860か所のうち、縄文時代の居住痕跡を伴うものは約3,480か所に及ぶ(中村 2013)。個人研究者あるいは研究グループによる遺跡情報の集成及びカタログ作りはある程度進んでいるが(例えば上條編 2016、小林 2012)、現状は資料の網羅的集成と個別研究にとどまっており、集めた資料をいかに総合的に分析し、解釈するかということが課題となっている。

本研究では、八戸市域における集落変遷一万年の歴史動態をビジュアルに描くことを目的として、量的に豊富な考古学的データをもつ八戸市域を対象に過去一万年を対象とした遺跡データベースを作成し、地理情報システムを用いた遺跡の密度と立地傾向分析、および新井田川下流域をターゲットとした旧石器時代から近世に至るまでの遺跡消長に関する考古学的分析を行う。

2 研究の特色

(1) 考古学における計量的時空間分析の展開

遺跡や出土遺構・出土遺物の地域ないし広域での時空間動態を計量的に明らかにしようとするア

プローチは、1970年代に生態学や地理学から分析手法を取り入れつつ成立した(Hodder and Orton 1976)。昨今は、コンピュータで地図を描く地理情報システム(GIS)の普及と処理能力の向上により、膨大なデータを扱う計量的な空間分析を簡易に行うことができるようになった。

かたや、西南関東の多摩ニュータウン(多摩NT)や港北ニュータウン(港北NT)地域における組織的な大規模遺跡調査を通して、行政界という人工的枠組みを越えて、往時の歴史地理に即した行動論的な理解を可能とする各種の計量的分析を可能とする基礎資料がもたらされた(小林 1973、可児 1982、坂本・倉沢 1990等)。

谷口康浩は、多摩NTと港北NTにおける縄文時代早期から中期までの住居と集落の地理的変異とその通時的変遷を明らかにし、計算モデルを利用した幾何学的分析が集落論に重要な情報をもたらすことを実証した(谷口 1993、2002)。谷口の新しい集落研究は、幾何学的方法を用いて地理的変異を導出する歴史地理学的な計量的分析が、縄文時代における遺跡群研究に有効であることを証明した先駆けとして重要である。90年代における萌芽的な研究を経て、地理情報システムを利用した計量的時空間分析が、次なる波として台頭してくるのは最近のことである。

80年代以降における考古学分野への地理情報システム(GIS)の普及とその処理能力の向上により、膨大なデータを扱う計量的な空間分析が簡便に行えるようになった。津村宏臣・小林謙一らによる縄文集落の生態論的研究、あるいは中村大らによる地理情報システム(GIS)を採用した祭祀空間

の分析は、集落研究の新局面を見出している（小林他 2002、西本他 2001、津村他 2002a、津村他 2002b、千葉他 2000、中村 2010、2011 等）。小杉康（2009）は北海道における縄文遺跡のカーネル密度分析を試みており、サイトキャッチメント 50km の検索半径において、有意なまとまりが見出せること、行政区分による「地域」という枠組みを越えた「超越的地域」の導出に成功することを指摘している（小杉 2009）。小杉の密度分析は北海道全域を対象としているため、各市町村レベルの調査密度を反映していない。真の遺跡密度を知るためには、より狭い範囲で網羅的に分布調査が行われてきた地域を対象とするのが学術的に望ましいが、こうした分析に適したフィールドのひとつが八戸市域である。

（2）八戸市周辺における集落変遷研究

90年代に青森県遺跡（小山・及川 1996）、及び馬淵川流域を対象として進められた悉皆的な考古学的遺跡調査（工藤 1997）、および東北日本の遺跡データベースの作成（横山・千葉 1997、2002）などは、その後の青森県域における遺跡群研究の出発点として、重要な存在となってきた。

小山修三・及川昭文は、青森県の縄文時代遺跡を6期区分（草創期・早期・前期・中期・後期・晩期）で集計して通時的な土地利用変遷を検討している。小山・及川は縄文時代後期における遺跡数の増加と海拔 300 m以上の高地利用の開始について指摘している。寒冷化に伴う小規模で移動的な居住様式への移行というものが、この変化を促したと推測しており、環境変化への適応形態として、遺跡立地と居住形態モデルの変化を起こすことを明らかにしている（小山・及川 1996）。遅れて、千葉史・横山隆三（1999）らもまた、東北地方における旧石器時代以降中世までの地形・統計解析を行っている。旧石器時代と縄文時代早期の遺跡立地が近似することを明らかにしている。高瀬克範（2003）は、青森県教育委員会が登録した『青森県遺跡地図』を参照して、縄文・弥生遺跡データベースを作成、岩木川流域における晩期から弥生時代の遺跡群の歴史動態を検討している。結果、縄文時代晩期から弥生時代前期におい

て、人口流出を背景とする集落の統合化と相対的な低地への集住化（高瀬 2000）というものを背景として、岩木川流域で遺跡数が激減すること、弥生時代の遺跡が平野部の低地に急激に増加することを明らかにしている。高瀬は、弥生時代前期以降に平野部と山間部に遺跡分布が二極化すること、中期後半まで段階的な画期を経て、大規模な水稲稲作をおこなう「縄文系弥生文化」（設楽 2000）が形成されてゆくことについて、流域を分析単位とした遺跡群の動態分析によって明らかにしている。

八戸市域においては、新田川・馬淵川流域を対象とした集落研究が村木淳（2010、2011）、根岸洋（根岸 2010、根岸・市川 2011）らによって積極的に行われている。

村木は新井田川下流域の旧石器時代から縄文時代の主要な遺跡を概観して、縄文時代早期中葉に遺構が多く発見されること、前・中期に円筒文化が繁栄を迎え大規模集落が出現すること、中期末葉から大規模集落が減少すること、この時期に中心的な役割を果たした拠点集落の周辺に小さな集落が分散して存在するようになること、晩期に至り遺跡数が激減して、長期間の継続をみせる大型の集落が新井田川・馬淵川・松館川などの河川沿いに存在するようになること、弥生時代の前期初頭に遠賀川系統の土器をともなう遺跡が広域展開をみせること、弥生時代の中・後期に至り、遺跡数が極端な減少をみせることなど、八戸市域における縄文時代の集落変遷の全体像を指摘している（村木 2010、2011）。

こうした新井田川下流域にみる縄文遺跡の変遷の大綱は、青森県全域を対象とした集落構造の変容をよくあらわすものといえる（斉藤 2009、関根 2014）。縄文時代中期末葉における大規模集落の解体については、たとえば住居址数と遺跡数の試算により、集住と分散による現象として理解できるようである（市川 2012）。この原因を集落の解体とみなすか、資源獲得のための出先村の新設とみなすかなど意見は様々にあるものの（菅野 2015）、中期後半の小規模集落遺跡の出現は東北縄文文化一般の傾向にあるといえる（岡田 1991、菅野 2011、鈴木 2009）。また、新

井田川流域において、遠賀川系土器を保有した集団が入植する点について、根岸らは新井田川下流域への「選地」が働いていた可能性について指摘しており、興味深い（根岸 2010、根岸・市川 2011）。

馬淵川下流域との比較も進んだ。村木（2010）や中村（2015）は、中振浮石降下後の円筒土器文化期の集落は、馬淵川下流域に少なく、新井田川下流域などの内陸部に遺跡が多いといった遺跡の偏在について指摘している。また、縄文時代後期前葉の十腰内Ⅱ～Ⅴ式が他地域からの伝播の影響を受けて成立したとも考えているようである（村木 2010）。

最近、中村哲也（2013）により青森県域における縄文時代遺跡の再集成が行われている。小山・及川（1996）による遺跡集成から20年弱を経て、以降1.6倍に増加した資料についてデータを更新し、約20年ぶりに県下の縄文時代遺跡の地理的な歴史動態を統計学的に検討したものといえる。中村による研究は、最新のデータを計量的に分析した点で新しい。①草創期から前期にかけての遺跡数・住居跡の増加、②中期から後期への住居数の減少、大規模集落の解体、後期の遺跡数の増加、③後期から晩期への集落数、住居跡数の減少など、概ね先行研究が指摘した内容を追認した結果となっている（中村 2013）。

（3）八戸市周辺における集落生態系の復元的研究

東京大学・八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館による共同研究「古八戸湾変遷と集落生態系の復原」により、縄文時代前半期における十和田火山と縄文海進を背景とした八戸地域の環境変動と集落動態が明らかになりつつある（辻他 2015、一木他 2015、）。本プロジェクト事業は、古環境と遺跡分析により「古八戸湾」の形成・衰退過程、それに関わる人間活動の復原をめざしたものである（杉山 2012）。低地部における複数のボーリングコア・サンプルによる植生・年代学的分析によれば、早期後葉の貝塚群が約7,100～6,500BPに形成されたこと、早期後葉の古八戸湾に干潟環境が出来上がっていたこと、早期後葉の海水面は

現標高約10mに位置していた可能性などが示された（一木他 2012）。その後、年代学的研究によって、海洋リザーバー効果についての点検がおこなわれた。その結果、測定した炭化種実4点の14C年代値は約7,280～7,200BP（約8,150～8,000cal BP）となることが判明し、赤御堂遺跡および長七谷地遺跡が「赤御堂式」という縄文時代早期末から前期初頭におさまるほぼ同時期に形成されたことが明らかになった。

沖積地において実施されたボーリング・コアからは前期以降の環境指標植物も得られており、前期以降八戸市域においては、コナラ亜属が優勢な落葉広葉樹林が継続したこと、To-Cu降下以前の前期前半においてコナラ亜属やブナ属が優勢、To-Cu降下以後にブナ属が減少、クリ属が増加することが明らかとなっている。また、中期から後期の気候の寒冷湿潤化と連動してトチノキ属、低地や谷でハンノキが増加し、その後にスギ属が出現するという植生変遷が確かめられたようである（國木田他 2008、吉川 2008、一木他 2012）。

以上のように、東北地方北部における八戸市域においては、これまで十分な調査のなかった沖積地に自然科学分析のメスが入られたことで、過去1万年の環境変化が明らかになりつつある。もとより、縄文時代の遺跡密度がきわめて高く、すでに詳細な遺跡地図が公開されている八戸市域を対象として、近年得られた古環境データを加えて、遺跡立地の時系列変化を計量的に分析できる格好のフィールドがもたらされたといえよう。

本研究においては、八戸市教育委員会が作成した遺跡台帳に新たに調査された遺跡項目を加え、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館によるご協力のもと、最新の遺跡データベース（以下、遺跡DB）を作成した。そして、地理情報システムと生態ニッチモデリングを採用した遺跡の密度と遺跡立地の標高分析を試みた。さらに新井田川流域における縄文集落変遷について、このモデルの検証の為に考古学的分析を行った。

遺跡DBの作成には2か年を費やした。誤記の訂正、用語と項目の再統一をはかり、遺跡DB構築における資料の問題点（横山・千葉 2002：

180) を克服した。

なお、本プロジェクトが作成した遺跡 DB は、情報精査をしたものに限定しており、実際の遺跡総数は遺跡 DB の総数と必ずしも対応しない。

3 マクロな視点から見た歴史動態と画期

(1) 遺跡密度の時系列分析

A：対象と方法

2014 年 10 月時点の八戸市域を解析領域とした(図 1・2)。八戸市教育委員会が作成したデータベース、および青森県教育委員会からインターネット刊行されている遺跡地図・遺跡地名表(青森県教育委員会 2014)に基づいて、八戸市域の遺跡テーブルを作成した。テーブルには以下のデータ項目を収録した。

- ・ 数字 5 桁の一意識別子 (ID)
- ・ 県の新台帳番号 (市町村コード 3 桁+通し番号 3 桁)
- ・ 遺跡名称
- ・ 遺跡種別 (集落、貝塚、古墳、城館跡、寺社跡、生産遺跡、狩猟場、散布地など)
- ・ 所在地
- ・ 経緯度
- ・ 帰属時期 (旧石器、縄文、縄文草創期・早期・前期・中期・後期・晩期、弥生/続縄文、古代、中近世、時期不明)
- ・ 帰属時期フラグ (上記の各期について、該当すれば Y、該当しなければ N)
- ・ 文献

遺跡テーブルには、505 か所の遺跡を収録した。時期別の遺跡数は、旧石器時代が 3 か所、縄文時代が 456 か所 (図 1 [20])、うち草創期が 14 か所 (同図 [21])、早期が 106 か所 (同図 [22])、前期が 121 か所 (同図 [23])、中期が 108 か所 (図 2 [24])、後期が 238 か所 (同図 [25])、晩期が 114 か所 (同図 [26])、弥生/続縄文時代が 54 か所 (同図 [30])、古代が 190 か所 (同図 [40])、中近世が 46 か所 (同図 [50]) である。

遺跡の時期別分布は、ESRI ArcGIS for Desktop を用いて図化した。密度図の作成にあたっては、カーネル密度を用い、出力ラスタのセルサイズは

500m、検索範囲は 2000m に設定した。

B：結果

解析の結果、以下 6 つの傾向が明らかとなった。

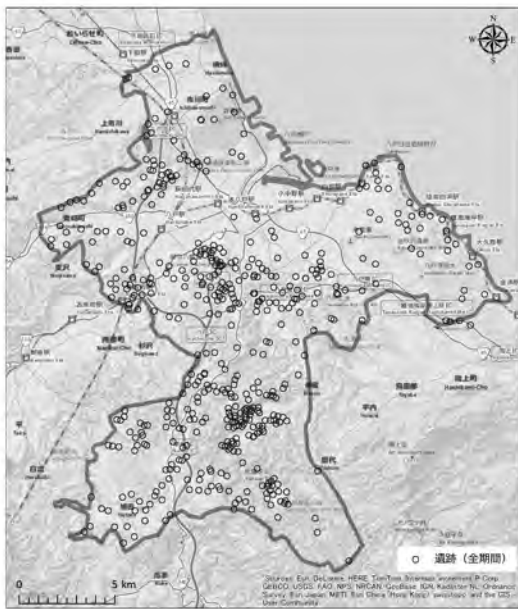
- 1) 縄文時代早期に売場、日計、蕪島遺跡など、鮫・白銀地域の開発が盛んになり、遺跡数が増加する。
- 2) 前期 (海進後) に古八戸湾沿岸部に遺跡が立地し、海岸部に拠点集落を形成する。
- 3) 中期に新井田川流域において、遺跡が内陸部に移動する。そして、後期に遺跡数の急増を迎える。
- 4) 後期には、遺跡数が早・前・中期の 2 倍強に達しており、風張 (1) 遺跡など拠点集落が新井田川下流域に形成される。中期末から後期初頭における遺跡の分散がこれと関係している可能性が高く、拠点集落は中居遺跡など晩期にも継続する。
- 5) 弥生時代は遺跡数が減少し、遺跡は散漫な分布を示す。
- 6) 古代 (5 世紀～11 世紀) においては、長苗代、北高岩、是川-田面木に拠点が形成される。

(2) 縄文早・後期遺跡の立地傾向分析

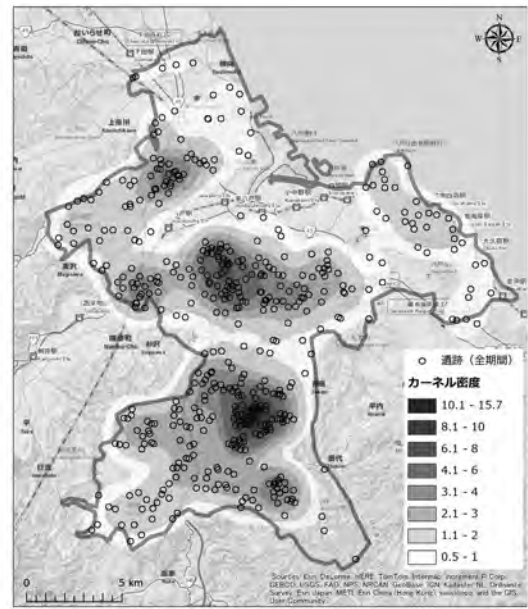
A：対象と方法

遺跡数の増加が顕著な縄文早期と後期を対象に、生態ニッチモデル (ecological niche model) を用いて遺跡の立地傾向を解析した。生態ニッチモデルは生物種の位置情報と気温・降水量・標高などの環境情報を入力変数とする機械学習によって、生物種のニッチの存在確率を空間的に推定する方法である (Peterson *et al.* 2011)。生物種を遺跡と読みかえれば、考古学に応用することが可能になる (Banks *et al.* 2006、近藤・小口 2011、Kondo 2015)。このモデルを用いて、八戸市域の縄文早期および後期遺跡の立地傾向を推定した。

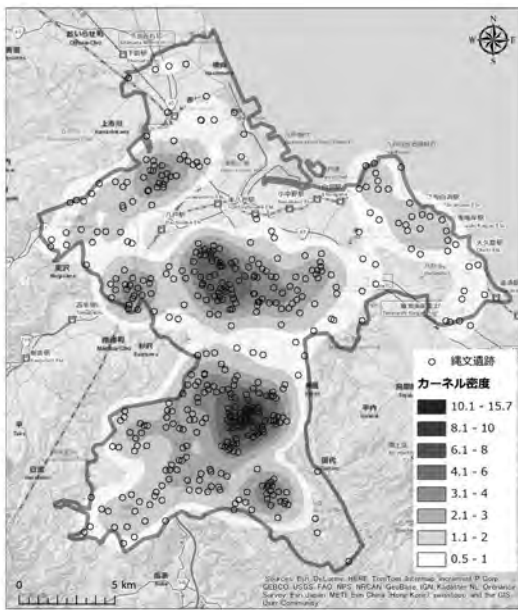
立地傾向の推定にあたっては、八戸市域を包含する、平面直角座標系第 X 系の東辺 72000、西辺 38000、北辺 70000、南辺 36000 で画される 34km 四方の領域を解析領域とした。縄文早期と後期それぞれの遺跡の位置 (XY 座標) と、国土数値情報 5 次メッシュデジタル標高モデル (DEM; 解像度 10m) および ArcGIS for Desktop を用いて DEM から計算した傾斜角・傾斜方向、および古八戸湾の復元推定図 (一木他 2012) に基づく陸域マスクを入力変数とし、最大エントロピー法 (MaxEnt)



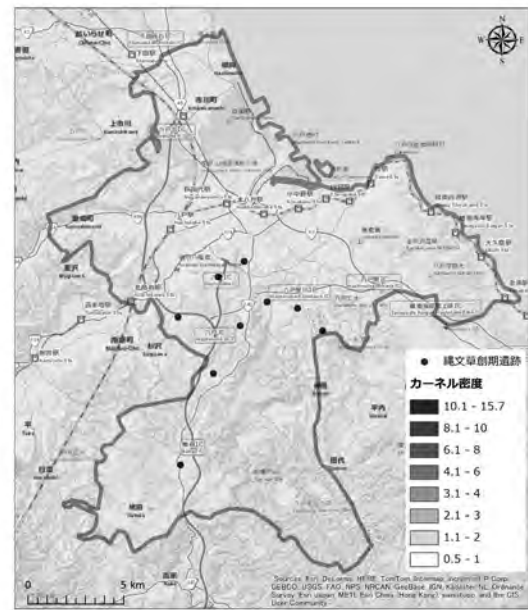
[00] 八戸市域の遺跡の位置と密度



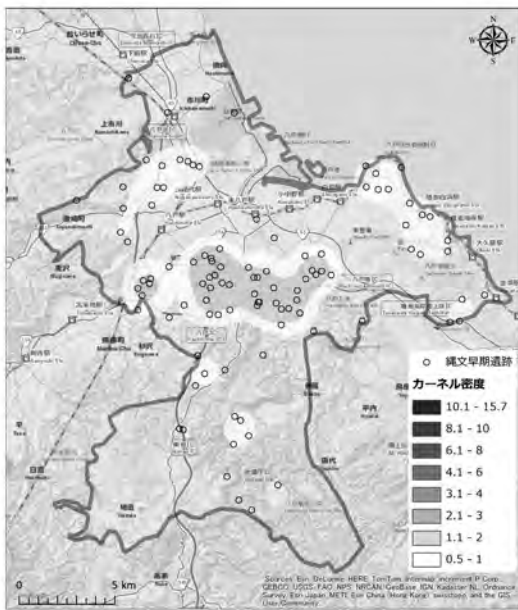
[10] 八戸市域における遺跡（全期間）の位置と密度



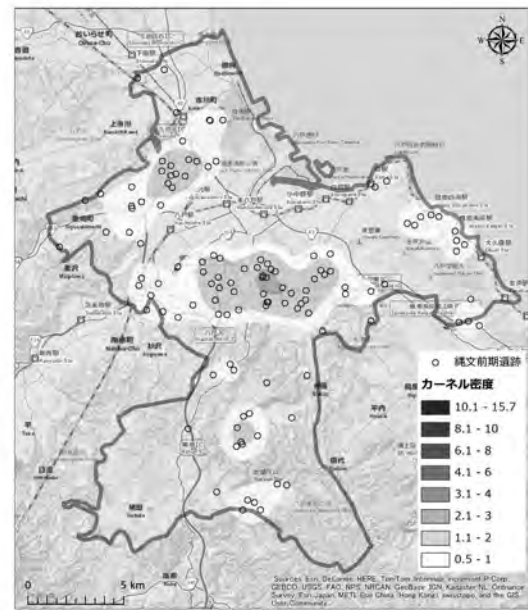
[20] 八戸市域における縄文遺跡（全期間）の位置と密度



[21] 八戸市域における縄文草創期遺跡の位置と密度

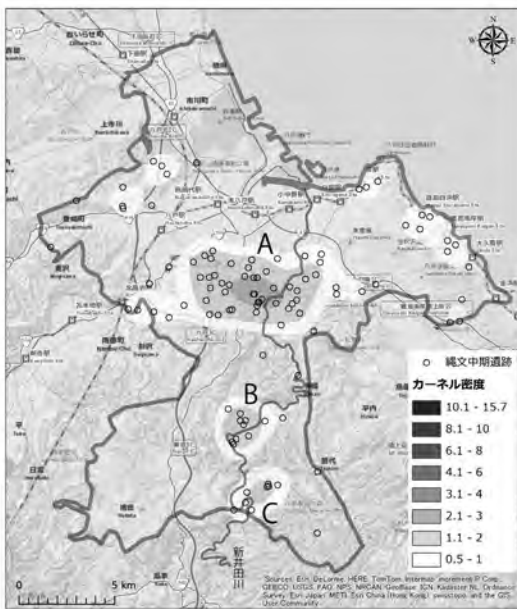


[22] 八戸市域における縄文早期遺跡の位置と密度

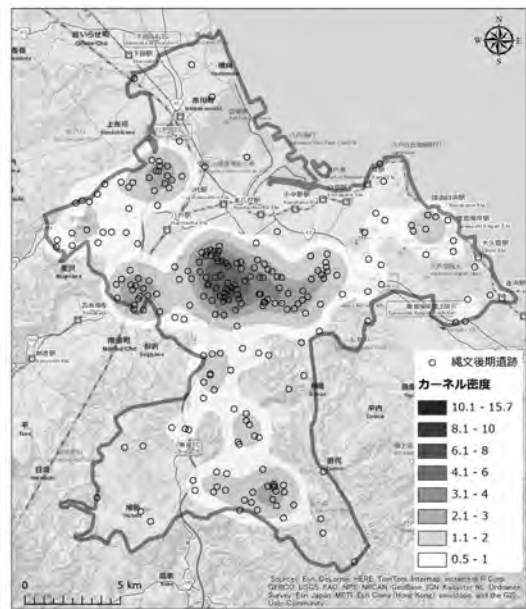


[23] 八戸市域における縄文前期遺跡の位置と密度

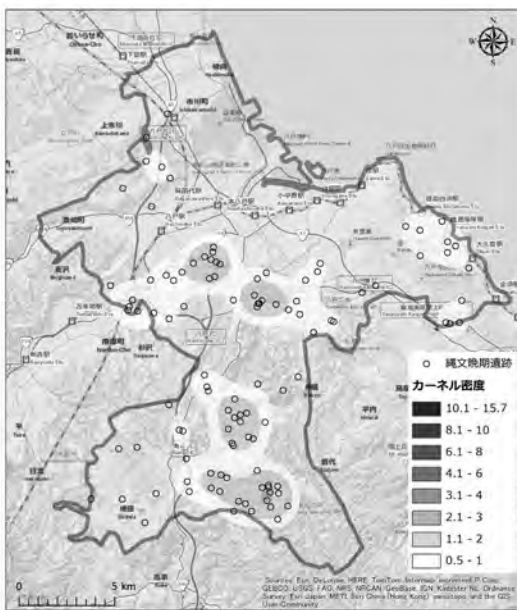
図1 八戸市域における過去1万年の遺跡の位置と密度（1）



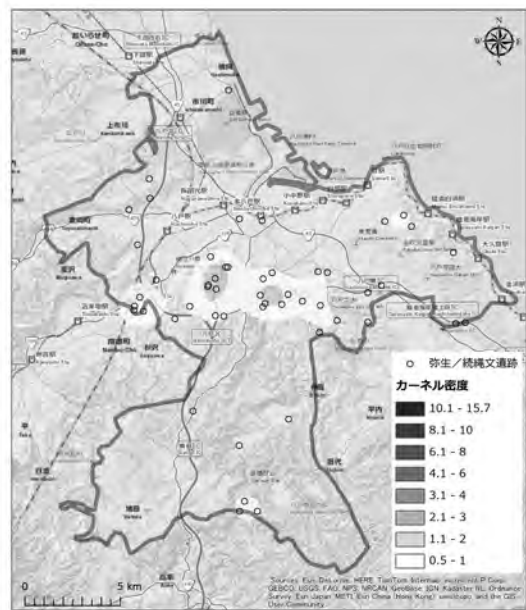
[24] 八戸市域における縄文中期遺跡の位置と密度



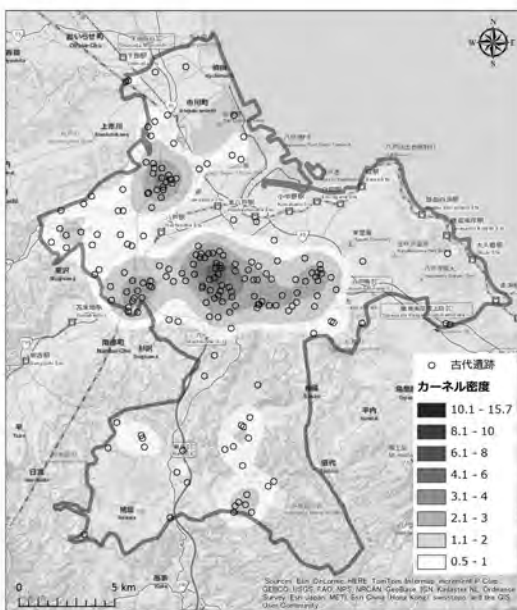
[25] 八戸市域における縄文後期遺跡の位置と密度



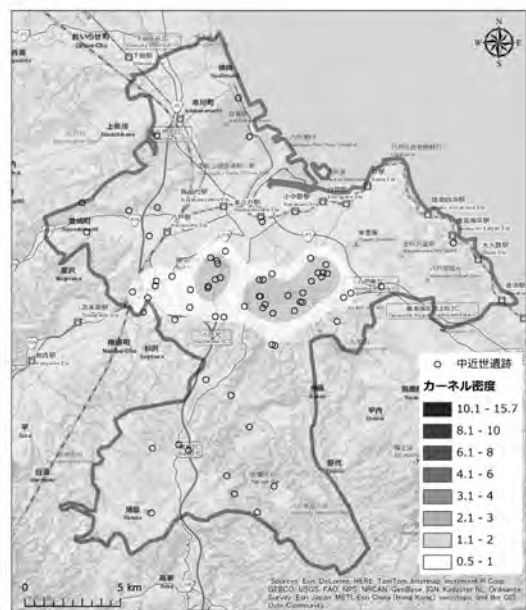
[26] 八戸市域における縄文晩期遺跡の位置と密度



[30] 八戸市域における弥生/続縄文遺跡の位置と密度



[40] 八戸市域における古代遺跡の位置と密度



[50] 八戸市域における中近世遺跡の位置と密度

図2 八戸市域における過去1万年の遺跡の位置と密度 (2)

に基づくニッチ推定を実行した。上記以外の、年平均気温や最寒月・最暖月平均気温、年降水量などの環境変数は、解析領域が十分小さいため同様であると仮定した。計算実験はサンプルの10%をランダムに除去して10回試行した。

B：結果

結果を図3および図4に示す。まず縄文早期

については、モデルの予測能を示すAUC (Area Under the Curve) は0.751で許容範囲 (acceptable) である。環境変数の中では、標高の寄与率が圧倒的に高い。この傾向は後期 (AUC=0.763) においても同様である。標高の寄与をよく調べると、縄文早期の集落は比較的標高の低いところにニッチを占める (図3-2) のに対し、後期集落は低いところに加えて高いところにも第二のピークをもつ

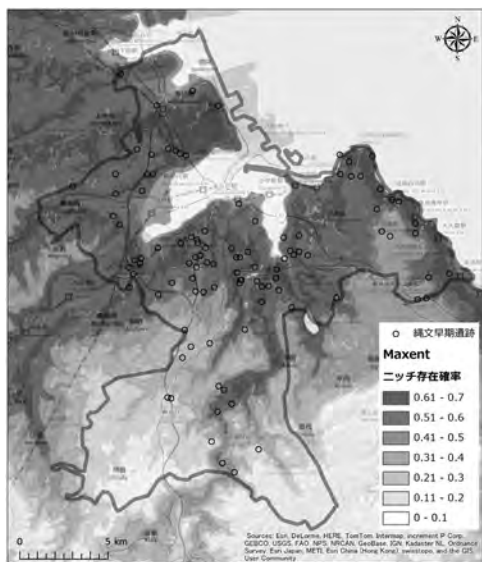


図3-1 八戸市域における縄文早期遺跡のニッチ存在確率

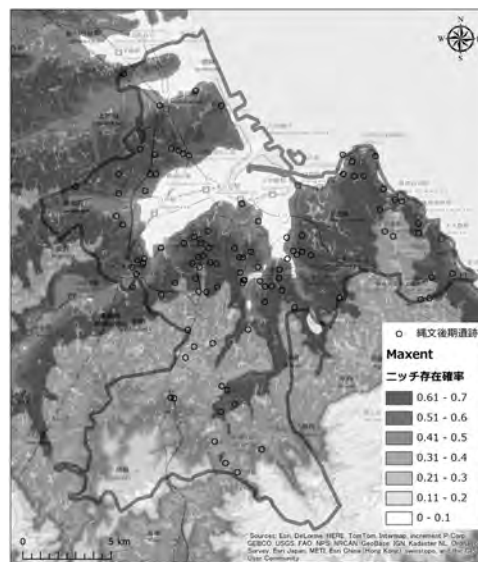


図4-1 八戸市域における縄文後期遺跡のニッチ存在確率

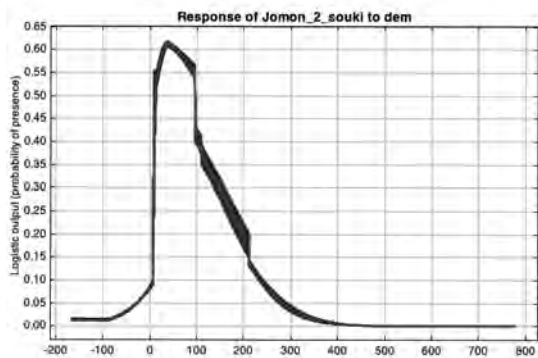


図3-2 八戸市域における縄文早期遺跡のニッチ存在確率に対する標高の寄与

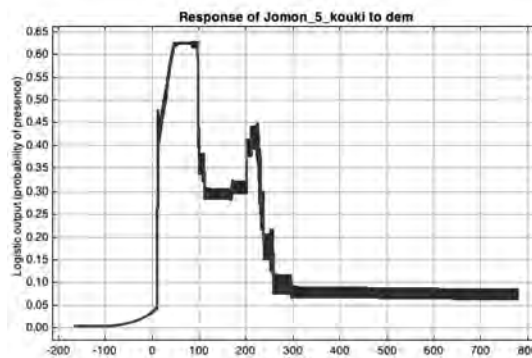


図4-2 八戸市域における縄文後期遺跡のニッチ存在確率に対する標高の寄与

表1 八戸市域における縄文早期遺跡のニッチ存在確率に対する環境変数の寄与度

環境変数	寄与率	順列重要性
標高	94.5	93.2
陸域マスク	4.2	5.2
傾斜方向	1.3	1.4
傾斜角	0.1	0.2

表2 八戸市域における縄文後期遺跡のニッチ存在確率に対する環境変数の寄与度

環境変数	寄与率	順列重要性
標高	95.5	92.6
傾斜方向	2.7	4.7
陸域マスク	1.8	2.3
傾斜角	0.1	0.4

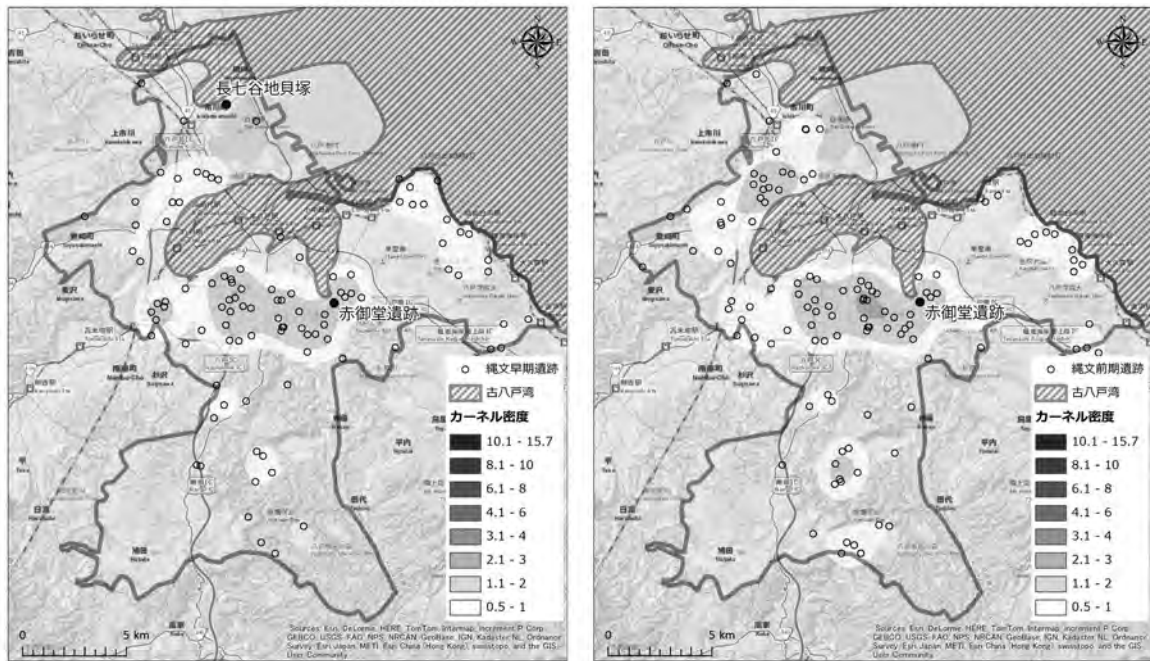


図5 古八戸湾周辺における縄文時代早期と前期の遺跡分布と密度

(図4-2)。すなわち、生態ニッチモデル (Maxent 最大エントロピー法) においては、縄文早期集落は比較的標高の低いところに集中すること、後期集落は低いところに加えて高いところに第二のピークをもつことが指摘できる。

4 新井田川流域における集落変遷

ここでは、計量的分析による結果を検証する為に、新井田川流域における遺跡の通時的変遷について、出土遺構・遺物の検討を行った。対象とするのは新井田川上・下流域に位置する旧石器時代以降の26遺跡である。

小稿では、新井田川流域を便宜的に上・下流域に二分して、旧南郷村に位置する南郷区を「上流部」、合併前の八戸市域を「下流部」と区分した。上流部は岩手県側で雪谷川・瀬月川に分岐するが、ここでは岩手県側の遺跡については検討していない。

発掘調査が行われた遺跡を検討対象とし、その中から遺跡の性格が比較的明らかになっている重要な遺跡を選んだ。遺跡台帳に記された地表面採集資料などからの時期判定においては、大別時期による時期別変遷を量的データで示すのに好都合の反面、細別時期における変化と集落規模につ

ての検討を困難としている。この問題を解消するために、縄文時代については土器型式から初頭、前葉、中葉、後葉、末葉の細別区分をした。弥生時代については、前期、中期、後期、古代以降については西暦で区分した。ここでいう古代とは5世紀～11世紀のことをさす。

結果を模式的にあらわしたのが図6である。

(1) 旧石器から縄文時代前半期

旧石器から縄文時代草創期における遺跡はきわめて低調である。田向冷水遺跡 (八教委 2008) で高館火山灰と八戸火山灰 (1.7～1.5ka) の間から、後期旧石器時代後半期における石刃石器群と石英系の礫石器群が出土している。旧石器時代の遺跡はこの1例にとどまり、縄文時代草創期中頃の遺跡として牛ヶ沢 (4) 遺跡 (八教委 1997、2001、2004a,b)、草創期末から早期初頭の遺跡として潟野遺跡 (県教委 2006b、2007) と田向冷水遺跡があげられるに過ぎない。牛ヶ沢 (4) 遺跡で爪形文土器が出土しているが、単体資料であるため詳細はつかめない。潟野遺跡と田向冷水遺跡で草創期末から初頭にあたる無文土器・刺突文土器が出土している。資料数は僅かであり、同時期の遺構も確認されていない。

新井田川中・下流域で遺跡数が明確な増加を

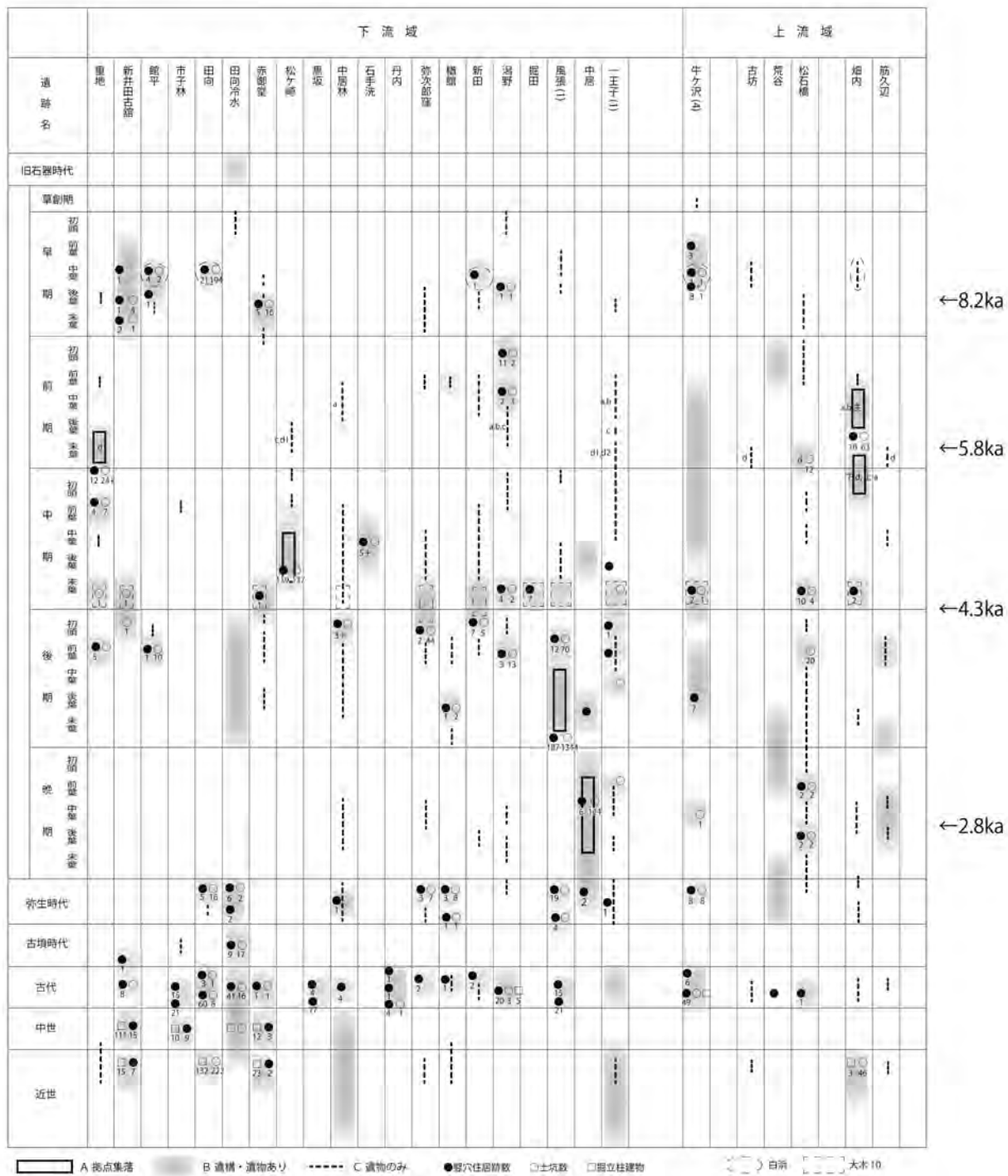


図6 新井田川流域における集落変遷概念図

※型式不明の土器、時期不明の住居・土坑についてはカウントしていない

みせるのは、早期中葉の白浜式以降である。田向遺跡（八教委 2009）で白浜式期の土坑が 194 基、住居址が 21 棟、田向遺跡と新井田川を挟んで対岸の館平遺跡（八戸市 2009）で白浜式期の住居址 4 棟が見つまっている。新田遺跡（県教委 2006a）や牛ヶ沢（4）遺跡でも白浜式期の住居址がそれぞれ 1 棟確認されており、牛ヶ沢（4）

遺跡では土坑などの併設遺構も検出されているようである。

田向遺跡と館平遺跡のいずれの住居も建て替えによる遺構プランの重複跡が見られることから、早期中葉という時間幅の中で数件単位のみまりが数段階にわたり変遷したものと考えられる。しかし、たとえば上流域の畑内遺跡（県教委

2001) で白浜式期の土器片のみが出土するなど、遺構を伴わない短期滞在型の遺跡もみられる。

牛ヶ沢(4)遺跡においては白浜式期の小規模な集落形成の前後にも日計式の住居址3棟、ムシリI式の住居址8棟、土坑1基が構築されており、早期を通して集落を形成した様相をみせるが、例えば新田遺跡でムシリI式・物見台式期、重地遺跡(八教委2002)で物見台式期の土器片のみが散発的に見つかるといった散在行動を彷彿とさせる出土状況もみられる。この点は早期中葉における八戸市域の遺跡数の増加が、人口増をイコールで意味しないことを示している。すなわち、早期中葉における遺跡の増加は、移動範囲の拡大を示している可能性がある^{注1)}。

早期後葉から末葉において遺跡数が微減している。この点については、8.2ka ボンドイベントと縄文海進に関係している可能性があり、気候変動との関係でこの原因を考えておく必要がある。下流域の弥次郎窪遺跡で寺ノ沢・ムシリ・早稲田5類土器、上流域の松石橋遺跡(県教委2003b)で早期末葉の遺物が単発的に見つかるほか、早期後半の拠点的といえる遺跡は新井田川流域で減少している。この点は、縄文海進後に古八戸湾沿岸部に拠点的な遺跡を展開した結果であるとみておくのが妥当であろう。

図5に東京大学・八戸市埋蔵文化財センター・是川縄文館による共同研究「古八戸湾変遷と集落生態系の復原」により推定復元された古八戸湾の範囲(一木他2012)と縄文時代早期と前期の遺跡の位置と密度の関係を示す図を掲げた。約8,150~8,000cal BPの早期末から前期初頭に残された大規模遺跡、すなわち長七谷地貝塚や赤御堂遺跡(八教委1989)が、推定される海進後の海岸線付近に立地していることが分かるであろう。この点は、縄文海進後に古八戸湾沿岸部に拠点的な遺跡を展開した結果を傍証しているように思われる。

早期末の新井田川流域における遺跡は一見減少したように見えるものの、実際この時期の大規模遺跡は当時の沿岸付近に水没した可能性が高い。早期末から前期初頭における縄文海進は、立地の選択に大きく影響を与えたと考えられよう。

新井田川流域に再び遺跡が点在し始めるのは、前期前葉の早稲田6類に至ってからである。前述の重地、畑内遺跡の他、弥次郎窪遺跡(県教委1990)、檜館遺跡(県教委2003a)などで早稲田6類の土器片が単独で出土しはじめる。潟野遺跡においては、早稲田6類期の住居址2棟、土坑3基が検出されているが、全体として早稲田5類以降に住居址をもたない遺跡が多く、住居跡数は伸びない。

前期中葉以降は、上流域の畑内遺跡や下流域の重地遺跡で大型住居を伴う拠点的な集落を形成しているが、よく見ると早期を通して遺跡数には凸凹の増減がみられる。新井田川流域においては、円筒下層a,bとdに遺跡が多く、c式期に遺跡の規模が縮小している(図6)。円筒下層a,b式期の遺跡は上流域の南郷区に集中をみせるが、円筒下層d式期においては上流域と下流域の両方に認められる。円筒下層d式の集落は上流域の畑内遺跡と下流域の重地遺跡で二項的な存在をみせており、河川移動を伴った集落間交流が頻繁に開始した可能性がある。全体として円筒下層d式期の集落は上流域に多く、畑内のほか古坊、松石橋、筋久保遺跡などで確認される。

畑内遺跡においては円筒下層a・b式期と円筒下層d2式~円筒上層1式期に集落規模のピークを迎える。円筒下層a・b式期に住居址10棟と土坑63基以上という大規模集落を形成しており、ふたたび円筒下層d2式~円筒上層1式期においては大型住居が出現している(県教委2001)。胎土分析からは、畑内の異系統の円筒下層b式土器の大半が、畑内に居住した人々の手により製作されたと判明しており、興味深い(ホール2001)。また、多量のフラスコ状土坑の存在は、植物質食料の利用技術の高まりを示している(小林2011)。畑内には、日本海側の黒曜石や外洋性の海産資源の搬入も認められる。海産資源の獲得に際しては、直線距離にして17km離れた新井田川河口に存在した集落との交流(小林2001)、あるいは占拠領域の拡大によって、可能になったと考えられる。石手洗遺跡(八教委1990)、松ヶ崎遺跡(村木2011)、重地遺跡は、調査範囲が狭く全貌をつかみづらいが、重複する竪穴住居址

と土坑が狭い範囲に集積しており、やはり中期中葉の中心的な集落として考えられる。

石手洗や松ヶ崎、重地など、浜住みの集落と山住みの集落との往還的な交流を裏付けるように、先のカーネル密度分析による結果は、中期において新井田川流域に沿って南北方向に遺跡が展開するよう遺跡立地が変化していることが指摘できる。中期の遺跡位置（図2 [24]）のカーネル密度図によると、遺跡集中のピークをみせる3つの範囲（A,B,C）が、新井田川に沿って直線的な配列をみせるのがわかる。中期の遺跡立地については、中振浮石降下後の環境変化を積極的に評価して、内陸への移動が認められるとの評価がこれまでであったが（中村 2015: 179）、そうした理解と矛盾はない。ここでは、拠点的な遺跡が新井田川に沿って線状配列をみせるのが中期の遺跡立地の特徴であったとみておきたい。

前期末から中期にかけて本格化した堅果類や根茎類など、植物質資源の利用技術の高まりと連動して、おそらく河川を媒介とした動植物資源の上下移動が活性化したと考えられる。山住みの村として畑内遺跡、浜住みの村の第一候補として重地遺跡をあげておく。

以上のように、畑内における大型集落の成立から石手洗、重地を経て、松ヶ崎集落の解体にいたるまでの前期中葉から中期後葉にかけては、円筒下層c式期など停滞期を挟みながらも、基本的には多様な食糧資源と物資の獲得・交換を目的とした拠点的な集落が河川に沿って線状に展開していたとも考えられる。

（2）縄文時代後半期

第二の画期は、縄文時代中期末葉から後期にかけての遺跡数の急増に求められる。八戸市域における縄文時代後期は、密度分析により遺跡数が早・前・中期の2倍強に達していることが判明した。この点については、中期後葉における大木系文化の北進現象、あるいはトチノキへの植生の主要素の交代（辻 2006、吉川 2008）などに関わる構造変動を示すものと理解されるが、複合的な要因がこれに関係していると考えたい。

確かに、大木系の複式炉が新田遺跡の住居址4

棟に出現するなど（中村 2006）、東北南部の文化要素が北上をみせるのもこの時期である。一見遺跡数が急増したように思える中期末葉から後期前葉は、規模が縮小した「見かけの」遺跡の増加とみるべきであり、集落の解体と分散居住といった社会の変化を示すものである可能性が高い（村木 2010、2011、市川 2012、菅野 2011）。

八戸市域における住居址と遺跡数の相関を調べた市川健夫（2012）は、大木10から十腰内Iまでの住居址数の急激について注意している。同様の傾向は関根達人（2014）によっても確認されている。中期末葉から後期前葉にかけての遺跡数と住居址数の増加は、早期のそれとは質的に異なった社会再編を彷彿とさせる構造的な変容プロセスとして考えられよう。

新井田川流域に限定してミクロにこの変化を追ってみたのが図6である。興味深いことに、中期末葉から後期初頭にかけて、集落の成立と解体が短期間に起きているのがよく分かる。新井田川流域における中期末葉の13遺跡の約6割（8/13遺跡）が新たに村を構えており、例えば下流域の掘田遺跡（八戸市 2009）、赤御堂遺跡、潟野遺跡、上流域の牛ヶ沢（4）、畑内遺跡などでは、中期末葉に至ってはじめて村が営まれている。

牛ヶ沢（4）遺跡と畑内遺跡においては、それぞれ中期前半においては大規模集落を構えていたが、そうした大規模な集落は中期後葉までに一旦廃絶している。そして、中期末葉の大木10式期に再び小規模な村を形成し、後期中葉まで断続的に継続させたと考えられる。

図6で大木10式期の遺跡を点線枠で囲った。この時期の遺跡が僅かな住居と遺構数からなる規模の小さいものであり、しかも一時的なものを主としていることがわかる。赤御堂遺跡、牛ヶ沢（4）遺跡、畑内遺跡などは住居址1・2件からなる分村としての機能を推定できる可能性があり、基本的には後期前葉の十腰内I式まで、この集落構造は継起するものと考えられる。

生態ニッチモデル（Maxent 最大エントロピー法）においては、縄文早期集落は比較的標高の低いところに集中、そして後期集落は低いところに加えて高いところに第二のピークをもつことが明

らかになった。例えば、島守地区においても、後期に高台居住が開始している。こうした新たな居住域の開拓と集落構造の変化の背景には、縄文社会の再編を意味する変容が、中期末葉から後期初頭に起きたと考えることができる。

後期中葉以降の十腰内Ⅲ～Ⅴ式に至り、風張(1)などの拠点集落が新井田川下流域に登場するが、こうした居住場としての明らかな拠点的性格を帯びた遺跡というものは、十腰内Ⅲ～Ⅴ式以降、晩期までにより一極化に向かったと考えられる。

縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての風張(1)と中居は密接な関係がある。晩期前葉も後期後葉以降と基本的には同型の集落構造を有していた可能性が高く、拠点としての大規模遺跡(風張(1)や中居)の周辺に衛星的に1・2件の住居と遺構を伴う小さな集落、あるいは短い居留地を有する集落構成に変化していったものとみられる。

(3) 弥生時代以降

弥生時代以降は、古代と中・近世に遺跡の増加をみせている。弥生時代における遺跡は、散漫な分布を示し、居住の拠点を形成しない。遠賀川系の土器が南郷区松石橋遺跡、荒谷遺跡、畑内遺跡、櫛館遺跡など新井田川下流域から中流域にかけて出土しており、河川を中心とした遺跡の展開をみせる。古代に至って田向遺跡、潟野遺跡、牛ヶ沢(4)遺跡において20～60棟にのぼる住居址、掘立柱建物が検出されるようになる。古代においては、例えば田向遺跡で7世紀中葉～後葉の飛鳥時代、9世紀中葉～後葉の平安時代に集落が設営されている。7世紀中葉に突如として集落が形成されており、その後に僅かな断絶を挟み、再び9世紀中葉～後葉に集落の盛行を迎えている。10世紀中葉から11世紀にかけては、新井田川下流域における田向遺跡、潟野遺跡、新田遺跡、中流域に位置する牛ヶ沢(4)遺跡、松石橋遺跡でおしなべて集落が廃絶している。田向遺跡や牛ヶ沢(4)遺跡にみる古代遺跡の時期別消長は、人の移住と政治的世界の介入を背景とする、北東北地方にみられる断続的な集落盛衰プロセス(松本

2006、2010)の一端をあらわしていると考えられる。そして、10世紀前葉をピークとして、11世紀にかけて廃絶をみせるという、列島規模で生じた古代集落の変動(宇部 2013)を反映しているものといえよう。

5 遺跡データベースから見た八戸の集落変遷一万年

以上のマクロ分析(カーネル密度分析、生態ニッチ分析)とミクロ分析(新井田川流域の考古学的分析)を通して、八戸市域における過去一万年の集落変遷に関して得られた結論を以下に要約する。

1) 旧石器時代と縄文時代草創期における遺跡数については、調査深度に起因する「未発見」といった理由を考慮しておく必要があるものの、早期中葉における遺跡数の急増をひとつの画期とみなすことができる。八戸市域においては、白浜式期において低地への占拠が顕著になる。

2) 白浜式期以降の遺跡数の減少については、現時点ではいくつかの可能性が指摘できるが、安斎(2012a,b, 2014)が指摘するように、気候変動8.2kaボンドイベントによる影響が甚大であったとみておきたい。温暖—冷涼を経て、気候が回復するまでに土器型式が目まぐるしく、しかも量比の増減をもって変化する。このことはこの時期の社会的不安定を傍証する。

3) 早期中葉からの温暖期(海進期)には、長七谷地貝塚や赤御堂遺跡など、大規模遺跡が八戸湾の沿岸部に立地する。この時期の新井田川本流域では、むしろ遺跡数が減少するが、この理由は海進期における居住場の主体域が、内陸部から沿岸部へと変化したためと考えられる。沿岸部の遺跡が現在水没していると考えられるならば、この点は理解しやすい。こちらも列島規模で起きる海進期の構造変動(安斎 2013、2014)といえよう。

4) 前・中期についてはカーネル密度分析から、顕著な遺跡立地の変化を見出せなかったが、拠点となる遺跡はふたたび内陸部にも移動しはじめたと考えた。新井田川本流域においては、例えば上流域の畑内遺跡などの円筒下層a・b式期とd式期において頻繁な河川移動と交流を介した大規模

集落が形成された。笹ノ沢（3）遺跡など、数世代土器型式を存続させる大規模遺跡もあり、こうした大規模集落の解体が中期後半に訪れる。

5) 縄文時代後期は、遺跡数が早・前・中期の2倍強に達している。生態ニッチモデル（Maxent 最大エントロピー法）により、後期集落は低いところに加えて高いところに第二のピークをもつことが判明した。後期には活動領域が拡大し、新天地の開拓が頻繁におこなわれたと理解できるが、この新天地開拓の背景にはグローバルな気候変動と大木系文化の北進による地域社会の再編が関係したと考えられる。中期末葉以降においては、本村と分村からなる二項的な集落構造を成立させた。

6) 大木 10 式期において住居址 1・2 件からなる分村化が進んだ。この集落の基本構造は、後期前葉まで続いたと思われるが、中葉以降もこうした集落規模の格差は続く。風張（1）遺跡や中居遺跡などの超拠点的な集落が存在することが示すように、物質文化と精神文化にかかわる活動の主体場が、十腰内Ⅲ～Ⅴ式以降、晩期まで一極化に向かった。

7) 古代以降は、政治的世界の介入を背景とした複雑な人の移住プロセスと連動したドラスティックな集落変遷を確認した。大別時期による考古学的証拠からの追求には限界もあり、思うような結果は得られなかったが、東北地方における古代集落の断続的な集落盛衰プロセスを確かめた。

6 おわりに

縄文時代中期末葉から後期前葉にかけての八戸市南部域における遺跡分布の大変化については、冷涼化による 4.3ka ボンドイベントによる生活資源環境の変化と東南北部における大木系文化の北進という文化現象の変化から説明されることが多かった（岡田 1988、1991、安田 1980、福沢他 1998、辻 2006、川端・山本 2010、中村 2013、村木 2010、2011、市川 2012、安斎 2014 等）。本稿で試みた密度分析によれば、中期は新井田川流域に沿った南北方向の遺跡展開が前期よりも顕著になっており、例えば過去 1 万年に

起きた遺跡数の爆発的増加をみせる時期、すなわち早期中葉の遺跡増加のあり方と中期後葉から後期前葉のあり方が遺跡密度の点で異なると判明した。中期末葉の大木 10 式期において、突如として小規模な村が出現する。住居址 1・2 件からなる分村がこの時期に進んだと考えられる。遺跡数の急激な増加は、この影響によると考えられよう。こうした集落の基本構造は、基本的には後期前葉の十腰内 I 式まで続いたと考えられる。

早期中葉においては、低地の中心的な集落を軸とした散在を示すが、前期から中期にかけては、河川流域に沿った「浜一山」、「山一浜」の移動を繰り返している。すなわち、低地を中心として散漫に広く分布をみせる早期末から前期初頭の遺跡分布のあり方と、南北方向に 3 つのピークをみせ、それらのピークが新井田川に沿って直線的な配列をみせる中期の遺跡分布のあり方とは、流域と集落形成の関わり方という意味における質的な変化がある。すなわち、前期末から中期にかけて多角的な食物資源の利用技術が開発されるようになり、貯蔵した食料や物資の頻繁な交換を媒介として、新井田川流域の南北移動は本格化した可能性がある。

馬淵川とともに南北に縦走する新井田川は、中期後葉から後期初頭にかけて北進してくる大木系文化を受け入れる「路」となっており、この交通路としての機能をもつ情報のルート、すなわち大木系文化を受容する「路」というものは、すでに早期中葉までに成立していたのではないか。

この点については今後の検討課題としたい。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館の職員各氏には大変お世話になった。本研究は八戸市教育委員会の全面的協力なくしてなし得なかったものであり、本プロジェクトにおいて更新した遺跡 DB の基本台帳は、八戸市教育委員会がこれまでに作成したものに基いている。（公財）青森県埋蔵文化財センターからも調査の過程で必要な発掘調査報告書と PDF をご恵与いただいた。お世話になった皆様に感謝

の意を申しあげる。

本稿は、長井による調整のもと、3(1)A、3(2)Aの分析手法の部分を近藤が執筆し、それ以外の1、2、3(1)B、3(2)B、4、5、6を長井が執筆した。

注 釈

1) 齊藤慶吏(2011)は、早期中葉(齊藤Ⅱ期)に遺跡数が最多になることを指摘している。県下の早期の遺跡は、白浜式期を最大として、その後に急な減少に転じ、ふたたび縄文海進が進む約7,280～7,200BP(約8,150～8,000cal BP)の条痕文期に遺跡数が増えることを指摘しているが、これと同様の傾向が八戸市域においても指摘できる。

参考文献

- 青森県教育委員会 2014『青森県遺跡地図』、<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/isekitizu.html> (2014年11月20日アクセス)
- 安斎正人 2012a「東北地方における縄紋時代の構造変動」『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究』35-46頁、平成19年度～平成23年度私立大学学術研究高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター整備事業」研究報告書、東北芸術工科大学東北文化研究センター。
- 安斎正人 2012b「縄紋時代早期論(中)」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』11: 3-29。
- 安斎正人 2013「縄紋時代早期論(下)」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』12: 3-31。
- 安斎正人 2014『気候変動と縄文文化の変化』同成社。
- 市川健夫 2012「八戸市内における縄文時代の竪穴住居数と居住規模」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』1: 11-20。
- 宇部則保 2014「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』2: 11-31。
- 岡田康博 1998「東日本の縄文文化」『季刊考古学』64: 31-35。
- 岡田康博 1991「青森県内の縄文集落について—前・中期の場合—」『よねしろ考古』7: 23-32。
- 可児通宏 1982「多摩ニュータウン地域の縄文集落」『考古学ジャーナル』203: 15-19。
- 上條信彦(編) 2016『津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』日本考古学協会2016年度弘前大会実行委員会。
- 川幡徳高・山本尚史 2010「縄文時代の古環境、その2—三愛丸山遺跡周辺の環境変遷—」『地質ニュース』666: 31-38。
- 菅野智則 2011「北上川流域の縄文集落遺跡」『季刊東北学』26: 84-101。
- 菅野智則 2015「東北縄文集落の姿」『北の原始時代』阿子島香(編)、100-132頁、吉川弘文館。
- 工藤 大 1997『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第40集、青森県立郷土館。
- 國木田 大・吉田邦夫・辻 誠一郎 2008「東北地方におけるトキノキ利用の変遷」『環境文化史研究』1: 7-26。
- 小杉 康 2009「北海道の縄文集落と地域社会」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅰ 集落の変遷と地域性』鈴木克彦・鈴木保彦編、11-50頁、雄山閣。
- 小林和彦 2001「畑内遺跡から出土した動物遺存体」『畑内遺跡Ⅶ 八戸平原開拓建設事業(世増ダム建設)に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書308集、19-20頁、青森県教育委員会。
- 小林 克 2011「米代川水系の縄紋社会史—円筒土器文化から環状列石まで—」『季刊東北学』26: 23-43。
- 小林謙一・津村宏臣・坂口 徹・西本豊弘 2002「武蔵野台地東部における縄文中期集落の分布—縄文集落の生態論のための基礎的検討—」『セトルメント研究』3: 1-60。
- 小林謙一 2012「縄文時代中期集落(東京都内)データベースについて」『国立歴史民俗博物館研究報告』172: 455-475。
- 小林達雄 1973「多摩ニュータウンの先住者—主として縄文時代のセトルメント・システムについて—」『月刊文化財』112: 20-26。
- 小山修三・及川昭文 1996「—青森県遺跡データベース—遺跡分布から探る地域性—」『シンポジウム「考古学とコンピュータ」』5-10頁、重点領域「人文科学とコンピュータ」事務局 葉山町。
- 近藤康久・小口 高 2011「生態学的予測モデルの考古学への応用に関する研究」『CSIS DAYS 2011 研究アブストラクト集』12。
- 齊藤慶吏 2009「青森県域における縄文時代前期前半期集

- 落の様相』『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料』、319-336 頁、日本考古学協会 2009 年度山形大会実行委員会。
- 齊藤慶史 2011「青森県域における縄文早期の様相」『公開シンポジウムⅡ 予稿集 縄紋時代早期を考える』、27-37 頁、東北芸術工科大学考古学研究室。
- 坂本 彰・倉沢和子 1990「各時代の概要」『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X、331-353 頁、横浜市埋蔵文化財センター。
- 設楽博己 2000「縄文系弥生文化の構想」『考古学研究』47(1)：88-100。
- 杉山陽亮 2012「是川縄文館共同研究について」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』1：巻頭言。
- 鈴木克彦 2009「東北地方の縄文集落の社会組織と村落」『シリーズ呪文集落の多様性Ⅰ 集落の変遷と地域性』鈴木克彦・鈴木保彦編、51-94 頁、雄山閣。
- 関根達人 2014「青森県における縄文時代の遺跡数の変遷」『第四紀研究』53 (4)：193-203。
- 高瀬克範 2000「東北地方弥生時代前・中期の集落」『物質文化』68：16-31。
- 高瀬克範 2003「岩木川流域における縄文晩期および弥生時代の遺跡群」『海と考古学』5：53-72。
- 谷口康浩 1993「縄文時代集落の領域」『季刊考古学』44：67-71。
- 谷口康浩 2002「セトルメントの地理的変異—港北・多摩ニュータウン地域における縄文時代集落の対照—」『帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集4 ムラ研究の方法—遺跡・遺物から何を読みとるか』畑大介編、1-32 頁、岩田書院。
- 千葉 史・横山隆三 1999「遺跡立地の地形特徴」『情報考古学』5 (1)：1-12。
- 千葉 史・貝森和美・横山隆三・菊池強一 2000「地理情報システムを用いた遺跡集落ブロックの形成と最適交流経路の推定—北奥羽地方の縄文時代中期遺跡の分布について—」『情報考古学』6 (2)：1-10。
- 辻 誠一郎 2006「三内丸山遺跡の生態系史研究—成果と展望—」『植生史研究』特別2：1-5。
- 辻 誠一郎・一木絵里・松本優衣・安室 一・市川健夫・宇部則保・村木 淳・杉山陽亮・西村広経 2015「八戸地域の縄文時代草創期～中期の環境変動と集落生態系」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』4：5-36。
- 津村宏臣・小林謙一・坂口 徹・西本豊弘・建石 徹 2002a「縄文集落の生態論（2）—遺跡分布の位相の評価とセトルメントシステムの予測—」『動物考古学』18：1-37。
- 津村宏臣・小林謙一・坂口 徹・西本豊弘・建石 徹 2002b「縄文集落の生態論（3-1）—考古学的文化要素の傾向面分析—」『動物考古学』19：39-72。
- 中村 大 2010「祭祀考古学における研究手法の開発—クロス・コンテクスチュアル分析法と多重スケール分析—」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』2：49-58。
- 中村 大 2011「祭祀考古学における多変量解析と GIS の活用—秋田県米代川流域の縄文時代資料を例として—」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』3：27-38。
- 中村哲也 2006「第6章 考察」『新田遺跡Ⅱ』、149-159 頁、青森県教育委員会。
- 中村哲也 2013「八戸市南部における縄文遺跡の分布とその変遷」『青森県立郷土館研究紀要』37：1-12。
- 中村哲也 2015「八戸市・階上町域における円筒下層式土器以前の遺跡分布」『青森県立郷土館研究紀要』39：175-183。
- 西本豊弘・津村宏臣・小林謙一・坂口 徹・建石 徹 2001「縄文集落の生態論（1）」『動物考古学』17：73-82。
- 根岸 洋 2010「縄文晩期／弥生移行期における居住戦略の検討」『第5回シンポジウム年代測定と日本文化研究』95-105 頁、加速器分析研究所。
- 根岸 洋・市川健夫 2011「青森県内における縄文遺跡群の量的評価に関する研究」『平成23年度青森県考古学会秋季大会資料集』7-11 頁、青森県考古学会。
- 八戸市史編纂委員会(編) 2009『新編八戸市史 考古資料編』八戸市。
- 一木絵里・松本優衣・辻 誠一郎 2012「八戸・上北地域の縄文時代の海と陸の生態系史」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』1：1-10。
- 一木絵里・辻 誠一郎・杉山陽亮・村木 淳・宇部則保・中村俊夫 2015「青森県八戸市の縄文時代早期貝塚出土試料の14C年代と海洋リザーバー効果」『第四紀研究』54 (5)：271-284。

福沢仁之・加藤めぐみ・山田和芳・藤原 治・安田喜憲
1998「湖沼年縞堆積物に記録された最終氷期以降
の急激な気候・海水準変動」『名古屋大学加速器質
量分析計業績報告書』9：5-17。

ホール・マーク 2001「畑内遺跡出土前期および中期縄
文土器の蛍光 X 線分析研究」『畑内遺跡Ⅶ 八戸
平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴う遺跡発
掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書 308 集、
11-17 頁、青森県教育委員会。

松本建速 2006『蝦夷の考古学』同成社。

松本建速 2010「蝦夷は古代日本国領域からの移住者か」
『季刊東北学』22：93-114。

村木 淳 2010「新井田川下流域における縄文・弥生集落」
『公開シンポジウム予稿集 河川流域の縄紋景観』、
5-12 頁、東北芸術工科大学考古学研究室。

村木 淳 2011「新井田川下流域における縄文・弥生集落」
『季刊東北学』26：44-66。

安田喜憲 1980『環境考古学事始』日本放送出版協会。

吉川昌伸 2008「東北地方の縄文時代中期から後期の植生
とトチノキ林の形成」『環境文化史研究』1：27-35。

横山隆三・千葉 史 1997「地理情報システムを用いた遺
跡データベースの構築」『情報考古学』3（2）：29-
40。

横山隆三・千葉 史 2002「地理情報システムによる遺跡
データベースの構築」『電子情報通信学会誌』85（3）：
176-180。

Banks, William E., Francesco d'Errico, Harold L. Dibble,
Leonard Kriskalka, Dixie West, Deborah I. Olszewski,
A. Townsend Peterson, David G. Anderson, Christopher
Gilliam, J. Anta Montet-White, Michel Crucifix, Curtis
W. Marean, María-Fernanda Sánchez-Goñi, Barbara
Wohlfarth, Marian Vanhaeran 2006 Eco-Cultural Niche
Modeling: new tools for reconstructing the geography and
ecology of past human populations. *PaleoAnthropology*
2006: 68-83.

Hodder, Ian and Clive Orton 1976 *Spatial Analysis in
Archaeology*. Cambridge University Press.

Kondo, Yasuhisa 2015 An ecological niche modelling of Upper
Palaeolithic stone tool groups in the Kanto-Koshinetsu
region, eastern Japan. 第四紀研究 54（5）：207-218.

Peterson, A. Townsend, Jorge Soberón, Richard G. Pearson,
Robert P. Anderson, Enrique Martínez-Meyer, Miguel

Nakamura, Miguel Bastos Araújo. 2011 *Ecological
Niches and Geographic Distributions*. Princeton
University Press.

発掘調査報告書

青森県教育委員会 1990『弥次郎窪遺跡』青森県埋蔵文
化財調査報告書第 128 集。

青森県教育委員会 2001『畑内遺跡Ⅶ 八戸平原開拓建
設事業（世増ダム建設）に伴う遺跡発掘調査報告』
青森県埋蔵文化財調査報告書第 308 集。

青森県教育委員会 2003a『柗館遺跡 八戸南環状道路建
設事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化
財調査報告書第 342 集。

青森県教育委員会 2003b『松石橋遺跡 新井田川河川
災害復旧等関連緊急事業に伴う遺跡発掘調査報告』
青森県埋蔵文化財調査報告書第 360 集。

青森県教育委員会 2006a『新田遺跡Ⅱ 八戸南環状道路
建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文
化財調査報告書第 410 集。

青森県教育委員会 2006b『潟野遺跡 八戸南環状道路建
設事業に伴う遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文
化財調査報告書第 412 集。

青森県教育委員会 2007『潟野遺跡Ⅱ 八戸南環状道路
建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵
文化財調査報告書第 431 集。

八戸市教育委員会 1989『赤御堂遺跡』八戸市埋蔵文化
財調査報告書第 33 集。

八戸市教育委員会 1990『石手洗遺跡・田面木平（2）
遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 36 集。

八戸市教育委員会 1997『牛ヶ沢（4）遺跡Ⅰ 石灰石
採掘表土堆積場設置事業に伴う第 1 次発掘調査』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第 71 集。

八戸市教育委員会 2001『石灰石採掘表土堆積場設置事
業に伴う第 2～4 次発掘調査（牛ヶ沢（4）遺跡Ⅰ）』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第 89 集。

八戸市教育委員会 2002『重地遺跡 宅地造成に伴う発
掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 95
集。

八戸市教育委員会 2004a「牛ヶ沢（4）遺跡Ⅰ」『八戸市
市内遺跡発掘調査報告書 18』八戸市埋蔵文化財調
査報告書第 102 集。

八戸市教育委員会 2004b『牛ヶ沢（4）遺跡Ⅲ 灰石採

掘表土堆積場設置事業に伴う第5～7次発掘調査』

八戸市埋蔵文化財調査報告書第104集。

八戸市教育委員会 2008 『田向冷水遺跡Ⅲ 田向土地
画整理事業に伴う発掘調査報告書3』八戸市埋蔵
文化財調査報告書第118集。

八戸市教育委員会 2009 『田向遺跡Ⅱ 田向土地
画整理事業に伴う発掘調査報告書4』八戸市埋蔵文化
財調査報告書第122集。

八戸市域の縄紋時代早・前・中期の集落

東北芸術工科大学東北文化研究センター（共同研究員）

安齋 正人

1 はじめに

アフリカを出た現生人類（ホモ・サピエンス）が朝鮮半島経由で日本列島に移動してきたのが4万～3万8000年前頃である。ここに始まる列島の後期旧石器時代は土器が出現した1万5000～6000年前頃まで、2万数千年の間続いたとされている。しかしこの氷期の寒暖の変化に応じた人口増減があり、特に東北地方北部の太平洋側はずっと人口が希薄であって、後期旧石器時代の残された遺跡は少ない。発掘調査件数が少ないことも大きな理由であろうが、狩猟具などの良材である黒曜石や珪質頁岩の産地に恵まれていないことも、旧石器時代人のこの地域での行動を制限していたとも考えられる。八戸市街地では新井田川左岸、標高8～20mの河岸段丘上に位置する田向冷水遺跡が知られるだけである。出土した有肩・背部加工尖頭形石刃石器を特徴とする石器類は、岩手県金ヶ崎町柏山館遺跡や北上市愛宕山遺跡など、北上川流域地域との集団の往還関係を示唆している。

最後の極寒期が1万6500年前のハインリッヒ1・イベントをもって終わった。1万4500年前頃からの急激な温暖化（アレレード／ベーリング期相当）を経て、寒冷期の揺り戻し（新ドリアス期相当）が1300年間（約1万2900～1万1600年前）続いた。このおよそ5000年間の寒暖が激しく変化する気候の不安定な更新世終末期が、旧石器時代から縄紋時代への移行期で、縄紋時代草創期と呼ばれている。青森県内では最古の土器の出土で知られる外ヶ浜町大平山元遺跡群や東北町長者久保遺跡など、学史上重要な遺跡が知られているが、草創期の遺跡数は依然として少ない。大平山元I

遺跡群は津軽半島中央部の陸奥湾側にあり、4時期（文化層）にわたって長く利用された場所で、北海道からあるいは北海道へ移動する集団にとって、滞在し易い立地の居住地であった。その一方で、温暖な気候下で定住化の動きを見せた隆起線紋式期には、六ヶ所村表館（1）遺跡などわずかな遺跡が知られるだけで、小集団が南から時折移動してきたような状況である。表館（1）遺跡出土の細隆起線紋土器はやや下膨れ状の尖底深鉢形で底部には乳頭状の突起がある。口径22cm、器高30.5cmで、全面に37条の粘土紐が貼付されている。長野県石小屋洞窟出土の微隆起線紋土器に近いと言われている。出土層からは3基の集石遺構が出ている。短期の野营地跡である。八戸市街地の南西、馬淵川右岸の野場段丘面上にある櫛引遺跡は、新潟県室谷洞窟出土土器に類似した多縄紋系土器と、竪穴住居跡2軒と土坑6基と集石跡が出た集落跡である。居住地に向いた立地で、この地は断続的に近世まで利用されている。

2 早期の集落

約1300年間続いた新ドリアス期相当の寒冷期が終わると、急激に温暖化した。地質年代の完新世の始まりで、縄紋時代早期の始まりでもある。縄紋海進と呼ばれる海面の上昇にともない、列島各地の沿岸部に貝塚を伴う集落が出現した。また落葉広葉樹林の拡大にともない、堅果類（ドングリ）などの植物性食料とシカ・イノシシなどの動物性食料の供給が安定した山麓・丘陵部にも集落が形成された。帯広市八千代A遺跡、函館市中野B遺跡、富士見市越打遺跡、霧島市上野原遺跡など大きな集落が残されている。

この間の北東北3県（青森・秋田・岩手）の遺跡数・集落数の変遷を見てみよう。無紋土器期：14・1、日計式期：74・9、白浜・小舟渡平式期：111・11、寺の沢式期：73・5、物見台式期：167・3、吹切沢式期：72・11、ムシリI式期：146・5、赤御堂式期：142・13、早稲田5類期：117・15（三浦2007）。青森県内の太平洋側、岩手県北部、盛岡市周辺地域に遺跡が集中している。約8200年前に170年間続いた地球規模の気候の冷涼化と急激な回復現象（8.2kaイベント）が縄紋人の生活世界に大きな影響を及ぼしたのであるが、この広域的な集計にはうまく反映していないので読み取れない。おそらく温暖期の物見台式期、冷涼期の吹切沢式期、回復期に当たるムシリI式期であろう。

青森県内の太平洋側では、平野部深く海水が侵入して古八戸湾が形成された八戸市域より、平坦部の多い小川原湖以北の湖沼群地域に多くの集落が形成されたようである。

六ヶ所村の諸遺跡

六ヶ所村から上北町にかけての太平洋岸地域には、北から尾駱沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、小川原湖と湖沼が連なり、湖沼群を形成する。湖沼群は海岸線と隣接するため、縄紋海進時には入り江がつくられ、豊かな生態系が形成されたため、集落遺跡が集中している。尾駱沼と鷹架沼の間にある台地上にある表館（1）遺跡では、白浜式期2軒、物見台式期3軒と土坑16基のほか、おそらく8.2kaイベントの回復以降の早期中葉～末葉に、ムシリI式（第V群土器）期2軒など20軒の検出が報告されている。鷹架沼の南側にある幸畑（1）遺跡から白浜式期の竪穴住居跡が1軒、その東隣の鷹架遺跡と鷹架沼北岸の弥栄平（7）遺跡からそれぞれ物見台式期の竪穴住居跡が1軒出ていて、分散居住の様相を示唆している。鷹架沼と市柳沼に挟まれた七鞍平段丘の北端、鷹架沼南方800mにある新納屋（2）遺跡から3軒の竪穴住居跡が出ている。発掘面積が小さいので集落の全容はわからないが、出土土器の数からみて吹切沢式期とされている。

表館（1）遺跡西隣の発茶沢遺跡でもムシリI

式（第V群土器）期2軒→ムシリI式／赤御堂式中間型（第VI群土器）期7軒（土坑5基）→赤御堂式（第VII群土器）期1軒→早稲田5類（第VIII群土器）期3軒（土坑5基）→直後型式（第IX群土器）期3軒（土坑4基）という変遷で、早稲田5類土器期の直後までこの集落は継続・維持されていた。第VI群土器期に大型住居が現れている。第301号住居跡は隅丸方形で面積50.71㎡、第302号は壁に沿ってベンチ状の段構造をもつ五角形住居で長軸9.96m、短軸4.38m、第303号は隅丸長方形で長軸7.8m、短軸5.14mである。第108号住居跡は3回以上建て替えされた隅丸長方形に近い卵形で長軸9.7m、短軸7.4mの大型住居である。第VIII群土器期に構築され、第IX群土器期に廃棄されたようである。

八戸市とその周辺の諸遺跡

売場遺跡は上北地方南部を東に流れて太平洋に達する奥入瀬川と、岩手県境を超え北東方向へ流れて太平洋に注ぐ馬淵川の下流とに挟まれた丘陵・段丘群（天狗岱・高館台地）にある。付近には日計遺跡、長七谷地貝塚、赤御堂貝塚などの遺跡もある。32軒の早期の竪穴住居跡が検出されている。日計式期1軒、物見台式期1軒、ムシリI式かそれ以前4軒、ムシリI式期6軒、赤御堂式期5軒、早稲田5類期前後9軒、長七谷地Ⅲ類期4軒、次期不明1軒という変遷である。早期前葉に集落が形成されたが、函館市中野B遺跡など一般に大きな集落が形成された中葉の貝殻沈線紋系土器期の人の活動痕跡が見られない。理由がわからないが、8.2kaイベント前の縄紋海進が顕著な時期に当たり、現在は海中あるいは現地表下に埋没している地域に遺跡があるのかもしれない。後葉以降に集落規模が大きくなっている。住居跡内の遺物で注目されるのは、植物性食料の調理具に想定される石皿2点と磨敲凹石類2点が物見台式期の202号住居から、また赤御堂式期の4号住居から石皿4点と磨敲凹石類20点が出ていることである。早稲田5類期の308号住居跡は長形が11mを超える楕円形の大型住居で、60余の側壁柱穴が検出された。

八戸市中心部から南南西へ約6km、標高50～

100mの北から南へ傾く斜面に牛ヶ沢（4）遺跡は立地し、斜面の下に松館川の支流が東西に流れている。縄紋時代早期（22軒）から前期（6軒）、中期（9軒）、後期（15軒）、弥生時代（2軒）、古代（6軒）と、断続的に小集落が営まれていた（図1）。早期の集落は日計式期3軒、白浜式期1軒、前葉～中葉期5軒、吹切沢式期2軒、ムシリI式期8軒、時期不明3軒という変遷である。

見立山（2）遺跡からも限定された発掘であるが、日計式期2軒、赤御堂式期1軒、表館第Ⅸ群土器期2軒、その他3軒が検出された。表館第Ⅸ群土器期の2軒は大型住居で、長軸10.6m、短軸9.25mの隅丸方形と、長軸12.3m、短軸9mの楕円形の住居跡である。

新井田川下流域左岸、河口から4.5kmの地点、標高7～11mの低位段丘上にある田向遺跡から白浜式期の竪穴住居跡21軒が出ている。平面が方形と楕円形のものがあり、小型のもので3～4m、大型のもので10mである。対岸の新井田川と松館川が合流する右岸、標高6～36mの段丘上にある館平遺跡からも白浜式期の竪穴住居跡4軒と土坑2基、寺の沢式期の長さ15mを超える長楕円形の大型住居跡1軒が出ている。標高7～14mの段丘上にある赤御堂遺跡からはムシリI式期3軒、赤御堂式期2軒の住居跡と、土坑16基、屋外炉9基、貝塚が確認されている。

八戸市の北隣のおいらせ町、南に流れる奥入瀬川から1.5kmの柴山丘陵に位置する中野平遺跡からは、東北地方において単一土器型式の集落跡としては最大規模の、白浜式期の竪穴住居跡が12軒出土した。長方形・長円形の大型住居（48.09㎡、36.49㎡）が出現していた。切り合い関係などから4時期に分けられ、1時期に3～4軒であった。当該機のものと思わせる石器類は、石鏃68点、石槍5点、石錘12点、石篋6点、石匙3点、不定形石器36点、石核4点、磨製石斧40点、打製石斧2点、石錘12点、擦・敲・凹石類467点、石皿・台石・砥石類91点、軽石4点という内訳である。石槍が少なく、石錘と擦・敲・凹石類、石皿・台石・砥石類が多いのが目につく。第112号住居跡の床面からオニグルミの核片が検出されている。

先に記した櫛引遺跡からは、貝殻沈線紋期の竪

穴住居跡が3軒出ている。鳥木沢式期が2軒（それぞれが2軒の可能性はあるが、切り合い関係がつかめないために1軒に数えてあるので、本来は4軒なのかもしれない）と、早期中葉の1軒である。

3 前・中期の集落

約8200年前に起こった地球規模の冷涼化で、一時的に停滞あるいは海退に転じたにもかかわらず、上昇し続けた海面（縄紋海進）が早期末から前期初頭にかけて最高位（現海水準より+2～3m）に達した。例えば、埼玉・群馬・栃木県境に奥東京湾・奥入間湾が形成され、沿岸地域にいくつもの大型集落が現れた。温暖な気候下で内陸部にも大きな環状集落が形成されていた。この繁栄は約5800年前に起こった地球規模の冷涼化（5.8kaイベント）によって中断し、前期的集落の解体・再編成、すなわち中期的集落の形成を促すことになった。

北東北においては、早期最終末から前期初頭の長七谷地Ⅲ群土器期、表館式・早稲田6類期にかけて、定住性のひとつの目安である竪穴住居跡数の順調な増加が見られない。今のところ原因は不明であるが、十和田火山の大爆発（中ゼリテフラ）が関係したとみる研究者がいる。定住が明確化するのは大木式土器分布圏にある北上川上・中流域では、大木2式土器（深郷田式・白座式土器）期に入っただけで、円筒下層式土器圏ではさらに一時期遅れて円筒下層a式期である（須原2011）。

遺跡数の増減を見てみると、南部地域（宮城・山形）では前期初頭に急増した後は漸次減少し、大木3～4式期に底を打って、その後漸増していく。この基本パターンは北部（青森）でも同じであるが、変化の度合いの強弱が激しい。前期前葉は南部に比べ遺跡数が極端に少なかったが、円筒下層a式期に突然増加に転じ、b式期に急増した。しかしc式期に一転して減少に転じた後に、d式期で再度急増して最大数に達する（菅野2009）。円筒下層c式期に5.8kaイベントの影響を被り、d2式期に集落が回復したと考えられる。

縄紋時代中期の青森県においては、津軽地方の三内丸山遺跡に対し、上北地方に六ヶ所村富ノ沢

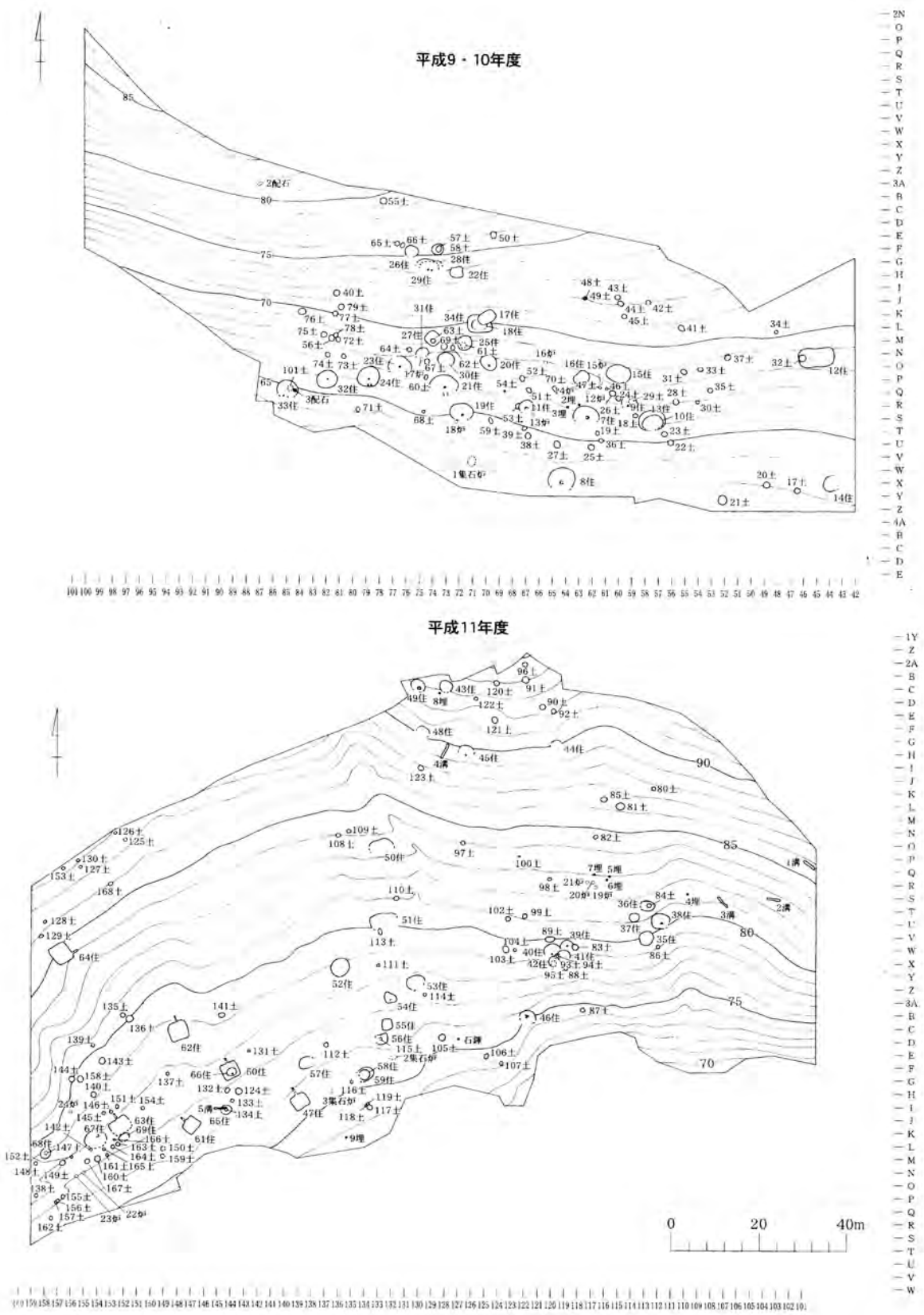


図1 八戸市松館牛ヶ沢(4)遺跡出土早期の集落跡

遺跡の大拠点集落が形成された。集落は環状構成で、円筒上層c式期～弥栄平(1)式期の竪穴住居跡405軒、掘立柱建物跡9棟、配石遺構4基、屋外炉9基、土坑698基などが検出されている。八

戸市域では竪穴住居跡約 500 軒、土坑約 900 基が検出された松ヶ崎遺跡が拠点的大集落の可能性がある。

三内丸山遺跡の調査成果

八甲田山から続く緩やかな丘陵の先端、沖館川右岸の河岸段丘上にある青森市三内丸山遺跡の発掘調査は、従来の縄紋観に数々の変更を促してきた。辻誠一郎は遺跡の調査に関わるなかで、「人為生態系」という概念を創り出した。人が自然と深くかかわりをもつことによって改変され、人のかかわりによって体系的に維持される生態系のことである。縄紋時代前期中葉、人々の住居と開発によって、二次的植生が形成されるや、人々は二次的植生を構成しているさまざまな有用植物を選択的に維持管理するか、特定の場所に移植・栽培して体系的な育成を図った（辻 1997）。

辻が研究代表者を務めた三内丸山遺跡をめぐる研究プロジェクトの成果として、『三内丸山遺跡の生態系史』が出された（辻・能城編 2006）。大きくは次の三つが注目される。①放射性年代は集落が校正暦年で 3950～2150calBC の長期にわたって営まれたこと。縄文時代前期と中期の境が校正暦年で 3450calBC である。②集落の形成とともにナラ類やブナからなる落葉広葉樹林が伐採され、クリの純林が形成され、維持・管理されていた。その後、中期後半にはクリ林の縮小とトチノキ林の拡大が同時に起こった。③大木 2a 式土器は十和田中ゼリテフラ(To-Cu)の下位であること、大木 2b 式土器はその下位か上下にまたがる可能性が高いこと、円筒下層 a 式土器は To-Cu の上位であることが分かった。辻は十和田の火山活動が東北地方北部の生態系と人の社会の攪乱を引き起こし、「円筒土器文化」の形成を誘導したという仮説を提示している。

三内丸山遺跡の集落変遷は 6 期区分で理解されている。第 1 期の前期中葉（円筒下層 a・b 式期）に出現して、第 2 期の前期後葉（円筒下層 c・d 式期）に集落規模が拡大し、第 3 期の中期前葉（円筒上層 a・b 式期）でさらに拡大し、第 4 期の中期中葉（円筒上層 c・d・e 式期）で最大規模になる。第 5 期の中期後葉（榎林・最花式期）も遺構の種

類は第 4 期とほぼ同じであるが、最大規模の大型住居や掘立柱建物はこの時期に属する。第 6 期中期末葉（大木 10 式並行期）に集落規模が縮小し、消失した。遺跡の全貌はいまだ不明の点が多く、5.8ka イベントがこの集落に及ぼした影響もはっきりしていないが、他の集落でその痕跡が確認できる（安斎 2010）

八戸市とその周辺の諸遺跡

畑内遺跡

畑内遺跡は青森県東南端の旧南郷村、岩手県との県境に位置する。標高が 150m 程の谷壁で囲まれた畑内小盆地内を流れる新井田川右岸の標高約 97m～85m ほどの河岸段丘上に位置する。旧畑内集落とともに現在はダム湖底に水没している。遺跡は南北およそ 450m、東西およそ 300m の規模で、早期中葉、早期末～前期初頭、前期中葉～中期初頭、中期後葉～後期初頭、晩期前半、晩期終末～弥生時代前期初頭、弥生時代後期（続縄紋時代）、平安時代に利用されている。特に円筒下層式期と砂沢式期に集住されていたが、この場所は円筒下層 a 式期を覆う土石流、円筒下層 d 式期を削り覆う土石流など、各時期の前後に小・中規模の土石流が数回～数十回あった複雑な地形である。

円筒下層 a・b 式期（約 6000～5650 年前）46 軒、円筒下層 c 式期 13 軒、円筒下層 d 式～円筒上層 a 式期 29 軒など 117 軒の竪穴住居跡、フラスコ状土坑 384 基などの土坑約 573 基、土器埋設遺構 63 基、焼土遺構 116 基、集積遺構 11 基、屋外炉 14 基、礫集石集中地点 1 ヶ所、土器などの捨て場 6 ヶ所などが、時期ごとにその組み合わせを若干変えながら存在していた（図 2）。特に円筒下層 a・b 式期と円筒下層 d2 式～円筒上層 a 式期にかけては、住居跡の数・規模などから拠点集落と考えられる。また中間の円筒下層 c 式・d1 式期は墓域と小規模のいわゆる衛生的な集落であったと見られている。この時期には土器埋設遺構やフラスコ状土坑が多く構築されている。円筒下層 c 式・d1 式期に住居数或いは人口を減少させたのは、土石流に一因があるかもしれないが、主因は生態系の変化・

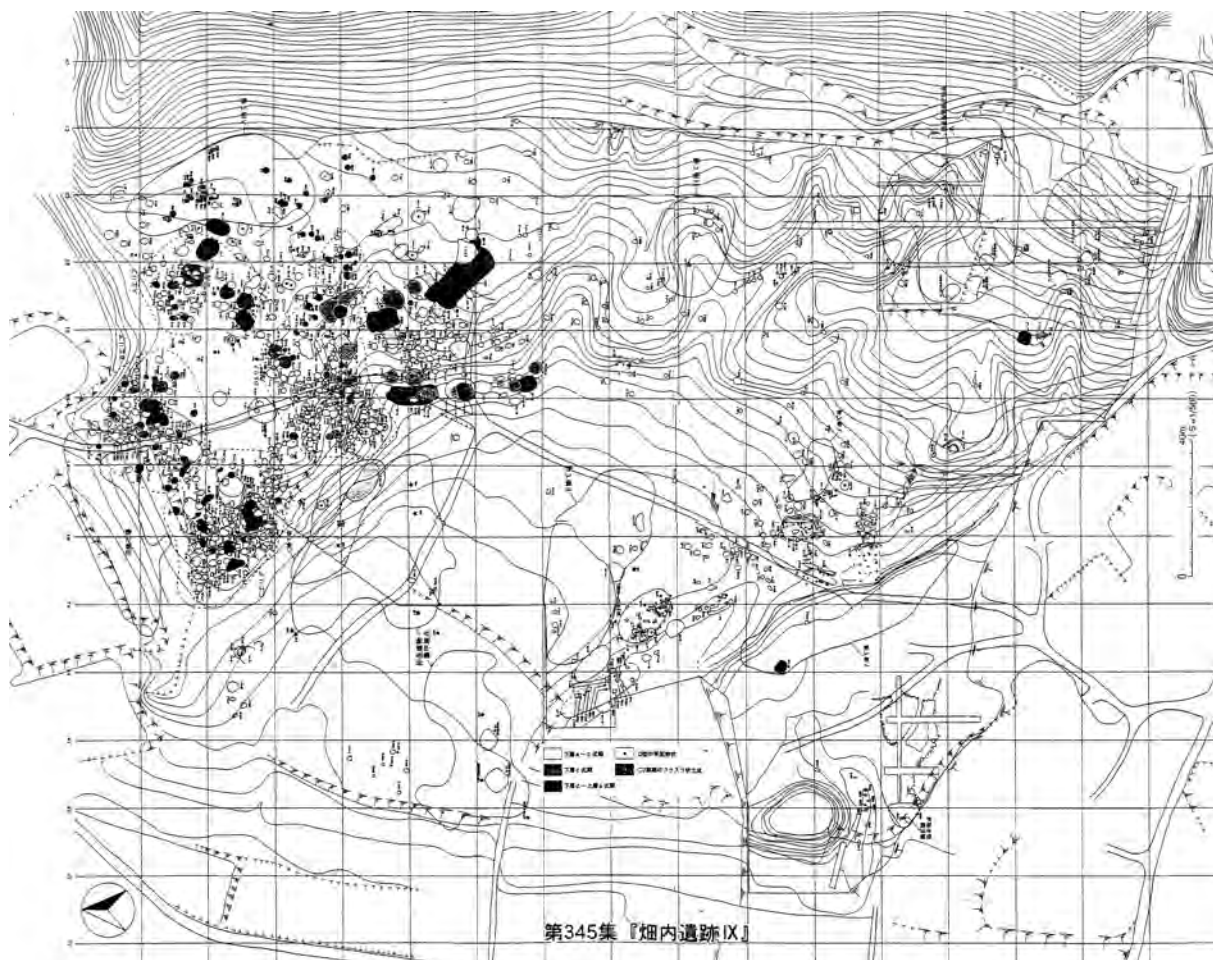


図2 八戸市南郷区島守畑内遺跡出土前期中葉～中期初頭の集落跡

気候の急激な変化（5.8ka イベント）—円筒下層 b 式期末に始まり円筒下層 d2 式期に回復—の影響であった。

大型住居に注目する。円筒下層 a 式期の第 129 号竪穴住居跡は 2 時期に分けられ、大きいほうでは長軸 22.8m、短軸（推定）10m で、第 130 号住居跡、第 312・287・388・389・404・500・502・503・505・506 号土坑と重複している。円筒下層 d2 式～円筒上層 a 式期では、第 84 号竪穴住居跡は最終段階の最大時には長軸 21m、短軸 9m にも及ぶ大型住居で、3 期にわたる建て替えと、1 期ごとに数回程度の拡張が行われたと推定されている（図 3）。第 103～105 号、107～109 号、118 号竪穴住居跡と重複している。第 92 号竪穴住居跡は最終段階の最大時には長軸 14.1m、短軸 6m で、3 期の変遷が確認されている。第 113・114 号竪穴住居跡、第 501・504 号土坑と重複している。

先に記した牛ヶ沢（4）遺跡からは前期の竪穴住居跡 6 軒（円筒下層 b 式期 2、c 式期 1、d 式

期 3）、中期の竪穴住居跡 9 軒（円筒上層 a 式期 3、a～b 式期 1、b 式期 1、大木 7a 式期 1、d～e 式期 1、大木 10 式期 2）が出ている。5.8ka イベントからの回復期（円筒下層 d 式～上層 a 式期）と、中期末～後期初頭に住居跡数が微増するという傾向がここでもみられる。

潟野遺跡

是川地区の是川一王寺遺跡に離接して、新井田川を望む段丘の末端部に位置する。早期中葉末の吹切沢式期の竪穴住居跡 1 軒がこの集落の開始期を示唆する。平成 16 年度調査の C 区から、前期初頭から前葉の竪穴住居跡 13 軒が検出された。他に早稲田 6 類期の土壇墓 3 基が出ていて、第 62 土坑から石鏃が 2 点、第 63 号土坑から石鏃 9 点、石槍 1 点、石匙 1 点、石錐 1 点が出ています。また第 70 号土坑では底面に赤色顔料が見られ、石鏃が 37 点副葬されていた。石鏃の多副葬は津軽地方の円筒下層 c・d1 式期に特異な発現が知られて

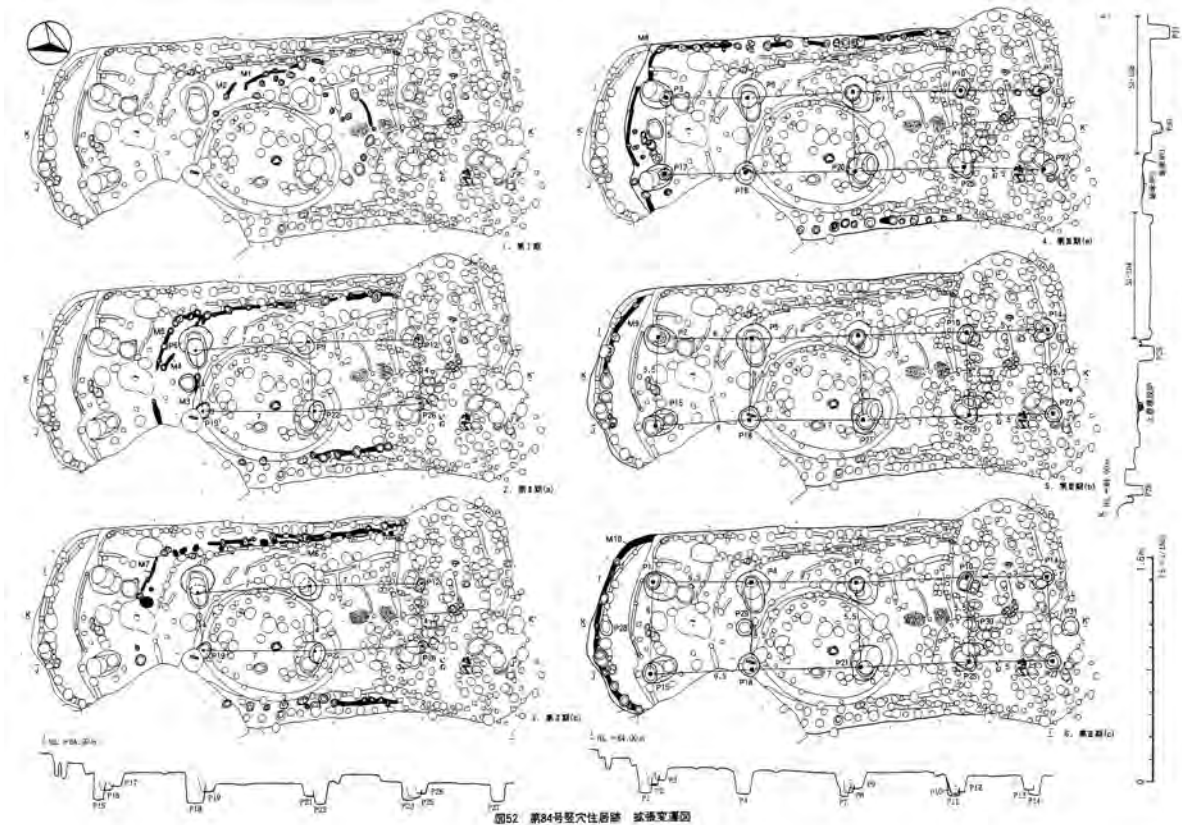


図3 畑内遺跡出土建て替え・拡張の繰り返された大型竪穴住居跡

いて、その関連上で興味深い。平成22・23年度調査のA・B区からも前期初頭から前葉の竪穴住居跡が6軒出ていて、この時期の集落規模が大きくなりそうである。

松ヶ崎遺跡

八戸の中心部から南東へ約4km、新井田川右岸の高館段丘上にある。縄文時代中期後半の大集落の跡である。土器は円筒上層d・e式、榎林式、最花式、大木7b・8a・9式が出土している。調査はまだ遺跡の一部であるが、竪穴住居跡78軒、竪穴遺構2棟、掘立柱建物跡8棟、土坑137基、土壇墓8基、屋外炉4基、溝1条、捨て場1ヶ所が出ている。1993-94年の個人住宅建築に伴う調査の際、調査面積が380㎡という小面積にもかかわらず、重複して切り合う竪穴住居跡41軒が検出されている(図4)。また大きさが25mもある大型住居跡や楕円形の土壇墓がまとまって見つっている。しかし調査地区が部分的であるため、集落構成が今のところよくわかっていない。

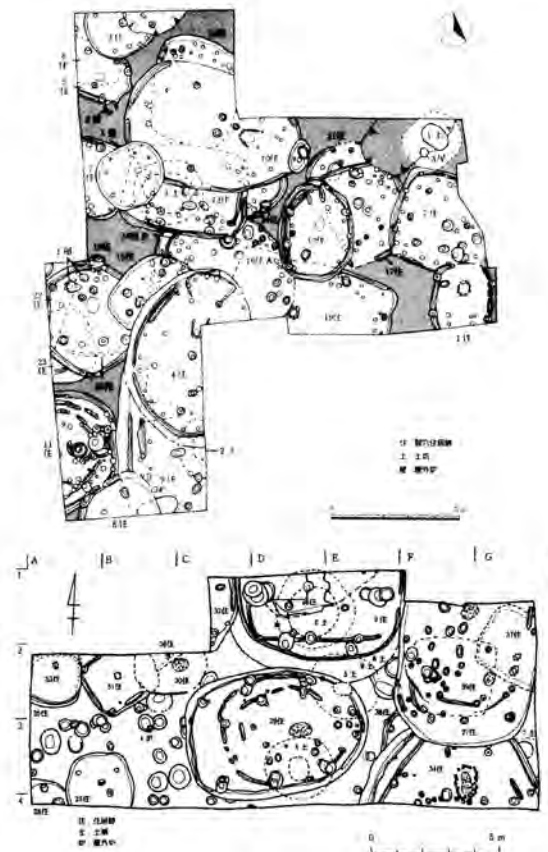


図4 八戸市十日市長根松ヶ崎遺跡出土中期中葉～後葉の重複して切り合う竪穴住居跡群

4 まとめ

旧石器時代・縄文時代の居住形態は、遊動と定住、分散居住と集住で分類されている。基本は地域の収容力、特に食料の生産力に対応すると考えられる。年間を通じて食料が維持できるかどうかで遊動と定住が、また生産力の大きさで分散と集住が分かれる。八戸地域でも、気候が温暖で植物性食料が豊富な時期に、水利の便の良い平坦地に集落が形成・維持され、冷涼で植物性食料が減産した場合には、分散居住をするか移動するかしていた。その考古学的現象は本文に記したとおりである。

引用文献

- 安斎正人 2010 「円筒下層式土器期の構造変動」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』9：3-19。
- 菅野智則 2009 「居住形態からみた東北地方の縄文前期」『2009年度山形大会研究発表資料集』：155-164。
- 須原 拓 2011 「縄文時代早期末葉から前期末葉にかけての集落様相について―岩手県の事例を中心に―」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』XXX：29-48。
- 三浦謙一 2007 「北東北3県における縄文時代草創期・早期の様相」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』XXVI：1-24。

(※発掘調査報告書は省略する。)

参考文献

- 青森県埋蔵文化財センター 2000 『研究紀要』第6号(20周年特集号)。
- 村木 淳 2011 「新井田川下流域における縄文・弥生集落」『季刊東北学』26：44-66。

風張から是川へ

—新井田川下流域における縄文時代後・晩期の遺跡動態—

山形県埋蔵文化財センター

小林 圭一

1 はじめに

風張(1)遺跡は国宝「合掌土偶」を出土した遺跡として、また東北地方の縄文時代後期では極めて稀な環状集落として著明である。この集落は後期中葉十腰内3式期に成立し、後期末葉十腰内5式新段階に廃絶されたが、その後継の集団は新井田川対岸の是川中居遺跡に移住したと考えられている。

是川中居遺跡は高度な技術体系に裏打ちされた豊富な出土品から、縄文時代晩期亀ヶ岡文化を象徴する遺跡として大正期より衆目を集めてきたが、特に優れた漆工芸品は、学史上名高い「ミネルヴァ論争」において、石器時代下限の論拠の一つに位置づけられた経緯がある。また亀ヶ岡式土器の型式細別においても、同遺跡が果たした役割は極めて大きく(小林圭一 2010)、現在遺跡は是川石器時代遺跡として国の史跡、出土品は国の重要文化財に指定されている。同遺跡は近年(1999～2004年)史跡整備の一環として広範囲にわたり発掘調査が実施され、居住域や墓域等の集落構成が明らかにされると共に、低湿地から水場遺構や捨て場が検出され、水辺を利用した集落の内容が明確にされてきている。

本稿では、是川中居遺跡の母体になった風張(1)遺跡の集落の分析を通して、「なぜムラができ、消えたか？」に対する私論を提起して、新井田川下流域における縄文時代後・晩期の遺跡動態を考察する。なお本稿は、2014年12月21日八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館にて開催された公開研究会『八戸の集落一万年 八戸の縄文集落変遷—なぜムラができ、消えたか? Vol. 2—』(東北芸術工科大学東北文化研究センター主催)で、

筆者が行った口頭発表「八戸の縄文時代後・晩期—風張(1)遺跡集落の分析を通して—」の内容を改稿したものである。

2 風張(1)遺跡の位置と周囲の遺跡

(1) 風張(1)遺跡の位置

風張(1)遺跡(図6-1)は、青森県八戸市大字是川字^{えぞもり}狝森に位置する。遺跡中心の測地系は北緯40度28分26秒、東経141度30分4秒で、海岸部から内陸に約7km入った新井田川下流域の右岸、川に向かって北西に張り出した標高20～30mの舌状台地(根城段丘面)に立地している(図6-7)。台地は北側が新井田川により開析された沖積地、南側が狭い沢地に挟まれており、西方800mの新井田川の対岸(田面木段丘面)には国史跡「是川石器時代遺跡」(図6-2・3・5)が所在する。

風張(1)遺跡は東西約470m、南北約240mの範囲にあり、面積は約75,000㎡を測るが、比較的規模の大きな遺跡が集中する当該域においては中程度の規模に相当し、縄文時代早・中・後期、弥生時代、奈良・平安時代の集落跡となっている。1988～92年にかけて八戸市教育委員会により、遺跡範囲の1/5に当たる約15,000㎡が発掘調査され、縄文後期後半(十腰内3～5式)の環状集落が明らかとなっており、その成果は4冊の報告書にまとめられている(藤田編 1991、小笠原・村木編 1991、村木・小久保 2003、村木 2008)。

(2) 風張(1)遺跡の周辺の遺跡

風張(1)遺跡が立地する新井田川下流域の段丘上には、縄文時代の遺跡が多数分布してい

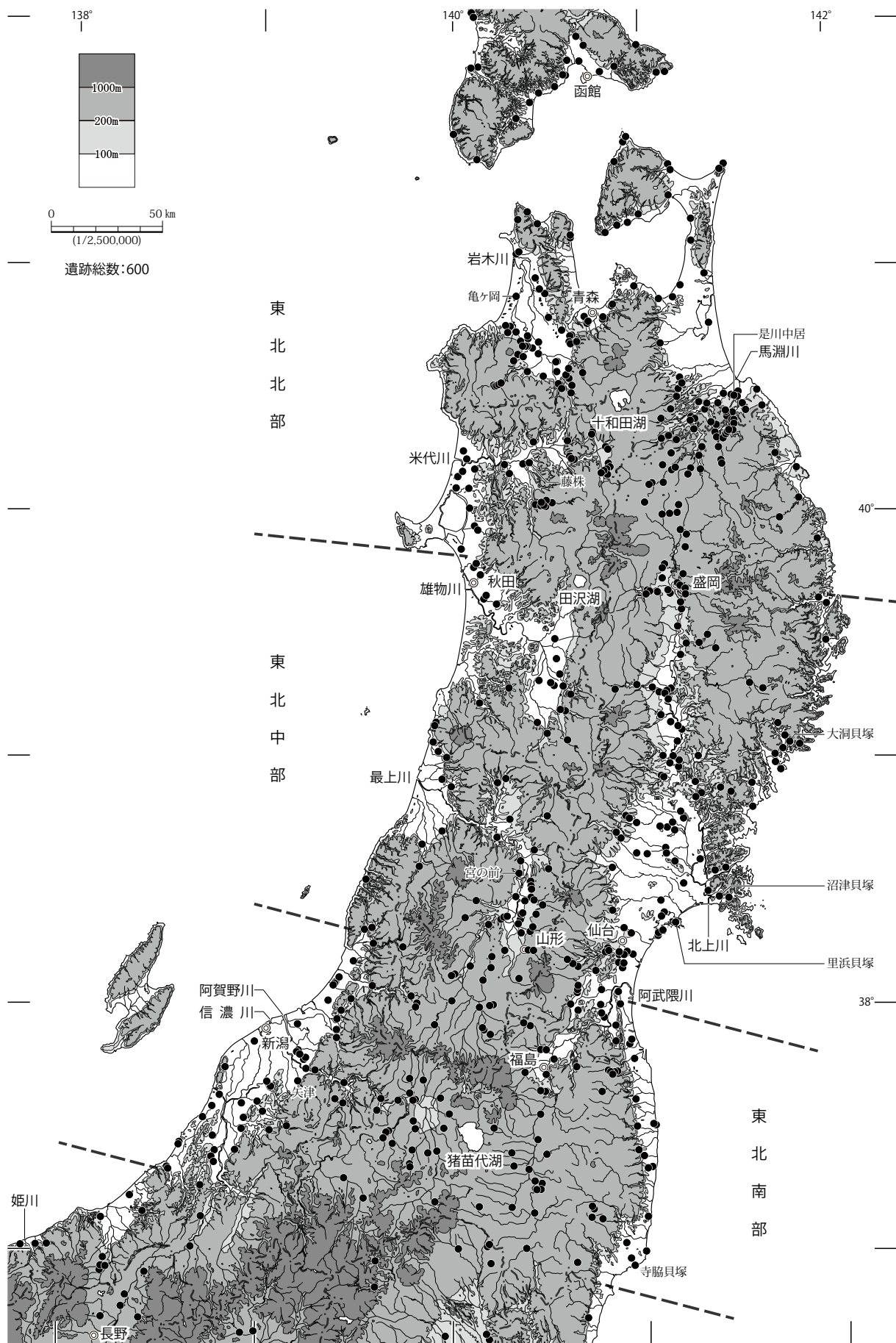


図1 東北地方の地域区分と縄文時代後期後葉～晩期末葉（弥生前期を含む）の主要遺跡

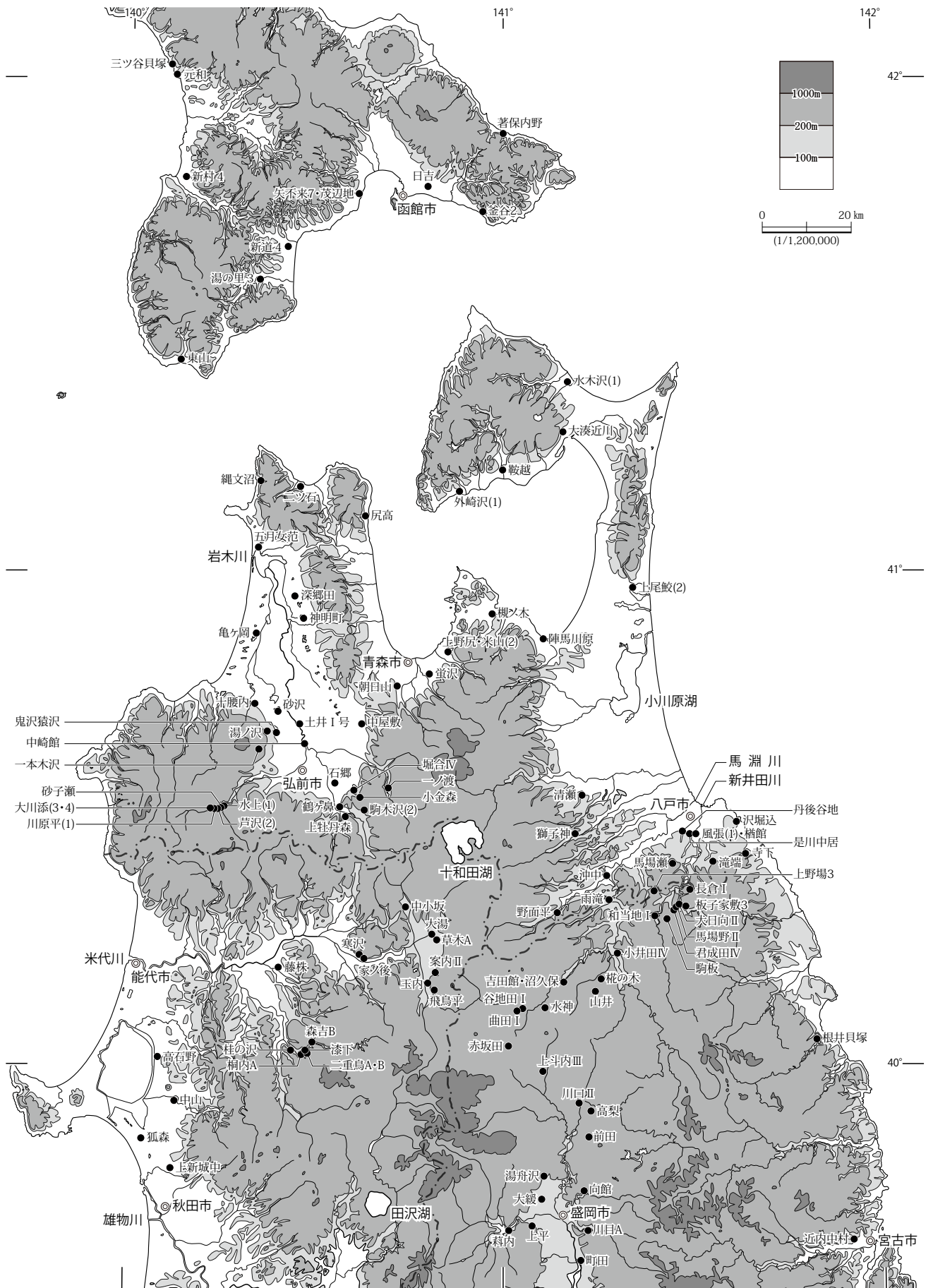


図2 渡島半島～東北北部における縄文時代後期後葉（瘤付土器期）の主要遺跡

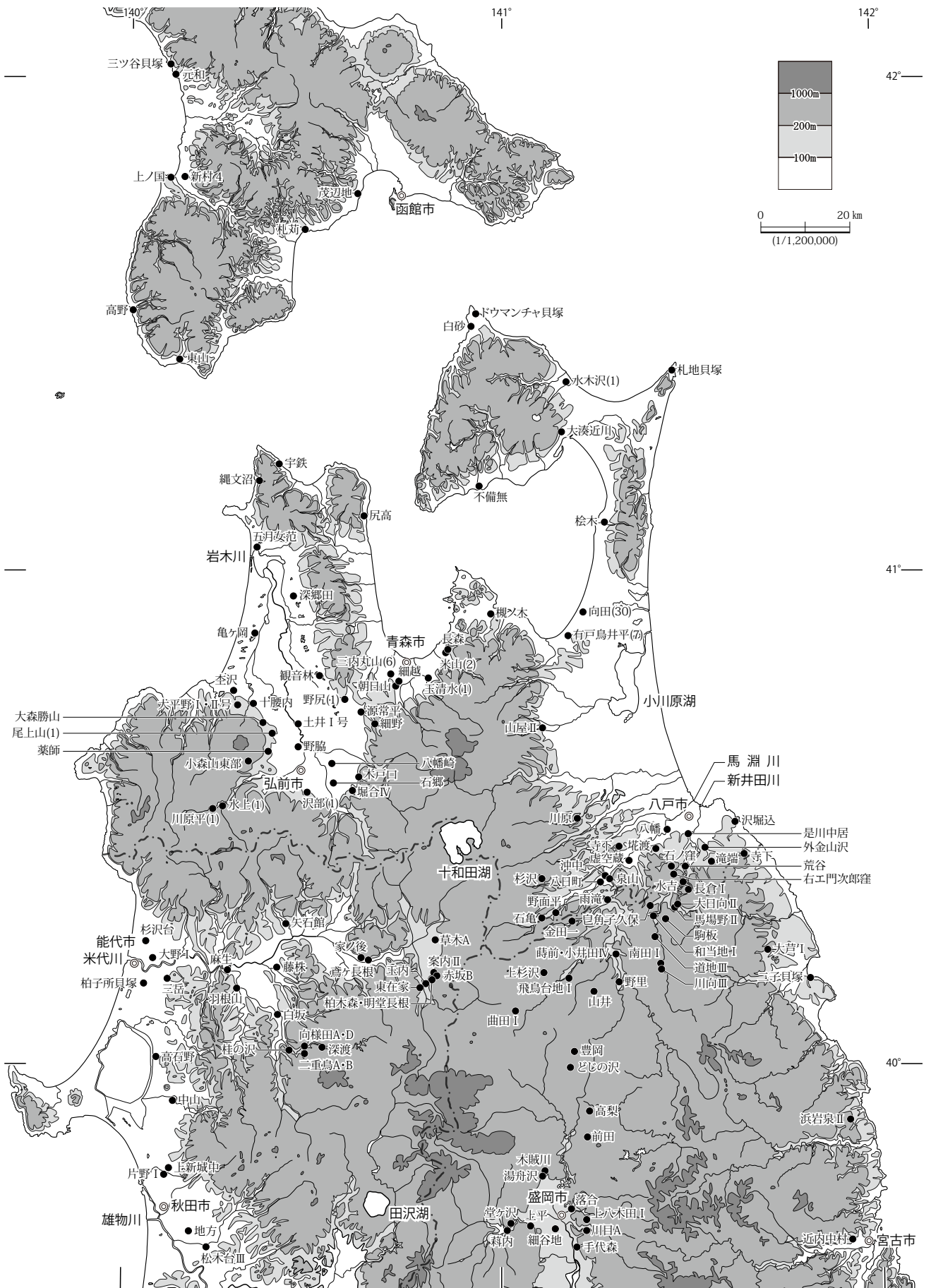


図3 渡島半島～東北北部における縄文時代晩期前葉（大洞B・BC式期）の主要遺跡

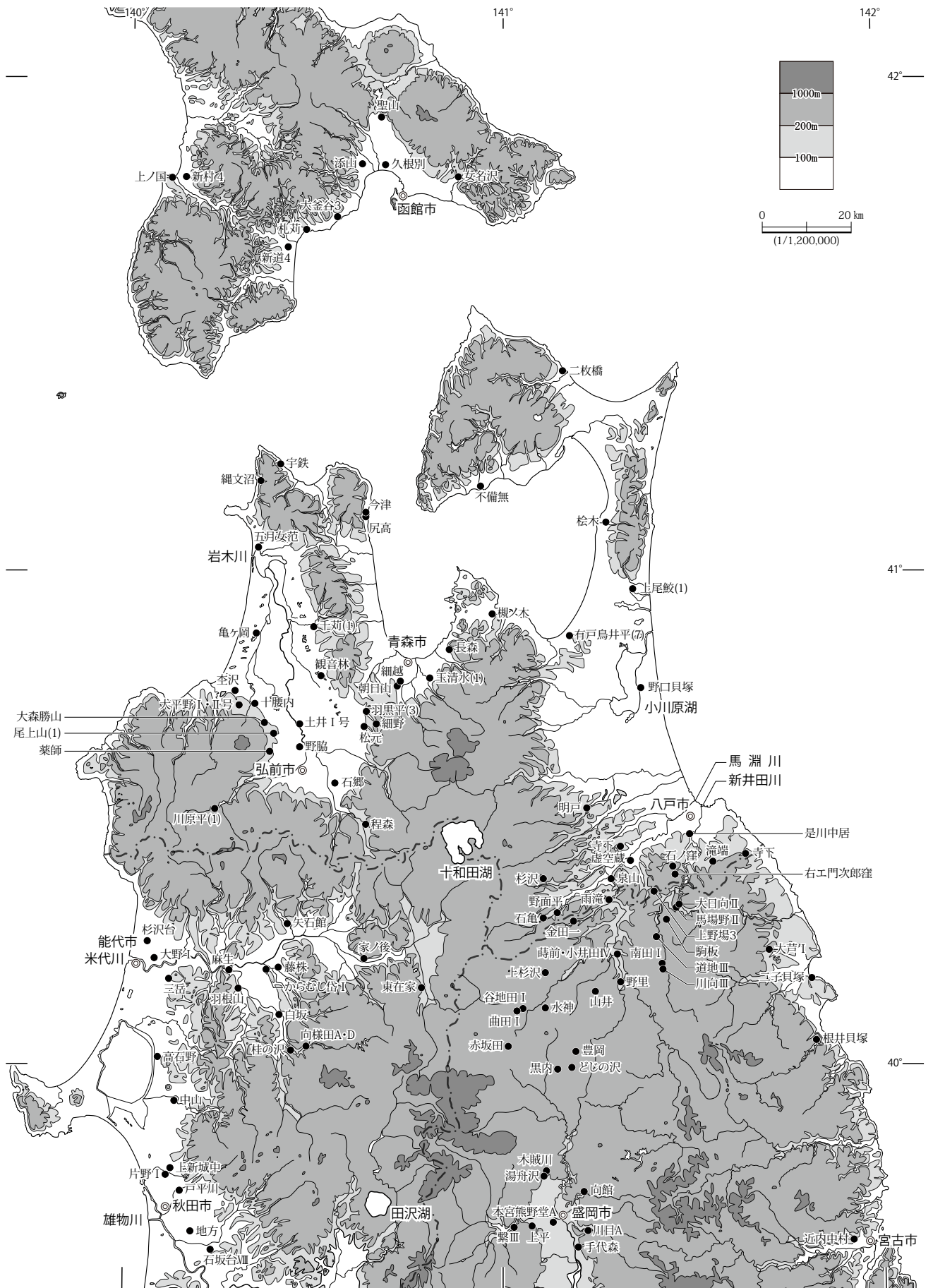


図4 渡島半島～東北北部における縄文時代晩期中葉（大洞 C1・C2 式期）の主要遺跡

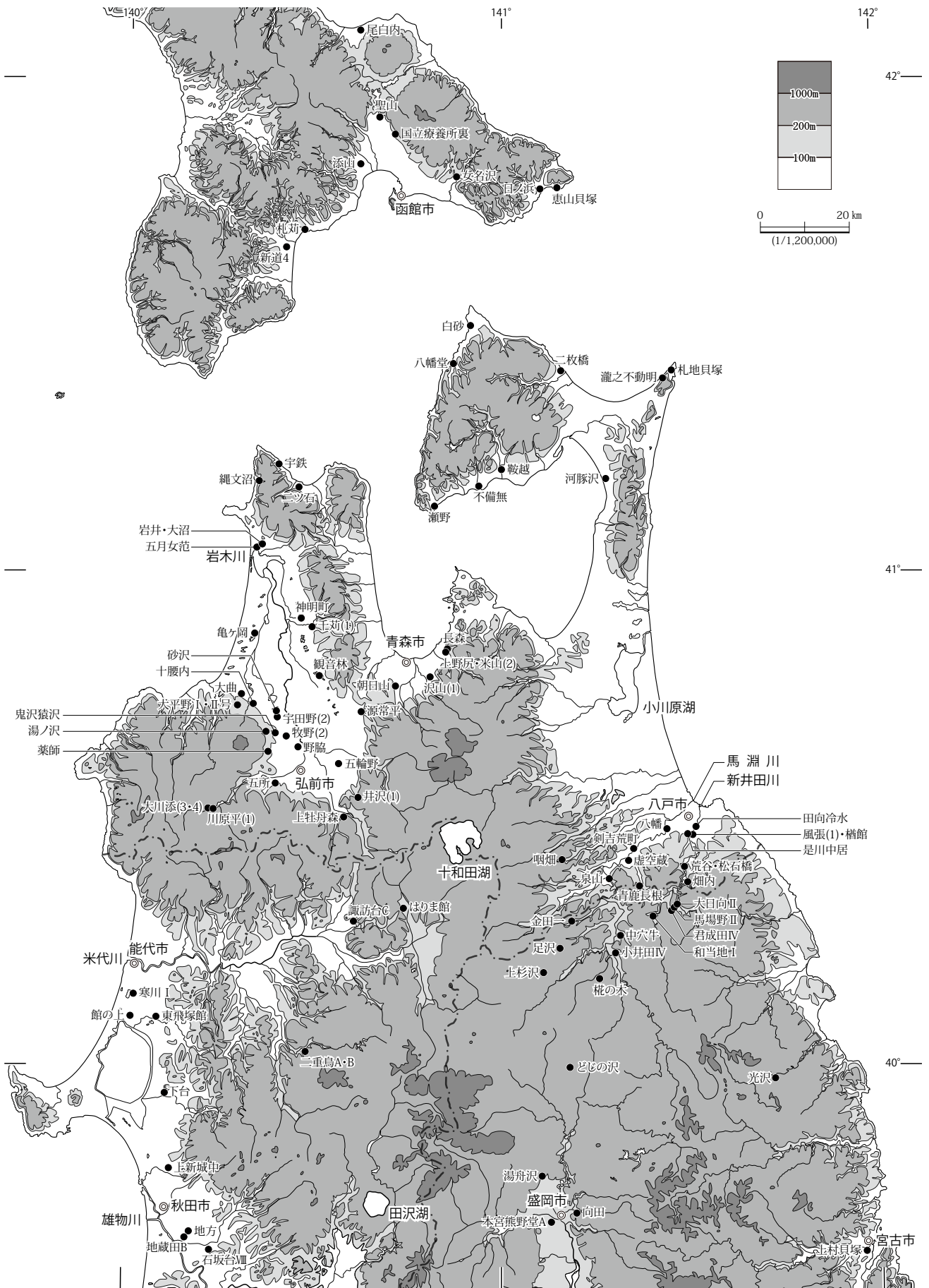


図5 渡島半島～東北北部における縄文時代晩期後葉（大洞A式～弥生前期）の主要遺跡

る。図6は国土地理院発行1/25,000「新井田」と「^{とまべち}苦米地」の地形図を合成したものであるが、4km四方の図幅内に縄文時代の遺跡が47ヶ所周知されている（青森県教委2009）。時期別では早期が15遺跡、前期が19遺跡、中期が20遺跡、後期が38遺跡、晩期が11遺跡、弥生時代が9遺跡を数え、後期の遺跡数が際立っており、青森県内でも最も遺跡密度の濃い地域で、著名遺跡も少なくない。当該域の主要遺跡の消長については、表2に示した通りである。

図6の図幅内で最古の遺跡は、旧石器時代の^{たむかいひやみず}田向冷水遺跡(23)である。同遺跡では基部の挟れが特徴的なナイフ形石器12点を含む石器類が約4万点出土し、青森県の太平洋側では旧石器時代の初めての調査事例となっている。縄文時代草創期では是川中居遺跡(2)で爪形文土器が出土しており、続く早期中葉では田向遺跡(22)と^{たてひら}館平遺跡(21)で竪穴住居跡が検出され、縄文海進がピークを迎える以前に定着的な集落が出現した。そして海水が低地一帯に入り込む早期後葉になると、赤御堂遺跡(12)で貝塚が形成され、漁撈を主体とした生活様式が明らかとなった。

前期に入ると新井田川下流域に拠点的な集落が出現し、断続的だが弥生時代に至るまで有力な地域圏が形成された。その嚆矢となったのが左岸に位置する^{かたの}潟野遺跡(7)であろう。同遺跡では前期初頭11棟、前期前葉2棟の竪穴住居跡が検出され、定着的な拠点集落が成立したと考えられる(中村ほか2007)。そして炭素年代で5400¹⁴CBP、較正年代では5900calBPとされる十和田中^{ちゅうせり}掘テフラ(To-Cu)の降下直後の円筒下層式期には、隣接した是川一王寺(1)遺跡(3)に主体が移り、中期中葉円筒上層式期までの長期間大規模な集落が継続した。同遺跡は1926年に長谷部言人・山内清男氏により発掘調査され、「円筒土器」命名の契機となった該期を代表する貝塚並びに集落跡であり、国史跡「是川石器時代遺跡」の一角を構成する。これまでの調査で、竪穴住居跡、土坑、捨て場、埋設土器が検出されたほか、前・中期の良好な包含層も確認され、また低湿地区域には木製品等の有機質遺物の存在が予想されている。そして中期中葉～後葉には、新井田川左岸の^{いしてあらい}石手洗

遺跡(24)と対岸の松ヶ崎遺跡(13)に大規模な集落が形成された。両遺跡とも調査区域が限定的で遺跡の全容は明確でないが、中期後半の豊富な遺物が出土し、遺構密度が極めて高いことが知られている。なお松ヶ崎遺跡の西側は西長根遺跡として登録されていたが、現在は松ヶ崎遺跡に統合されている。

中期末葉～後期初頭にかけては集落規模が縮小し、分散化の傾向が顕著で、新井田川下流域に大規模集落を指摘することはできない。後期は遺跡数が増加するが、後期前葉～中葉(十腰内1～2式期)には当該域に是川一王寺(1)遺跡(3)、是川堀田遺跡(5)、風張(1)遺跡等の比較的小規模な集落が存したのに対し、図幅西端の馬淵川支流の^{つちはし}土橋川沿いに有力な地域圏が形成されており、丹後谷地(1)遺跡(41)と^{たものきたい}田面木平(1)遺跡(図幅外)が拠点的な集落であった。そして続く十腰内3式期に風張(1)遺跡に環状集落が成立し、後期末葉(十腰内5式新段階)まで継続した。その後対岸の是川中居遺跡(2)に主体が移行し、弥生時代前期までの長期にわたって同遺跡が拠点集落の地位を占めていたと考えられる。

是川中居遺跡は国史跡「是川石器時代遺跡」の中核を占める亀ヶ岡文化を代表する遺跡であり、大正期～昭和初期にかけて泉山兄弟(岩次郎・斐次郎氏)による発掘調査が行われ、山内清男氏(山内1930)が大洞BC式設定に当たり、秋田県北秋田市藤株遺跡と共に参考に供した遺跡として特筆され、取り分け泉山兄弟の協力を得て1929年に実施された大山史前学研究所(甲野勇・竹下次作氏等)による南側低湿地の調査(甲野1930)が著名である。近年では1999～2004年の6ヶ年にわたり、史跡整備に伴う発掘調査が八戸市教育委員会によって実施されたが、これまでの調査で後期後葉～弥生時代前期にかけての夥しい量の遺物が出土すると共に、該期の竪穴住居跡、土坑墓等の遺構の他に、特殊泥炭層(クルミ・トチ等の堅果類主体)が検出され、その中から木製品や漆製品が豊富に出土した。これ等の遺物は、高度な技術に裏打ちされた豊かな物質文化の内容を明白にし、亀ヶ岡文化のイメージ形成に大きく寄与したと言ったことができ、遺跡は1957年に国史跡、



図6 風張(1)遺跡とその周辺の縄文時代遺跡

表1 風張(1)遺跡周辺の縄文時代遺跡

No.	遺跡名	種別	時期	No.	遺跡名	種別	時期	No.	遺跡名	種別	時期
1	風張(1)	集落跡	早～晩期・弥	17	寺の上	包蔵地	中期	33	糠塚大開(1)	包蔵地	中・後期
2	中居	集落跡	早～晩期・弥	18	黒坂	包・集落	後期	34	長久保(1)	包蔵地	早～後期
3	一王寺(1)	集落跡	中期	19	赤坂	包蔵地	後期	35	狐森	包蔵地	前～後期
4	一王寺(2)	貝塚	中期	20	留流	包蔵地	前・中期	36	山内	包蔵地	前～後期
5	堀田	包蔵地	中～晩期・弥	21	館平	集落・城	早・中・後期	37	休場	包蔵地	後期
6	新田	集落跡	早～晩期	22	田向	集落跡	早・前・後期・弥	38	鍋久保	包蔵地	後期
7	瀧野	集落跡	早～晩期・弥	23	田向冷水	集落跡	早・前・後期・弥	39	沢里山	包蔵地	後期
8	風張(2)	包蔵地	後・晩期	24	石手洗	集落跡	早～晩期	40	二ツ屋	包蔵地	後期
9	風張館跡	城館跡	後・晩期	25	狐平	集落跡	後期	41	丹後谷地(1)	集落跡	前～後期
10	檜館	集落・城	前・後・晩期・弥	26	雷	包蔵地	中期	42	丹後谷地(3)	包蔵地	後期
11	上樋田	包蔵地	縄文	27	中居林	集落跡	後期・弥生	43	丹後谷地(5)	包蔵地	後期
12	赤御堂	貝塚・集	早期	28	大沢	包蔵地	前・後期	44	小峠	包蔵地	後・晩期
13	松ヶ崎	集・貝塚	早～後期	29	惣善前	包蔵地	前・後期	45	鍛冶畑	包蔵地	後期
14	弥次郎窪	集落跡	早・前・後・晩・弥	30	糠塚小沢	集落跡	後期	46	坊坂	包蔵地	中期
15	志民	包蔵地	早・後期	31	長久保(2)	集落跡	早～後期	47	天狗沢	包蔵地	早・後期
16	上ノ沢	包蔵地	後期	32	糠塚大開(2)	包蔵地	前期				

表2 新井田川流域の主要遺跡の消長 (宇部・横山 2012 改変)

時代	時期区分	土器型式	新井田川左岸					新井田川右岸				
			中居遺跡	一王寺(1)遺跡	堀田遺跡	潟野遺跡	石手洗遺跡	田向遺跡	風張(1)遺跡	楢館遺跡	松ヶ崎遺跡	館平遺跡
縄文時代	草創期	無文土器										
		隆線文土器										
		爪形文土器	■									
		多縄文系土器	■									
	早期	日計式						■	■			
		白浜式	■	■				■	■		■	
		根井沼式						■				
		寺の沢式						■			■	
		吹切沢式				■						■
		鳥ノ木沢式				■						
		物見台式	■	■					■			
		ムシリI式	■					■			■	■
		赤御堂式	■									■
		早稲田5類										
		表館IX群										
		前期	長七谷地Ⅲ群				■					
	早稲田6類					■			■			
	表館式									■		
	円筒下層a式			■		■						
	円筒下層b式			■		■						
	円筒下層c式			■		■					■	
	円筒下層d1式			■		■					■	
	円筒下層d2式			■		■						
	円筒上層a式			■		■			■		■	
	円筒上層b式			■		■						
	中期	円筒上層c式		■		■				■		
		円筒上層d式	■	■		■		■		■		
		円筒上層e式	■	■		■		■		■		
		榎林・大木8b式	■	■		■		■		■		
		最花・大木9式		■		■		■		■		
		大木10式		■	■	■		■		■		■
		牛ヶ沢式・沖附式・弥栄平式	■	■	■	■		■		■		■
		十腰内I式		■		■		■			■	■
後期	十腰内II式		■		■		■					
	十腰内III式		■		■		■					
	十腰内IV式	■			■		■	■			■	
	十腰内V式	■			■		■	■			■	
	大洞B式	■	■		■							
晩期	大洞BC式		■		■							
	大洞C1式	■			■							
	大洞C2式	■			■							
	大洞A式	■	■		■							
	大洞A'式	■			■							
弥生前期	砂沢式	■		■	■			■				
	馬場野II式		■		■		■					

■ 遺構が検出された時期 ■■■■ 遺構外遺物

また出土品 633 点は 1962 年に国の重要文化財に指定され、2011 年には八戸市教委調査資料 330 点が追加指定されている。

是川中居遺跡には、弥生時代前期砂沢式期まで集落が営まれた。2002 年に調査された新井田川寄りの G 区 (図 21) では、竪穴住居、土器棺、土器集中区が検出され、砂沢式土器と共に遠賀川系土器が多く出土した。また北海道の縄文文化に特徴的な石偶も出土しており、西方からの農耕文化の影響と共に、北方との交流関係が推定されている (村木・小久保 2004)。なお隣接した是川堀田遺跡 (5) では靱圧痕を持つ砂沢式の鉢形土器が出土しており、新井田川沿いには^{ならだて}柗館遺跡 (10) や是川中居遺跡の約 15km 上流に^{あらや}荒谷遺跡、約 20 km 上流に^{はたない}畑内遺跡といった同期の良好な遺跡が点在する。是川中居遺跡が新井田川遺跡群の基幹集落であった可能性は高いと思われるが、続く馬場野Ⅱ式期になると集落が途絶え、周辺の是川一王寺 (1) 遺跡や風張 (1) 遺跡、弥次郎窪遺跡 (14)、田向冷水遺跡、田向遺跡等に分散しており、中期以降は遺跡数が減少し、風張 (1) 遺跡や田向冷水遺跡、柗館遺跡で竪穴住居跡が検出されたに過ぎない。

上記したように風張 (1) 遺跡が位置する新井田川下流域には、縄文時代を通じて大規模な集落が形成されていた (表 2)。潟野遺跡 (前期初頭～前葉) → 是川一王寺 (1) 遺跡 (前期中葉～中期中葉) → 石手洗・松ヶ崎遺跡 (中期中葉～後葉) → (中期末葉～後期前葉) → 風張 (1) 遺跡 (後期中葉～末葉) → 是川中居遺跡 (後期末葉～弥生前期) → 風張 (1) 遺跡 (弥生前期～中期) と遷移するが、風張 (1) 遺跡の半径 1 km 圏内に長期にわたって大規模集落が継続したことになる。このような営みを可能としたのは、当該域が豊富な資源に恵まれただけでなく、遺跡間交流の要衝になっていたからで、新井田川に面し且つ海岸部にも数 km と近接した地の利が、大きく関連していたと考えられる。取り分け是川中居遺跡は漆作業を日常的に行った漆器生産地で、在地的に技術基盤が発展・継承されていた可能性が高く、集積された技術の習得や情報入手等での他集団の頻繁な往来、また葬祭儀礼に参集する集団の交流の場になっていたと推定

されている (宇部・横山 2012)。

3 風張 (1) 遺跡の集落構成

風張 (1) 遺跡のこれまでの調査で検出された全体の遺構数は、竪穴住居跡 266 棟、竪穴遺構 7 棟、掘立柱建物跡 23 棟、土坑 1,552 基、土坑墓 130 基、溝状遺構 4 基、埋設土器 3 基、屋外炉 43 基、集石遺構 4 基、溝 3 条、環濠 1 重である。そのうち縄文後期後半の遺構は、竪穴住居跡 187 棟 (総数の 70%)、竪穴遺構 2 棟 (同 29%)、掘立柱建物跡 22 棟 (同 96%)、土坑 341 基 (同 22%)、土坑墓 130 基 (同 100%)、埋設土器 3 基 (同 100%)、屋外炉 9 基 (同 21%) であった (村木 2008 : 226 頁)。竪穴住居跡の 7 割、掘立柱建物跡の 9 割以上、土坑墓と埋設土器では全てを縄文後期後半が占めており、該期には新井田川下流域の拠点集落として多数の構成員を擁していた。

集落構成 縄文後期後半の集落は、遺跡範囲の南東側を占めている (図 7)。該域は南西方向に緩く傾斜した標高 20 ~ 26 m の斜面で、南端は南東から北西方向に開析された 20 ~ 50 m 幅の狭い沖積面に臨んでいる。南側斜面は東西幅約 140 m × 南北幅約 100 m の範囲で調査されたが、ほぼ全面に遺構が展開していた。集落の広がり直径 110 ~ 130 m の範囲にあり、東西の二大群からなる土坑墓群を中心として、土坑と掘立柱建物を取り囲み、外縁に竪穴住居が同心円状に配置されており、該期では稀有の重帯構造^{註1)}を持った環状集落となる (図 8)。また集落の南端が丘陵下端付近まで延びることから、遺跡の範囲外となる南側の沖積面には、捨て場や沢水を利用した水場遺構が形成されていた可能性が考えられる。なお図 8 に示した調査区域では、縄文後期後半以外に縄文早期の住居跡が 1 棟、同中期後葉～末葉 7 棟、弥生時代前期 10 棟、同中期 12 棟、古代 10 棟が検出されている。後期前葉の集落は平坦面が狭い舌状台地の先端部に形成され、住居跡 11 棟が検出されている。

土坑墓 集落の中心に位置する土坑墓は 130 基を数えるが、いずれも縄文後期後半に位置づけられる。東西の二大群から構成され、西側の A 群は

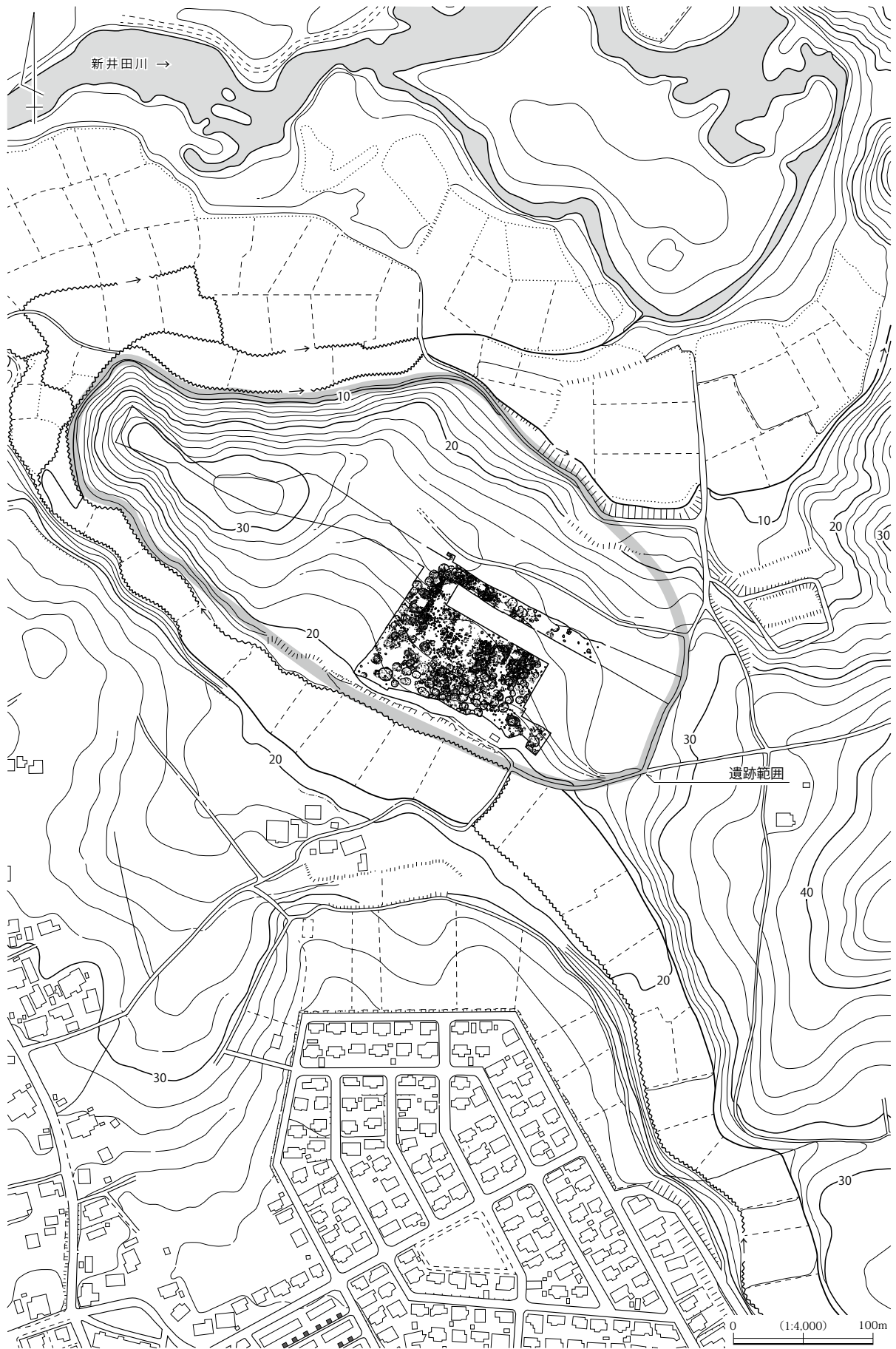


图7 青森県八戸市風張(1)遺跡全体図



図8 風張(1)遺跡における縄文時代後期後半の集落構成

東西14m、南北16mの範囲に61基、東側のB群は東西11m、南北10mの範囲に69基が集中しており、両群は15m程度離れている。土坑墓同士の重複はB群の方に顕著に見られ、長軸方向

は両群共に東西方向のものが卓越するが、B群には南北方向もやや多く認められる。平面形態は楕円形・不整楕円形・長方形が多く、円形は少なく、断面形は箱状のものが多数を占める。規模は

長軸 90～140cm、短軸 50～90cmが一般的で、底面に周溝・溝・ピットが付随するものが 25 基（総数の 19%）、土坑墓内に礫を伴ったものが 11 基、赤色顔料が検出された遺構が 13 基、人骨が出土した土坑墓が 2 基（第 8・96 号土坑墓）検出されている。また石製の玉類が 20 基から出土しており、特に第 72 号土坑墓（B 群）では 133 点の玉が出土し、遺体に装着された装身具であったと解釈されている。A・B 両群とも形態や年代に差異は認め難いが、A 群では赤色顔料が検出された土坑墓（A 群 12 基、B 群 1 基）が多いのに対し、B 群では玉類の出土数が多いと言った特徴（A 群 8 基 61 点、B 群 12 基 231 点）が認められる（工藤ほか 2009：38 頁）。なお土坑墓と重複した住居跡はいずれも弥生時代の所産であり、縄文後期後半には墓域と居住域が厳密に区分されていた。

土坑 土坑は住居帯の内側の内径 40 m から外径 80 m の範囲で多く検出された。土坑の総数は 1,192 基で、そのうち後期の土坑は 785 基であるが、時期特定の可能な土坑は少なく、後期後半は 341 基に過ぎない（村木 2008：140 頁）。平面形は不整円形や不整楕円形、断面は箱状や台形状を呈し、規模は上端が 70～120cm、深さ 50cm 以下が多い。然程深くないが、貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑や円筒状土坑が多数を占めており、その他に土坑墓や柱穴と思われる例も含まれている。堅果類が出土した土坑は 8 基に過ぎないが、第 330 号土坑（土坑墓 A 群の西側）でトチノキ、第 663 号土坑（土坑墓 B 群の東側）でクルミ、第 671 号土坑（土坑墓 B 群の東側）でクリが出土した（図 8）。

掘立柱建物跡 掘立柱建物跡は住居帯の内側の内径 55 m から外径 90 m の範囲で、1 間×1 間が 17 棟と 1 間×2 間が 5 棟の計 22 棟が検出された（村木 2008：135 頁）。前者は方形・長方形・台形・菱形を呈し、大きさは 2.9～4.9 m で、後者は樽形・長方形を呈し、短軸 3.3～5.2 m、長軸 4.8～6.2 m である。全体に柱間寸法は一定しておらず、竪穴住居跡の支柱穴に比べ深く大きく、柱痕が認められたものもある。住居帯との境界付近にいずれも竪穴住居（十腰内 4 式古段階～同 5 式古段階）を切って構築され、掘立柱建物同士の重複も顕著

で、大きく 4 箇所ブロックに分けることができる（図 8）。そのうち 3 箇所は集落の南半に存しており、南東側 8 棟、南側 4 棟、南側～西側 8 棟で構成され、斜面上位の北側は僅か 2 棟に過ぎない。また主軸方向が土坑墓群を向く傾向が見られるものの、求心性はあまり顕著でなく、主軸が明確な亀甲形は存在しない。従って土坑墓群との対応関係は不明瞭と言わざるを得ず、埋葬に関連した施設であったかどうかは判断できない。

竪穴住居跡 竪穴住居跡は内径 60～70 m、外径 110～130 m の範囲に 187 棟（筆者の集計では 188 棟）が構築されていた。内側の住居は土坑墓群より 10 m 以上離れており、上記した掘立柱建物跡に切られている。住居同士の重複が著しく、斜面上位の北側と下位の南側に集中するが、前者の住居帯の幅が 20 m 程度であるのに対し、後者の方は 30 m 程度と広い傾向が見られ、住居帯の遺構数の粗密から、六つの住居群に分割することが可能と思われる（図 8）。その内訳は、斜面上位が「北側」（21 棟）と「東側」（13 棟）、「南東側」（23 棟）のブロック、斜面下位が「北西側」（25 棟）と「西側」（22 棟）、「南側」（84 棟）のブロックで、「南側」ブロックが半数近くを占めるが、飽くまで遺構の希薄な区域から便宜的に区分したに過ぎず、分節構造^{注1)}を反映しているとは言い切れない。また多くの住居は長軸方向の外縁中央に出入り口施設（平行した縦長の溝）を有するが、斜面下方の南向きに設けられた例が多く、土坑墓群との対応関係は明確でない。

風張 (1) 遺跡の縄文後期の竪穴住居跡について村木淳氏は、出土土器（十腰内第Ⅲ～Ⅴ式相当）から A・B・C 類に三分している。古段階の A 類は刻目列を有する土器群、中段階の B 類は刻目列が縄文施文に変化した土器群、新段階の C 類は沈線間に等間隔に貼瘤や刺突等を持った土器群^{注2)}であるが、住居形態は A 類と B 類に違いは認められず、A・B 類と C 類とに二分された（村木 2005）。

村木氏が指摘した古・中段階の A・B 類の住居跡（筆者の十腰内 3 式、同 4 式古・新段階）の特徴は、以下の通りである。

・円を縦に押しつぶしたような横長の楕円形を

呈する。

- ・横長の外縁中央には出入り口ピットが確認される。
- ・炉は住居ほぼ中央から出入り口に寄った位置に検出され地床炉である。
- ・支柱穴は4本で炉を中心に囲むが、出入り口付近のピットは間隔が狭く、奥が広い逆台形状を呈する。
- ・壁際には小ピットが巡らされている。

一方、貼瘤や刺突列を施した新段階のC類の住居跡（筆者の十腰内5式古・新段階）の特徴は、以下のように指摘されている。なお出入り口施設やその方向については、先行型式と同様である。

- ・楕円形から円形に近づき、壁が浅くなる。（もともと掘り方が浅いのか、削平されているのか、後期末葉から晩期の住居はこのよう傾向がみられる）
- ・炉は地床炉から石組み炉へ次第に変化する。

上記したように風張(1)遺跡の住居形態は、十腰内3・4式期と同5式期の間で大きな変化が存しており、村木氏の集計では前者が67棟、後者が76棟を数え（村木2008：228頁）、前者の住居

跡が集落の南側に偏在したのに対し、後者では土坑墓群を均一に取り囲む傾向が認められる。規模は長軸4～6m程度が多く、長軸8m超の大型住居も9棟存するが、大型住居は後者に帰属する例が多い^{注3)}。

4 風張(1)遺跡出土土器の型式区分

風張(1)遺跡では竪穴住居跡の床面・覆土から出土した土器を中心に、十腰内3式→同4式古段階→同4式新段階→同5式古段階→同5式新段階の5階梯の変遷を辿ることが可能である。詳細は拙稿（小林圭一 2015）に譲り、以下では各型式の器種毎の特徴を総括する（図9～12）。

(1) 風張(1)遺跡出土の十腰内3式について（図9-1～26）

十腰内3式は、風張(1)遺跡の第13・45・106・144号竪穴住居跡が指標となり、仙台湾地域の宝ヶ峯3式、関東地方の加曾利B3式が併行関係にあり（表3）、第144号竪穴住居跡では「類杖土偶」（図13-1）が出土している。当該型式の器種構成は、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器、

表3 東北地方縄文後期後半の編年研究の比較

関東地方	東北中部		東北北部				
	小林圭一 (小林2010)	田柄貝塚 (手塚1986)	磯崎正彦 (今井・磯崎1968)	小林圭一 (小林2015)	中門亮太 (中門2013)	関根達人 (関根2005)	鈴木克彦 (鈴木1997・98)
加曾利B3式	宝ヶ峯3式	第Ⅲ群土器 (一部)	十腰内第Ⅲ群	十腰内3式		十腰内Ⅲ群段階	十腰内3式
曾谷式	瘤付第Ⅰ段階 (西ノ浜式)	第Ⅳ群土器	十腰内第Ⅳ群	十腰内4式 古段階	第1期の土器群	十腰内Ⅳ群段階	十腰内4式
			十腰内第Ⅴ群 (古手のグループ)	十腰内4式 新段階		第2期の土器群	馬場瀬段階
安行1式	瘤付第Ⅱ段階 (金剛寺1式)	第Ⅴ群土器	十腰内第Ⅴ群	十腰内5式 古段階	第3期の土器群	滝端段階	十腰内5b・5c式
安行2式 (古)	瘤付第Ⅲ段階 (金剛寺2a式)	第Ⅵ群土器		十腰内5式 新段階	第5期の土器群	(未命名段階)	大湊近川式
安行2式 (新)	瘤付第Ⅳ段階 (金剛寺2b式)	第Ⅶ群土器	十腰内第Ⅵ群	十腰内6式 (一部)	第6期の土器群	駒板段階	十腰内6式 駒板式
安行3a式 (古)	大洞B1式	(+)		大洞B1式 (十腰内6式)			

(中門2013：79頁)を参照して作成

注口土器を基本とし、台付の異形土器や単孔土器等が加わる。口縁部や屈曲部の刻目帯に特徴づけられ、クランク状の磨消文様が盛行する。縄文地文では0段多条の同一原体の異方向回転による羽状縄文が多用されるが、異原体による羽状縄文も一定数存している。

深鉢形・鉢形土器には、口頸部が直上したA類(図9-9・14)と頸胴部界で屈折したB類(2・3・5~7)、3段構成のC類(1)が存する。主体を占めるのはB類であり、C類はその変異とも言えるが少数でしかなく、十腰内2式に出現し当該型式で姿を消す。いずれも体部には、パレットナイフ状のネガ文様による磨消文様が幅広く展開し、縄文部の占める割合が高くなっており、無文部は一段低く作出される傾向が見られる。B類の深鉢形土器は5単位(4~6単位)の大波状口縁で、底部から体部にかけて緩やかに内彎して立ち上がり、頸胴部界で強く屈折して、頸部は内彎気味に外傾する。口端は丸味を持って内側に肥厚したり、内削ぎ状に肥厚するが、波頂部は鋭角的な山形や緩やかな花卉状を呈し、内側に強く肥厚しており、波底部に小突起を配した例(1)も見られる。口縁部と屈曲部には刻目帯が巡らされるが、まだ貼瘤は認められない。頸部文様帯が無文となり、体部がクランク状の磨消文様で構成されるのが通例であるが、頸部に磨消文様が展開した例(5)も存する。但し当該型式では、頸部と体部の磨消文様が異なるモチーフで描出される。また平縁の例(2)も存するが、口端には小突起が配される。

A類の深鉢形・鉢形土器(9・10・14・19)は、底部から直線的に外傾して立ち上がるバケツ形の器形で、器高が口径より下回る例が多い。大半は口端が画されず、体部文様が露出しており、パレットナイフ状のネガ文様によるクランク状又はそれに類した磨消文様で構成される(9・14)。

装飾鉢形土器では、頸胴部界が屈折し口頸部が短く立ち上がる広口壺の器形が盛行する(12・13)。口径と胴径が近似又は胴径が上回り、口縁部と屈曲部に1~2列の刻目帯を巡らし、頸部が無文、体部がクランク状の磨消文様で構成される。13のように刻目列が多条化(2列以上)した例

も認められる。

粗製深鉢形土器は、底部から口縁部にかけて直線的又は緩い内彎気味に外傾して立ち上がり(11)、口端が肥厚した例が多い。器面は0段多条の原体による斜行縄文が施されるが、異原体による羽状縄文を施文した例も、第106号竪穴住居跡で確認されている。また粗製の鉢形土器(4)の器形についても、同様の特徴が指摘される。

浅鉢形土器は器高が口径の1/3前後の比較的浅い鉢形土器を指すが、料理用ボールの形状を呈した椀形(16)や直線的に外傾した例(15)、高台付(17)等が認められる。文様は曲線的な磨消文様(16)や沈線文様(15)、無文(22)等が存しており、また後続型式に特徴的な台付皿形土器(26)も出現する。

壺形土器は注口土器との区分が困難であるが、球胴形の体部にパレットナイフ状のネガ文様による曲線的な磨消文様が展開する(18・20)。注口土器では、23が後期中葉に特徴的な「宝ヶ峯型注口土器」に該当する。短い口頸部と丸く球状を呈した体部の2段作りで、体部に半肉彫的手法で曲線文様(背向した弧線文様)が描出され、器面全体が研磨され光沢を有する。24は3段作りの注口土器で、頸部が凸彎し、口縁部が短く直立し、口端に小突起が配される。口縁部や凸彎部に刻目帯が巡らされ、体部は木葉状の磨消文様で構成される。十腰内3式には注口土器に優品が多い点が指摘されている(今井・磯崎 1968)。しかし当遺跡に限っては、後続型式に見られる大型注口土器の優品を指摘することができない。単孔土器は3段作りの壺形の器形で、底部直上に円孔を持つが、体部には木葉状の繁縷化した磨消文様が展開する(21)。なお壺形土器・注口土器・単孔土器の体部中央や頸部には、他の器種に先駆けて瘤状突起が現れるが、大粒で刻目を加えた貼瘤が多く見受けられる(21・23・24)。

台付異形土器(25)は口頸部・体部・脚部の3段で構成され、体部中央には一對のラッパ状の突出部とシンメトリーとなる「3」字状の磨消文様が配される。関東地方の加曾利B式との共通性が見られ、広域的な拡がりを持った器種であることを示している。